

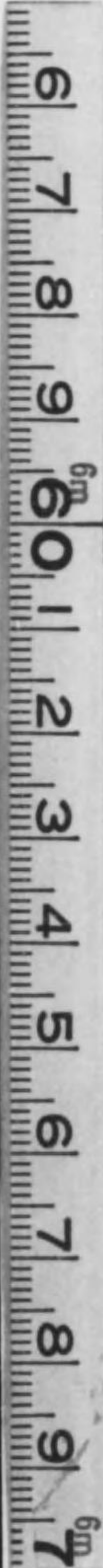
343-1



1200501401040

243

1



始



343-1

支那事變 忠勇列傳第五卷正誤表

頁	行	正	誤
九	五	孝子	孝士
一四	末	齊家宅	齊家屯
本文之部			
三一	末	銃砲火	銃砲火
四一	一	爾後工兵	爾後兵
四六	一六	井陘	井徑
六〇	一一	十年三月	三日
七三	一六	中隊は北支に到着	中隊は到着
七五	一三	大正三年六月五日	三年五日
二二〇	一一	(HS)	S
二七五	三	戰闘間	戰闘期
二七八	六	昭和	和
二八二	一二	神戸市立	神戸立
二八五	一五	妓に	慈に
三一九	一六	多數を有す	多數を爲す
三二〇	八	負傷	負像
三二九	三	西保障	西保際
四四八	二	貫通銃創	貫進銃創
四九六	七	北相各莊	北相谷莊
五二八	一〇	拒馬河	拒馬何
五五六	三	奮闘して	奮闘して
六二九	六	命を受け	命を命け
六四七	一一	井陘	井涇
七〇七	六	勅語煥發	渙發
七八〇	一六	障碍	障碍

3P3-1  
社團  
法人  
忠勇顯彰會編纂

支那  
事變  
忠勇列傳  
陸軍之部第五卷



發行所寄贈本

明治天皇 御製  
世と共に譲りて  
万民の福を  
為すを  
願ふ

後在伯野東邦平八申清書



忠勇

守正王



元本會明繪載 侯爵 東郷平八郎閣下題字

忠誠

萬向

平八郎題

陸軍大臣 畑俊六閣下題字

禮  
動

萬  
世  
畑  
俊  
六  
閣

海軍大臣 吉田善吾閣下題字

忠 勇

義 烈

善 秀 也



## 序

皇徳ヲ六合ニ施シ徳化ヲ八紘ニ展ベ以テ普ク人類共存共榮ノ慶ヲ俱ニセントスルハ是レ我が皇道不磨ノ大精神ニシテ肇國以來不動ノ國是デアリ、我等大和民族ニ課セラレタル尊キ大使命デア  
ル。過グル日清日露ノ兩戦役モ近クハ滿洲事變モ皆是レ此ノ使命ヲ果サンガ爲ノ聖戦ニ外ナラナカッタ。吾等ノ父祖先輩ハ克ク是等ノ國難時艱ヲ打開シテ國運ノ隆昌ヲ圖リ、又東亞諸民族ノ爲其安寧秩序ノ維持ニ大ナル貢獻ヲ致シ、漸次東亞黎明ノ曙光ヲ認ムルニ至ッタ。是レ固ヨリ大稜威ノ然ラシムル所、皇國軍民ノ血肉ニ祖先以來繼承セル忠君愛國ノ魂ガ躍動シ又光輝アル國史ニ依リ

刺戟鞭撻セラレシ賜デアツタ。

然ルニ世界ノ視目ハ日露戦争ノ終末ヲ以テ一轉機ヲ劃シタ。即チ列國ハ我が國力ノ眞價ヲ認ムルト共ニ列強中東亞ニ野望ヲ抱ク國々ハ新興日本ノ發展ヲ喜バズ其東洋ノ盟主タルヲ忌避シ、利害ノ相反スル所正義人道ヲ無視シテ事毎ニ壓迫的排日ノ行動ニ出デ遂ニ唇齒輔車ノ關係ニアルベキ隣邦支那ヲ使嗾シテ抗日ノ舉ニ出デシメ、又頑迷ナル蔣政權ハ之ヲ奇貨トナシ夷ヲ以テ夷ヲ制スル陋策ヲ擅ニシ、敢テ我が帝國ノ既得權益ヲ蹂躪シテ遂ニ挑戰ノ暴舉ニ出デ、加之無辜ノ自國民衆ヲ塗炭ノ苦ミニ陷レ恬然タルガ如キハ神人共ニ赦サザル所、茲ニ我が帝國ハ敢然起チテ蔣政權膺懲ノ一大聖戰ヲ起スニ至ツタノデアアル。

今ヤ皇國ノ軍民ハ皇猷翼贊ノ一途ニ舉國必勝ノ信念ヲ以テ奮闘シ着々其成果ヲ收メツツアリ。就中忠勇無雙ノ皇軍ハ陸ニ海ニ空ニ偉大ナル戰果ヲ收メ蔣政權ヲシテ啞然タラシメタルハ勿論克ク武威ヲ中外ニ宣揚スル事ヲ得タ。其間赫々タル武勳ヲ奏シテ敵彈毒及ニ殫レ聖戰ノ尊キ犠牲トナリシ幾多將兵ノ忠勇義烈トソレ等肉親者ノ烈々タル忠誠ニ至リテハ正ニ鬼神ヲ哭カシムルモノガアリ眞ニ軍民ノ龜鑑ト謂フベキデアアル。吾人ハ前途尙遼遠多難ナル時局ニ鑑ミ之等尊キ犠牲者ノ心ヲ以テ心トナシ粉骨碎身飽クマデモ聖戰ノ目的貫徹ニ邁進スルト共ニ其遺勳ヲ千載ニ傳フベキ責務ヲ有スル。

## 明治天皇ノ御製ニ

世と共に語り傳へよ國のため

命をすてし人のいさをを

ト仰セラレテアル。

我が忠勇顯彰會ハ日露戰爭以來累次ノ聖戰ニ殉職セル勇將猛兵ノ忠勇列傳ヲ編纂刊行シ其忠烈ヲ顯彰シテ芳名偉勳ヲ千舌ニ傳ヘ一ハ以テ聖旨ニ副ヒ奉リ一ハ以テ英靈ヲ弔ヒ遺族ヲ慰藉スルト共ニ後昆修養ノ龜鑑タラシメン事ニ努メ來レルモノナルガ、今次事變ノ忠勇列傳タルヤ現代戰ノ特質、進歩セル各兵種ノ性能、而シテ戰歿者ノ偉大ナル精神力ヲ精察シテ實戰ノ真相ト其功績ノ眞價トヲ傳ヘンガ爲ニハ容易ナラザル努力ヲ要スル。加之戰歿將兵ノ

増加スルニ伴ヒ益々其容易ナラザル大事業タルヲ信ズレドモ幸ニ貴重ナル軍部資料ト戰地ニ於ケル上官戰友ノ信書等ニ基キ百折不撓献身的ノ努力ヲ捧グテ所期ノ目的ニ邁進セン事ヲ希フ次第デア

ル。幸ニ吾人心血ノ結晶タル本列傳ガ幾萬戰死者ノ靈前ニ記念的家寶トシテ光彩ヲ添ヘ且遺族慰藉ノ一助トナリ、幽明一如雄魂忠靈ガ永久ニ遺族並ニ子孫ノ血肉ニ生キ遺族並ニ子孫モ亦高邁崇高ナル護國ノ英靈ニ生キ以テ皇猷ヲ扶翼シ奉リ又一家ノ前途ニ神靈ノ加護佑助ヲ具現スルニ至ラバ吾人ノ本懷之ニ過グルモノハナイ。

昭和十四年七月聖戰第二週年記念ノ日

社團  
法人 忠勇顯彰會

會頭 樞密顧問官 清水 澄

六

## 凡 例

- 一、本書發行ノ目的本會ノ趣意概歴ハ序文及卷末ニ記載シアリ
- 二、本卷ニハ昭和十三年四月二十三日行賞發表セラレタル陸軍戰歿殊勳者中ノ三百四十八名、同年七月二十八日發表者中ノ一名、同年十月十三日發表者中ノ一名合計三百五十名ヲ掲載シアリ。
- 三、昭和十二年七月七日以降滿洲國ニ於テ匪賊討伐等ノ爲忠死シタル者ハ支那事變忠死者トシテ取扱ハレアルヲ以テ本書ニ掲載セリ。
- 四、本書傳記掲載順序ハ階級毎いろは順ニ依レリ。
- 五、傳記ニ多少精粗繁簡ノ別アルハ資料ノ多少ニ依ルモノニシ

テ資料ノ蒐集ニハ大ニ努力シタル所ナルモ遺憾ナカラ完キ  
 チ得サルモノアルハ洵ニ已ムチ得サル所ナリ。  
 但シ本書中戰場ニ於ケル行動武動ハ當局ノ特別許可チ得テ  
 専ラ陸軍ノ調書ニ據リ記述セルモノナリ。  
 六、肖像掲載ナキモノハ乍遺憾終ニ寫眞ヲ蒐集シ得サリシモノ  
 ナリ  
 七、部隊番號其他港灣出發地、上陸日次、地點等軍ノ機秘密保持ニ  
 關係アル事項ハ之ヲ省略シ又部隊ハ當時ノ部隊長姓ヲ冠シ  
 テ表示セリ。  
 八、本書ハ非賣品ニシテ本書掲載ノ戰歿者全遺族各位ニ寄贈ノ  
 モノハ國民ノ熱誠ニ依ル陸海軍恤兵金ヲ以テ支辨セラレタ  
 ルモノナリ茲ニ特記シ感謝ノ意ヲ表ス。

支那事變 **忠勇列傳** 陸軍之部 **第五卷目次**

明治天皇御製

御題字

本會總裁 大勳位 梨本宮守正王殿下

題字

元本會副總裁 故侯爵 東郷平八郎閣下  
 陸軍大臣 畑 俊 六閣下  
 海軍大臣 吉田 善 吾閣下

一、序……………會頭樞密院顧問官 清 水 澄 一三

一、凡 例……………一三

一、索 引……………一三

一、將校准士官之部……………一七

一、下士官之部……………七一六

一、兵之部……………元二八

一、忠勇顯彰會趣意概歴……………末尾

支那事變 忠勇列傳 陸軍之部 第五卷

索引 (本索引ハ姓ノ發音ニ從ヒいろは順ニ排列シ索引ノ便ヲ圖リ「ひを」「ハ」「い元」  
「お」「ノ部」「あう」「あふ」「ハ」「おう」「ニ」「かう」「かふ」「ハ」「こう」ノ部ニ收メタリ)

步兵中尉 岩本二郎 (和歌山縣) 青年將校の模範、北滿五頂山の討匪に積極奮戰惜しくも散華す……………一〇

步兵中尉 石井米市 (岡山縣) 馬廠攻撃に渡河掩護の決死隊小隊長として奮戰其の任を果して玉碎す……………三

步兵少尉 位田綱次 (兵庫縣) 滿洲事變の殊勳者今次亦小隊長として偉勳を奏し馬落坡に玉碎す……………四

工軍曹 市川森 (埼玉縣) 優秀なる無線通信下士官正太線南方天險地帯に奮戰して玉碎す……………一〇六

步兵伍長 伊藤茂太郎 (茨城縣) 輕機彈藥手毎戰奮闘其の職責を完うし惜しくも大名攻撃に散華す……………一四

步兵伍長 伊藤万市 (長野縣) 名射手敵將校を射殺し奮戰遂に漳河々畔に玉碎す……………一六

步兵伍長 市邊庄治 (大阪府) 武技優秀の輕機射手平定攻撃に奮戦力闘して柏木井溝に散る……………一八

步兵伍長 市川毛三夫 (長野縣) 大册河黄村の血戦に決死彈藥補充を行ひ部隊の危難を救ふ……………二二

步兵伍長 池上交一 (岡山縣) 優秀剛膽の分隊長屢々偉功を樹て柏木井溝の山岳戰に散る……………二三

步兵伍長 池垣高一 (兵庫縣) 滄洲會戰中難局に奮闘し遂に姚官屯血戰の華と散る……………二六

步兵伍長 石神寅男 (茨城縣) 京漢沿線各戰闘に奮戰偉功を樹て遂に元氏攻撃に郝村に散華す……………二九

步兵伍長 井原數馬 (廣島縣) 勇敢舟を奪ひて小隊を渡河せしめ勇戰奮闘松花江の華と散る……………三二

索引

衛生 伍長	岩下卯之助 (長野縣)	決死職責を全うし重傷を負ふも尙職責を顧念して醇縣に散華す……………	三九五
輜重兵 伍長	泉 鐵太郎 (秋田縣)	輜重敵の大軍と會し其の包圍下に沈着奮戰遂に小寨村の華と散る……………	三七四
歩兵 上等兵	石川 作太郎 (東京市)	忠烈譽の一家兄は上海戰、弟は外長 城戰に不朽の武勳を奏して玉碎す……………	三八二
歩兵 上等兵	池田 光雄 (鹿兒島縣)	清河鎮に小隊長の危機を救ひ魏家庄の攻撃に奮戰遂に玉碎す……………	三八六
歩兵 上等兵	飯田 平吉 (茨城縣)	勇敢なる傳令猛火の中に其の任を果し元氏攻撃の華と散る……………	三八九
歩兵 上等兵	伊藤 忠晴 (大阪府)	斥候として數倍の敵を潰走せしめて進路を拓き遂に關河村に散る……………	三九一
歩兵 上等兵	伊井喜代作 (富山縣)	重傷に屈せず奮闘を續けて戰勝の途を拓き北滿海倫に玉碎す……………	三九四
歩兵 上等兵	今中勝次 (大阪府)	沈着勇敢克く奮闘を續けて南苑の陣前に玉碎す……………	三九六
工兵 上等兵	石川千代松 (栃木縣)	決死敵前に伐木作業を遂行して永定河畔の華と散る……………	三九八
歩兵 上等兵	糸井資夫 (栃木縣)	敵前渡河第一舟漕手として第一回渡河を完遂し拒馬河畔に散る……………	四〇〇
輜重兵 上等兵	井ノ本行雄 (奈良縣)	突如大敵の奇襲に沈着剛膽死闘を續けて小寨村に玉碎す……………	四〇二
歩兵 軍曹	原 松男 (岡山縣)	連絡掛下士官彈雨の下勇敢活躍遂に馬廠攻撃の華と散る……………	四〇
歩兵 伍長	林 逸平 (長野縣)	勇敢機敏の輕機關銃手要點奪取を成功せしめ琉璃河畔に玉碎す……………	一四
歩兵 伍長	原田義徳 (熊本縣)	沈着勇敢の小銃兵奮戰克く歩兵の本領を發揮して南口鎮に散る……………	一六
歩兵 伍長	原山正義 (長野縣)	擲彈筒彈藥手黃村攻撃に奮戰活躍して遂に玉碎す……………	一三八

歩兵 伍長	濱口秀三郎 (鳥取縣)	滄州會戰中難局に奮闘し遂に姚官屯血戰の華と散る……………	一四〇
歩兵 伍長	萩原福太郎 (茨城縣)	猛火を冒して第一線に突撃命令を傳 達し突入直前王谷莊堡の華と散る……………	一四三
歩兵 伍長	橋口藤吉 (宮崎縣)	良兵良民の勇士上海齊家宅の夜襲に奮闘して玉碎す……………	一四五
歩兵 伍長	橋本光之助 (兵庫縣)	孝子對空通信に勳功を奏し遂に姚官屯の血戰に玉碎す……………	一四七
歩兵 上等兵	濱石秀吉 (鹿兒島縣)	剛勇なる輕機關銃手傷つくも尙奮戰突撃して居庸關の華と散る……………	一四五
歩兵 上等兵	羽根田芳人 (熊本縣)	魏家庄攻撃に慧敏奮戰偉功を奏して惜しくも玉碎す……………	一四九
歩兵 上等兵	橋中 勇 (大阪府)	輕機關銃手敵陣に突入勇奮闘して關河村の華と散る……………	一四九
歩兵 上等兵	畑 傳之助 (兵庫縣)	連珠河口附近に衆匪と會し寡兵克く 之を擊退して遂に北滿の華と散る……………	一五一
歩兵 上等兵	林 權兵衛 (東京市)	孝悌の勇士長城線及北部山西に奮戰し遂に醇縣の激戰に玉碎す……………	一五三
歩兵 上等兵	早瀬 頼美 (岡山縣)	集中火を冒して傷つくも尙彈藥を搬送して遂に砲側に斃る……………	一五六
歩兵 上等兵	橋本 潔 (兵庫縣)	忠良なる輕機關銃手臨終尙分隊長の身を案じて馬落坡に散華す……………	一五八
砲兵 上等兵	波戶場正友 (栃木縣)	重機裝填手沈着剛膽每戰奮闘惜しくも大冊河畔に散る……………	一六一
砲兵 上等兵	馬場雄三 (佐賀縣)	清河鎮の決死砲兵分隊員重傷に屈せず奮戰し戰勝の端を拓く……………	一六三
工兵 上等兵	羽生孝治 (東京市)	挺身隊の勇士江南廣福橋に奮闘し臨終尙任務を忘れず……………	一六六
歩兵 伍長	西原恒造 (鳥取縣)	滄州會戰中姚官屯の堅壘を突破し戰勝の途を開きて玉碎す……………	一五〇
歩兵 伍長	西田三太郎 (福岡縣)	中隊傳令每戰活躍奮戰偉功を奏して遂に平定攻略の華と散る……………	一五三

索引

三

歩兵 伍長 西山常治 (兵庫縣) 良兵良民の鑑、未知の兵器を以て偉功を奏し上海無線臺の華と散る… 一六六  
 敵前に於ける河川偵察の殊勲者惜しくも西保障に於て空爆に散る… 一五九  
 歩兵 伍長 西澤末雄 (長野縣) 勇敢なる機關銃分隊員山西省井陘の夜戦に死闘し守地を確保す… 一六三  
 歩兵 伍長 西本正信 (熊本縣) 機關銃手奮戦多數の敵を啗し引鐵を握りたる儘團河村に散る… 一六八  
 歩兵 上等兵 西山正敏 (岡山縣) 良兵良民の砲手江南水郷地帯に奮戦し遂に嘉善郊外に玉碎す(忠烈)… 一七〇  
 砲兵 上等兵 二階堂利輝 (熊本縣)

ほ

歩兵 上等兵 細砂重一 (鳥取縣) 擲彈筒彈藥手毎戦奮闘遂に姚官屯の陣地直前に散る… 一七三  
 歩兵 上等兵 本莊喜之助 (兵庫縣) 孝子決死奉公の決意堅く毎戦奮闘遂に姚官屯の陣前に散る… 一七五

と

歩兵 伍長 樽瀬正義 (鳥根縣) 輕機射手獨斷屋上より逆襲を制し挺身側射を壓へて燒密盆に散る… 一六四  
 歩兵 上等兵 富岡善三郎 (香川縣) 豪膽慧敏なる小銃手涿州及靈壽附近に奮闘し戦勝の礎石となる… 一六八  
 歩兵 上等兵 土居政雄 (大阪府) 篤農の勇士山西省水嵐の山岳戦に奮闘し戦勝の端を開く… 一七一  
 歩兵 上等兵 東原辰男 (兵庫縣) 至孝の勇士天津南方運河地區に奮戦し趙連庄の華と散る… 一七三  
 歩兵 上等兵 戸本市太郎 (京都府) 小寨村に大敵の奇襲を受け奮戦死闘… 一七六  
 歩兵 上等兵 戸經恒治 (愛知縣) 自動車を燒却して之と運命を共にす… 一七九  
 輜重兵 一等兵 夜間敵砲彈下に病院警戒中惜しくも空爆に散る(上海北店宅)… 一八〇

ち

砲兵 中尉 千葉正 (埼玉縣) 豪膽俊秀の觀測將校上海戦線に偉勳を樹てて蘇州河畔に散る(殊勲甲)… 一八三

工兵 中尉 千葉平吉 (岩手縣) 南苑總攻撃の華、壯烈肉弾を投じて戦勝の途を拓く(殊勲甲)… 一八三

お

歩兵 軍曹 大内軍夫 (兵庫縣) 中隊指揮班連絡長有ゆる困難を克服し… 一九三  
 歩兵 伍長 大旗正敏 (鳥取縣) て其の任を完うし遂に四黨口に散る… 一九三  
 歩兵 伍長 大西 勳 (兵庫縣) 擲彈筒彈藥手危険を冒し重要目標の發見制壓に努め子牙河畔に散る… 一九六  
 歩兵 伍長 大西英一 (兵庫縣) 瀕死の重傷を負ひ尙戦勝を顧念し黄河北岸の華と散る… 一九八  
 歩兵 伍長 大日方和男 (長野縣) 輕機關銃手馬落坡の戦闘に勇戦奮闘克… 二〇一  
 歩兵 伍長 太田友榮 (島根縣) く敵の重機關銃を制壓して遂に玉碎す… 二〇一  
 歩兵 伍長 岡野兵太郎 (岡山縣) 慧敏決死隊の分隊長西保障の激戦に偉功を奏して玉碎す… 二〇四  
 歩兵 伍長 岡森計一 (兵庫縣) 志願して挺身敵陣直前の水濠を偵察し更に奮戦遂に郝庄に散る… 二〇六  
 歩兵 伍長 岡本國三 (京都市) 良兵良民の範、中支戦線に奮戦遂に南京東北楊州攻撃の華と散る… 二〇八  
 歩兵 伍長 沖田俊市 (兵庫縣) 裝甲列車隊員津浦線に偉勳を樹て黄河北岸の華と散る… 二一一  
 歩兵 上等兵 岡本國三 (京都市) 滄州會戦中難局に奮闘し遂に姚官屯血戦の華と散る… 二一四  
 歩兵 上等兵 大地徳次郎 (大阪市) 忠勇なる歩兵砲々手琉璃河々畔夏村に奮戦し戦勝の端を拓く… 二一五  
 歩兵 上等兵 尾崎重行 (徳島縣) 忠勇なる小銃手涿州及靈壽附近に奮闘し戦勝の素因を與ふ… 二一五  
 歩兵 上等兵 小川榮一 (埼玉縣) 擲彈筒手偉功を樹て更に斥候として挺身重任を果して石板山に散る… 二一五  
 歩兵 上等兵 大槻勢至郎 (茨城縣) 小銃兵彈雨の下挺身敵の側面に突入奮戦格闘し永定河畔に散る… 二一八  
 歩兵 上等兵 大竹貞雄 (群馬縣) 克く擲彈筒の威力を發揮して戦勝の素因を作り遂に元氏に散る… 二二〇  
 歩兵 上等兵 優秀なる擲彈筒手拒馬河畔駱駝灣に奮戦し戦勝の途を拓く… 二二二



歩兵上等兵	大角雄市 (岡山縣)	擲彈筒手馬廠河敵前強行渡河に奮戦惜しくも陣前に散る……………	四六五
歩兵上等兵	岡田幸一 (徳島縣)	豪膽機敏の勇士北滿濠江縣境に奮闘し遂に護國の華と散る……………	四六七
歩兵上等兵	岡田正明 (兵庫縣)	傳令猛火を冒して重任を果し更に奮戦遂に人合庄に玉碎す……………	四六九
工兵上等兵	尾崎俊一 (兵庫縣)	決死の工兵分隊員津浦戦線に毎戦武勳を奏し遂に牛新庄に玉碎す……………	四七一
歩兵 伍長	渡邊長秋 (鳥取縣)	剛膽齊河縣西門に肉薄し其の強度を偵察して敵の手榴弾に散る……………	一八六
歩兵上等兵	若林喜作 (朽木縣)	戦闘惨烈の間に傳令の重任を果し自己の負傷を忘れて上官を介抱し大冊河畔に散る……………	四七四
歩兵上等兵	和久井富三郎 (朽木縣)	院家村の陣前十字火の下に輕機銃の故障を排除して小隊の苦境を救ふ……………	四七七
歩兵上等兵	若林朋一 (長野縣)	傳令彈雨を冒し一死重任を果して小隊戦勝の端を拓き小趙村に散る……………	四七九
軍醫 大尉	梶山利男 (廣島縣)	第二世俊才の軍醫一死其の重責を完うして護國の華と散る(山西省東潯)……………	七
輜重兵中尉	加藤孝一 (愛知縣)	豪膽機敏の小隊長長葦兵山西石門村に奮戦し輜重の危機を救出す……………	四八
騎兵 少尉	上谷定 (徳島縣)	豪膽機敏なる小隊長長葦店鎮北方地區に奮戦し主力部隊の危機を救ふ……………	四三
歩兵 軍曹	梶生二 (兵庫縣)	優秀なる分隊長敵火を牽制して小隊の突撃を容易にし趙連庄の華と散る……………	九五
歩兵 伍長	加藤藤治 (長野縣)	模範的小銃兵平漢沿線に奮戦活躍遂に彰徳攻撃の華と散る……………	一九〇
歩兵 伍長	川西時義 (鹿児島縣)	無線手重傷にも屈せず唯一の連絡に奮闘して清河鎮に散る……………	一九三
歩兵 伍長	川崎實 (茨城縣)	軍旗護衛兵勇戦奮闘最善を盡して軍旗を守護し遂に拒馬河畔に散る……………	一九四

歩兵 伍長	片瀬保 (兵庫縣)	機關銃射手重傷を冒し最後の兵となるも尙奮戦して南苑に斃る……………	一九七
輜重兵伍長	香山清實 (長野縣)	大行李長單身敵の敗殘兵と戦ひ大行李を守護して黃村の華と散る……………	三七六
歩兵上等兵	河本作夫 (岡山縣)	重機彈藥手積極活躍克く其の任を完うして馬廠河畔に散る……………	四八一
歩兵上等兵	上村信五 (鳥取縣)	輕機彈藥手馬廠滄州攻撃に奮戦して姚官屯に玉碎す……………	四八四
歩兵上等兵	川端義滿 (宮崎縣)	溫良忠誠の士、上海戦線に奮闘し遂に齊家宅激戦の華と散る……………	四八六
歩兵上等兵	加藤藤平 (長野縣)	剛膽群敵中に突入奮戦小隊側背の危機を脱せしめて西保障に散る……………	四八八
歩兵上等兵	河井勇 (山口縣)	京漢線方面の戦場に活躍し且娘子關の天險に勇戦して玉碎す……………	四九〇
歩兵上等兵	川崎武男 (茨城縣)	決死敵の側防機關を撲滅して大冊河畔に玉碎す……………	四九三
歩兵上等兵	川崎博邦 (茨城縣)	敵陣近く煙幕を展張して突撃を誘起し敵陣内に奮戦して元氏に玉碎す……………	四九五
歩兵上等兵	貝原巖 (岡山縣)	忠孝兩全の勇士涿州近傍寶店鎮に奮戦して戦勝の礎石となる……………	四九八
歩兵上等兵	葛西伊久 (大阪市)	連絡兵活躍奮闘克く其の重任を果して南苑に散る……………	五〇〇
歩兵上等兵	鎌田益惠 (鹿児島縣)	慧眼勇猛の小銃手重傷を負ふも尙奮戦遂に居庸關の華と散る……………	五〇三
歩兵上等兵	片岡博 (茨城縣)	清原縣下の討匪戦に積極果敢に重任を完うし戦勝の途を拓く……………	五〇五
歩兵上等兵	川上勇吉 (沖繩縣)	敵度豪膽の勇士熱河省討匪戦中一身に大敵を支へ戦勝の途を拓く……………	五〇八
歩兵上等兵	鎌ヶ迫春夫 (鹿児島縣)	擲彈筒手敵機關銃を撲滅して工兵隊の敵前作業を遂行せしめ居庸關の華と散る……………	五一二
工兵上等兵	片貝政雄 (富山縣)	沈勇豪膽なる鐵道機關兵天津鐵橋を死守して重任を全うす……………	五四
砲兵上等兵	川上勸一 (長崎縣)	清河鎮の決死砲兵隊員重傷に屈せず頑敵を撲滅して重任を全うす……………	五二六

衛生上等兵 勝田武夫 (三重縣)

忠勇なる衛生兵上海戰場に活躍し惜しくも蘇州河畔に散華す…………… 五八

歩兵 伍長 吉岡信雄 (島根縣)

分隊長勇敢奮戦南越扶鎮の陣内戦に散る…………… 一九九

歩兵 伍長 吉田源一 (兵庫縣)

滄州會戰中姚官屯の血戦に突撃路を開設し護國の華と散る(壯烈)…………… 二〇一

歩兵上等兵 米田友市 (兵庫縣)

勇敢なる擲彈筒手克く我が突撃隊を支援し東花園に玉碎す…………… 五三二

歩兵上等兵 吉田義之 (岡山縣)

擲彈筒手率先挺身して奮戦突撃の動機を作爲し南苑の華と散る…………… 五三四

歩兵上等兵 吉田勇 (兵庫縣)

夜間單身敵前近く猛火を冒し傳令の任を完うして東花園に散る…………… 五三六

た

歩兵 中尉 田島和太郎 (長野縣)

滿洲事變の殊勲者大冊河畔黃村に奮戦し戦勝の途を開いて玉碎す…………… 二一五

歩兵 少尉 田端林三 (埼玉縣)

鐵血外長城八角臺の守地を掩ふも敢然大軍を撃退し重任を全うす(壯烈)…………… 二二二

歩兵 准尉 田中武次 (愛知縣)

重傷を負ふも尙傷者の收容を顧念し大場御郊外の華と散る…………… 二五五

歩兵 軍曹 竹内義 (長野縣)

中隊長戦車の優秀砲手毎戦偉勳を樹て惜しくも忻縣城外に散る…………… 二九七

歩兵 伍長 高田正夫 (兵庫縣)

輕機分隊長滄州會戰に決死架橋班に協力し任務を全うして玉碎す…………… 三〇四

歩兵 伍長 高田護 (岡山縣)

重機射手西邊庄攻撃に彈雨の下沈着正射戦勝の原因を作つて玉碎す…………… 三〇七

歩兵 伍長 高野譽富 (長野縣)

慧眼機敏なる豫備隊員適時逆襲部隊を撃破し戦勝の端を拓く…………… 三〇九

歩兵 伍長 高野英四郎 (茨城縣)

敵機關銃を撲滅せんと挺身爆彈を投じ突入寸前大冊河畔の華と散る…………… 三二一

歩兵 伍長 高木顯吉 (山形縣)

牡丹江省七虎林討匪戦に負傷するも尙奮戦突撃して玉碎す…………… 三二三

歩兵 伍長 田中一信 (兵庫縣)

勇敢なる輕機射手趙連庄陣内戦に敵數十名を射殺す…………… 二二

歩兵 伍長 田子鐵平 (群馬縣)

剛勇の擲彈筒手獨斷挺身敵を制壓し又率先突撃して西梁村に散る…………… 二三八

歩兵 伍長 田藤良一 (兵庫縣)

此の母にして此の子あり聖戦の初期に活躍し行宮激戦の華と散る…………… 二四〇

工兵 伍長 高橋博 (神奈川縣)

優秀なる無線通信手南方天險地帯に奮戦して職に瘡る…………… 二五六

輜重兵 伍長 立本末勇 (奈良縣)

孝士通州に孤軍奮闘し遂に敵砲彈に玉碎す…………… 二七九

歩兵 上等兵 高松喜一郎 (茨城縣)

勇敢機敏の小銃手拒馬河畔妻桑舖に奮戦散華す…………… 二三八

歩兵 上等兵 高羅文雄 (三重縣)

傳令活躍奮戦團河村の追撃戦に玉碎す…………… 二九〇

歩兵 上等兵 田邊剛 (岡山縣)

勇敢沈着適時的確の輕機射撃により戦勝の端を拓きて團河村に散る…………… 二九三

歩兵 上等兵 谷所卯之助 (兵庫縣)

狙撃手重傷に屈せず尙奮戦遂に行宮の陣前に散る…………… 二九四

歩兵 上等兵 田邊稔 (岡山縣)

大場鎮の激戦に敵の彈雨を冒して連絡の重任を果し玉碎す…………… 二九六

歩兵 上等兵 武田喜太男 (秋田縣)

此の父にして此の子あり一死奉公の決意固く大敵と奮戦小峯村に玉碎す…………… 二九九

歩兵 上等兵 田中勝治 (兵庫縣)

滿洲事變の勇士小王莊東花園に奮戦して遂に玉碎す…………… 三〇二

歩兵 上等兵 高山新一郎 (東京市)

孝子外長城線に奮闘し敵トーチカを粉砕し戦勝の端を拓く…………… 三〇四

歩兵 上等兵 高田廣志 (岡山縣)

輕機關銃手奮戦力團河村の一戦に散る…………… 三〇六

歩兵 上等兵 高橋寛治 (鳥取縣)

忠孝兩全の勇士津浦線に奮戦し遂に安仁街激戦の華と散る…………… 三〇八

歩兵 上等兵 田淵貞夫 (兵庫縣)

輕機關銃手團河村戦闘に奮戦敵陣に突入して行宮の華と散る…………… 三一一

歩兵 上等兵 棚池留雄 (滋賀縣)

身に數彈を受け尙奮戦して戦勝の途を拓き北滿海倫に玉碎す…………… 三二五

歩兵上等兵	田中茂壽 (鳥取縣)	孝悌の勇士津浦線燒害盆に奮闘して遂に玉碎す(勇士哀話)	五八六
歩兵上等兵	田中義雄 (鳥根縣)	模範兵津浦線に活躍し徳州郊外に傳令の任を果して玉碎す	五八八
歩兵上等兵	田中山雄 (兵庫縣)	津浦線了莊の夜襲に奮闘し臨終尙戰況及戰友を案じて散華す	五八一
歩兵上等兵	田口善市 (栃木縣)	獨斷挺身敵監視哨を擊退して大隊の衛河渡河成功の端緒を拓く	五八三
歩兵上等兵	田名綱清一郎 (栃木縣)	戰闘慘烈の間に傳令の重任を果して中隊の危機を救ひ惜しくも東釜山の空爆に散る	五八五
輜重兵一等兵	田淵三郎 (栃木縣)	小行李馭兵不屈不撓克く其の任を果して拒馬河畔に散る	五八七
輜重兵一等兵	高田正五 (栃木縣)	大行李員有ゆる困苦辛酸を克服して尙且難局に當り遂に大冊河畔に散る	五八九
歩兵上等兵	田島正武 (福井縣)	忠誠敢爲の運轉手重任を果し京漢線曲陽討伐戰に玉碎す	五七一
騎兵上等兵	田坂嘉信 (愛媛縣)	羅店鎮方面の激戰に重任を果して致命傷を受け戰況を案じつゝ噎る	五七四
工兵上等兵	田中吉久 (長崎縣)	責任觀念旺盛なる鐵道機關兵機關車を死守して郎坊驛に玉碎す	五七六
輜重兵上等兵	高橋小一郎 (神奈川縣)	小寨村に突如大敵の奇襲を受け決死自動車を燒却して玉碎す	五七八
輜重兵一等兵	田中嘉雄 (高知縣)	腹部貫通の重傷を負ひながら尙任務に邁進し遂に羅店鎮郊外に噎る	五八〇
歩兵上等兵	辻出濱一 (奈良縣)	優秀なる觀測手率先重任を遂行して團河村に散る	五八三
歩兵曹長	中山定明 (埼玉縣)	名班長、外長城線攻撃に小隊長として奮戦し惜しくも集團地雷に斃る	五八三
歩兵伍長	中川智恵三 (岡山縣)	沈着剛膽の砲手未知の火炮を以て上海戰場に活躍し遂に其の敵に殉ず	五八三

歩兵伍長	中村俊昭 (長野縣)	豪膽沈勇の機關銃手大冊河畔黃村に奮戦し部隊の危急を救ふ	五八三
歩兵上等兵	中西一夫 (兵庫縣)	忠誠豪膽の傳令馬落坡の難戰に重責を完うし護國の華と散る	五八五
歩兵上等兵	中西茂治 (和歌山縣)	忠勇なる小隊長傳令涿州會戰に奮闘し惜しくも靈壽附近尹凡同に噎る	五八八
歩兵上等兵	内藤義忠 (島根縣)	勇敢なる機關銃手靈壽附近の攻撃に決死奮闘戰勝の端を拓く	五九〇
歩兵上等兵	中谷源三 (三重縣)	良兵良民の範、輕機射手として勇敢奮闘揚子崗の華と散る	五九二
歩兵上等兵	中村康興 (栃木縣)	忠孝兩全の士拒馬河畔に偉勳を樹て惜しくも東釜山追擊戰中空爆に散る	五九五
歩兵上等兵	中口恭一 (和歌山縣)	北滿地局子に不應の敵襲を受け孤軍奮闘其の本分を盡して玉碎す	五九七
歩兵上等兵	長恒政四 (岡山縣)	沈着勇敢の擲彈筒手毎回敵の側防火器を制壓して唐官屯に散る	六〇〇
歩兵上等兵	中川貞吾 (栃木縣)	大冊河夜襲に勇敢奮闘敵陣内に玉碎す	六〇三
歩兵上等兵	中西仁 (兵庫縣)	勇敢忠誠なる指揮班員馬落坡に奮闘し軍歌を愛詠して散華す(戰場悲話)	六〇四
歩兵上等兵	永見朗 (長崎縣)	勇敢機敏敵の側防火器を發見して敵の素因を作り遂に清河鎮に散華す	六〇八
歩兵上等兵	仲廣吉 (和歌山縣)	敵陣地直前逆襲に對し奮戦之を制し南苑の陣前に散る	六〇九
歩兵上等兵	中井勝義 (香川縣)	率先勇敢彈藥補充の任を完了して行宮の陣前に散る	六一二
歩兵上等兵	中村芳雄 (長野縣)	輕機射手奮戰數度の逆襲を擊退して西保障に散る	六一四
騎兵上等兵	中村金次郎 (長崎縣)	勇敢なる傳令南口攻撃に重任を果して散華す	六一六
歩兵曹長	村上光徳 (香川縣)	團河村攻撃間俄然敵と遭遇するも沈着剛膽玉碎して之を擊退す	六一七

步兵 伍長 村田 亨 (大阪府)

中隊隨一の殊勲者と讃へられたる至孝誠忠の勇士惜しくも靈壽に散華す……………三六

步兵 中尉 内田 幸榮 (佐賀縣)

誠實勇敢なる小隊長通州攻撃に活躍して戦勝の端を拓く……………二八

步兵 伍長 内山 清張 (北海道)

優秀なる機關銃手京漢線に活躍し遂に元氏附近の激戦に玉碎す……………三三

步兵 伍長 右手 壽一 (鳥取縣)

忠勇俊敏なる小銃手人合庄の激戦に奮闘し敵砲弾に玉碎す……………三三

步兵 上等兵 上原 政義 (鹿兒島縣)

輕機關銃手負傷するも尙奮戦を続け遂に居庸關に玉碎す……………六八

步兵 上等兵 上野 正一 (和歌山縣)

指揮班員京漢線及正太線方面に奮戦し遂に娘子關附近に玉碎す……………六二

步兵 上等兵 梅村 昇太郎 (栃木縣)

戰鬪慘烈を極むるも不屈不撓奮戦戦勝の端を拓きて大世河畔に散る……………六三

步兵 上等兵 上野 柁夫 (岡山縣)

沈着勇敢の重機裝填手戰鬪慘烈の局所に奮闘して東邊庄に散る……………六六

步兵 上等兵 道滿 丈夫 (岡山縣)

傷つくも機關銃彈藥を匍匐搬送し死期迫るも敵を連呼馬廠河畔に散る……………六八

步兵 少尉 野口 正太郎 (埼玉縣)

勇敢機敏の小隊長奮戦中外長城線の華と散る……………五四

工兵 軍曹 野村 重吉 (京都市)

彈雨を冒して蘇州河畔に挺進し敵情監視中途に職に墮る……………一〇九

步兵 上等兵 野村 兼義 (鹿兒島縣)

決死隊に加はりて堅壁に突入負傷するも尙格闘を続けて居庸關の華と散る……………六三〇

工兵 上等兵 野崎 野一 (兵庫縣)

忠孝兩全の士北寧線落俗驛に孤軍奮闘して玉碎す……………六三三

砲兵 上等兵 野田 定太 (福岡縣)

清河鎮の決死砲兵隊員重傷に屈せず頑敵を撲滅して重任を完うす……………六五

步兵 中尉 楠本 三藏 (福岡縣)

楠公を精神とせる忠烈新進の小隊長屢々偉勲を樹てて東花園に玉碎す(殊勲甲)……………三二

步兵 伍長 熊倉 春雄 (栃木縣)

難局に彈藥補充の重任を果し保定城外の華と散る……………三三六

步兵 上等兵 黒岩 誠一 (徳島縣)

斥候兵積極活躍奮戦して小隊の戦鬪を有利に導き南葱遠に散る……………六三七

步兵 上等兵 黒川 登一郎 (栃木縣)

忠烈勇敢の傳令彈雨の下克く其の重任を果して永定河畔に散る……………六三九

輜重兵 上等兵 黒田 久男 (京都府)

小寨村に大敵の奇襲を受け奮戦死闘自動車を焼却して之と運命を共にす……………六四一

や

步兵 中尉 矢芝 春美 (鳥取縣)

姚官屯攻撃に中隊長代理として率先勇戦に突撃し戦勝の端を拓いて玉碎す……………三三

步兵 少尉 山岡 賢一 (廣島縣)

豪膽俊敏なる小隊長下馬嶺の山岳戦に奮闘して職に墮る……………三三

步兵 少尉 山内 春雄 (兵庫縣)

至誠一貫の士北滿警備に活躍し三江省討匪戦の華と散る……………三六〇

步兵 曹長 山西 喜一 (兵庫縣)

指揮班長德州城に一番乗し重傷に屈せず血染の日章旗を翻へす……………三七

步兵 伍長 山原 右一 (長野縣)

西保障激戦に敵數人を刺殺し惜しくも敵砲弾に玉碎す……………三三六

步兵 伍長 山田 喜一 (和歌山縣)

南部山西太谷の激戦に重傷を負ひ尙職責を顧念して護國の華と散る……………三三九

步兵 伍長 山田 六郎 (兵庫縣)

決死難局に連絡勤務を完うし遂に人合庄血戦の華と散る……………三四四

步兵 伍長 山根 善市 (鳥取縣)

優秀なる分隊長難局に奮闘し姚官屯血戦の華と散る……………三四七

步兵 伍長 山崎 清 (和歌山縣)

徳行の人狙撃兵として奮闘克く其の任を完うし南苑の華と散る……………三五〇

步兵 伍長 山下 博 (兵庫縣)

敵の包圍下に分隊を指揮して奮戦子牙河畔に散る……………三五三

親湖班員津浦線に活躍し惜しくも姚官屯北方の激戦に散華す……………三五四

歩兵 伍長	山本 忠志 (大分縣)	中隊傳令數倍の逆襲部隊を撃退し中隊戦勝の因を作つて魏家庄に散る	三二七
砲兵 伍長	柳田 義男 (静岡縣)	重傷に屈せず血染のハンドルを操縦し任務を完うして南京城外の華と散る	三九九
工兵 伍長	山口 義雄 (東京府)	輜重大敵と遭遇輕機を以て奮戦群敵を殲して遂に小寨村の華と散る	三六八
歩兵 上等兵	山口 一義 (香川縣)	正太線南障附近の夜戦に將兵一體の教訓を残して玉碎す(戰場美談)	三六六
歩兵 上等兵	山畑 義治 (和歌山縣)	勇敢なる機關銃手靈壽附近の戰鬪に決死奮闘し戰勝の端を開く	三六九
歩兵 上等兵	柳田 清忠 (北海道)	後備兵北大容の敗殘兵討伐に傷つくも屈せず尙奮戦玉碎す	三五三
歩兵 上等兵	山下市次郎 (兵庫縣)	忠孝兩全の勇士津浦戦線に活躍し遂に李家婁の華と散る	三五四
歩兵 上等兵	山本 隆 (岡山縣)	每戦身の危険を顧みず勇戦奮闘惜しくも磨官屯の陣前に散る	三五七
歩兵 上等兵	安井 良一 (兵庫縣)	斥候として勇敢敵陣地前に活躍奮闘して人合庄に散る	三五九
歩兵 上等兵	山本 繁雄 (兵庫縣)	温良忠實の勇士津浦沿線に活躍し遂に臨邑郊外の華と散る	三六一
歩兵 上等兵	谷口 純一 (鳥取縣)	猛火の下進んで彈藥補充を完遂し遂に姚官屯の華と散る	三六四
歩兵 上等兵	山本 秋義 (鳥取縣)	斥候の重任を果して馬廠攻撃の華と散る	三六六
歩兵 上等兵	山本 秋造 (東京市)	外長城線の各戰鬪に奮戦し惜しくも張家口郊外に玉碎す	三六八
歩兵 上等兵	山田久三郎 (茨城縣)	勇敢なる通信手克く其の任を果し遂に拒馬河畔北桐夜襲に玉碎す	三七一
歩兵 上等兵	矢口 一夫 (和歌山縣)	忠勇なる通信手正太線長濃嶺に孤軍奮闘分隊長に折重つて玉碎す	三七三
歩兵 上等兵	山形 國 (栃木縣)	暗夜敵の潜伏斥候を刺殺し夜襲奏功の端を拓きて衛河々畔に散る	三七六
歩兵 上等兵	山口 治安 (宮崎縣)	上海齊家屯の堅陣に突入陣内に奮戦中身に數彈を受けて散華す	三七八

歩兵 上等兵	矢吹 誠一 (岡山縣)	擲彈筒手馬廠河敵前強行渡河戦に奮戦惜しくも陣前に散る	三六〇
歩兵 上等兵	山口 勳 (兵庫縣)	武技優秀彈雨の下率先奮闘惜しくも姚官屯の陣前に玉碎す	三六二
歩兵 上等兵	安田 豊虎 (兵庫縣)	輕機彈藥手衆敵の逆襲に對し奮戦以て中隊の危険を除き東花園に玉碎す	三六四
輜重兵 上等兵	山中 繁 (佐賀縣)	忠誠有爲の士外長城及山西方面に活躍し寡兵衆敵を支へ戰勝の途を拓く	三六六
輜重兵 上等兵	山川 初男 (大阪府)	皇軍輜重の華、山西省七亘村に奮闘し遂に玉碎す	三六九

ま

歩兵 大尉	松下 武男 (鹿児島縣)	發明的天才の將校正太線戰場に奮闘し惜しくも中山村の峡谷に玉碎す	三六四
歩兵 伍長	町田 芳次 (長野縣)	沈勇なる輕機關銃手大册河畔黃村の血戦に奮闘し戰勝の途を拓く	三五九
歩兵 伍長	松原 武壽 (鳥取縣)	優秀なる中隊傳令重傷に屈せず正莊に突入し開門中敵手榴彈に墮る	三六二
歩兵 伍長	増原 正男 (群馬縣)	忠烈豪膽なる分隊長天津驛に奮闘し寡兵克く重任を全うす(壯烈)	三六四
歩兵 伍長	松下 義美 (岡山縣)	名機關銃手馬廠河の決死渡河中隊に加はり奮戦力闘遂に玉碎す	三六七
歩兵 伍長	松村 儀男 (兵庫縣)	責任觀念旺盛の機關銃手奮戦偉勳を樹て人合庄に玉碎す	三七〇
歩兵 伍長	政次 伍一 (兵庫縣)	滄州血戦に奮戦力闘して姚官屯の華と散る	三七三
歩兵 伍長	牧悦次郎 (愛知縣)	物資調査隊江南何姜村に大敵の奇襲を受け全員最後迄奮戦玉碎す	三七五
歩兵 伍長	榎内 吉春 (廣島縣)	勇敢舟を奪ふて小隊を渡河せしめ勇戦奮闘松苑江の華と散る	三七八
衛生 伍長	丸田 芳雄 (長野縣)	勇敢決死の衛生兵西保障の激戦に玉碎す	三七七
歩兵 上等兵	松本 新吉 (栃木縣)	剛膽挺身危険を冒して戰車を誘導し戰勝の端を拓いて大名城に散る	三九三

歩兵上等兵 松井俊雄 (兵庫縣) 率先勇敢彈藥補充に任じ死期迫るも其の補充を叫びて行宮の一戦に散る…………… 六九四  
 歩兵上等兵 松村隆 (長野縣) 忠誠豪膽の勇士北滿教化縣下の討匪戦に奮闘し職に殉ず…………… 六九六  
 歩兵上等兵 牧知来 (長野縣) 剛膽固志を以て鐵條網を亂打破壊せんとし黄村の陣前に散る…………… 六九八  
 歩兵上等兵 益倉長次郎 (大阪府) 決死山嶺の機關銃に手榴弾を投擲突入し敵を殲して玉碎す(紅士嶺)…………… 七〇〇  
 歩兵上等兵 前田長美 (長野縣) 勇敢機敏の輕機銃射手黄村攻撃に敵の逆襲を阻止して玉碎す…………… 七〇三  
 歩兵上等兵 松岡安造 (兵庫縣) 慧眼剛踏の勇士屢々敵の逆襲を察知奮闘し惜しくも滄州李家寨に散る…………… 七〇四  
 歩兵上等兵 前田毅 (鳥取縣) 小王莊夜襲に偉功を樹て更に東花園に奮戦して玉碎す…………… 七〇七

ふ

歩兵 伍長 深澤三次郎 (群馬縣) 郷の篤農家輕機銃射手として沈着剛膽克く其の任を全うし賂駝灣に散る…………… 七二〇  
 歩兵 伍長 福井藤市 (兵庫縣) 勇敢なる輕機銃手滄州攻撃に奮戦して張新庄に散華す…………… 七二三  
 歩兵 伍長 藤田輝雄 (島根縣) 優秀なる中隊傳令每戰難局に任務を完うし正莊に玉碎す…………… 七二四  
 歩兵上等兵 藤田助市 (廣島市) 京漢線西方山地戦に活躍し更に寡兵敵の逆襲を破砕して娘子關方面に玉碎す…………… 七二九  
 歩兵上等兵 福原勝 (栃木縣) 戰鬥慘烈を極むるも不屈不撓奮戰勝の端を拓きて大冊河畔に散る…………… 七三三  
 歩兵上等兵 藤田義則 (福岡縣) 沈着勇敢克く奮戦して南苑の陣前に散る…………… 七三四  
 歩兵上等兵 藤森仙吉 (岡山縣) 中隊長傳令活躍奮闘克く其の重任を果して南苑に散る…………… 七三六  
 歩兵上等兵 深谷專壽 (茨城縣) 勇敢なる機關銃彈藥手拒馬河畔北相夜襲に奮戦して玉碎す…………… 七三八  
 歩兵上等兵 藤田勝 (栃木縣) 重機裝填手群敵を眼前に沈着克く其の任を果して張仕望に散る…………… 七三二

砲兵上等兵 藤田長吾 (新潟縣)

忠勇豪膽なる砲手正太線山岳地帯に奮闘し部隊戰勝の礎石となる…………… 七三三

こ

歩兵 少佐 小泉寅三 (茨城縣) 卓越せる指揮を以て每戰偉功を奏し遂に元氏郊外の華と散る(殊勳甲)…………… 七三七  
 歩兵 准尉 小林莊介 (群馬縣) 慧眼有爲の小隊長黄村攻撃に偉功を奏して玉碎す…………… 七三七  
 歩兵 伍長 小林市治郎 (長野縣) 勇敢慧敏の擲彈筒分隊長西保障の激戦に偉功を樹て玉碎す…………… 七三七  
 騎兵 伍長 小屋與太 (山形縣) 優秀なる輕機關銃分隊長北滿圖斯科に偉功を奏して護國の華と散る…………… 七四五  
 工兵 伍長 近藤市太郎 (三重縣) 忠勇なる作業手砲彈下に作業を續行し遂に江南の華と散る…………… 七六一  
 歩兵上等兵 小林寅次郎 (群馬縣) 拒馬河可西務の敵前渡河に殊勳を奏し惜しくも護國の華と散る…………… 七三六  
 歩兵上等兵 高祖清太 (佐賀縣) 居庸關平地線魏家庄に偉勳を奏して護國の華と散る…………… 七三八  
 歩兵上等兵 小泉光男 (栃木縣) 輕機關銃射手勇敢沈着每戰奮闘して大冊河畔に散る…………… 七三二  
 歩兵上等兵 小坂田國雄 (岡山縣) 勇敢決死の擲彈筒手每戰偉功を奏して馬廠攻撃の華と散る…………… 七三三  
 歩兵上等兵 近藤勝 (岡山縣) 忠烈勇敢の初年兵月明を利用して敵を狙撃中東邊庄の陣前に散る…………… 七三八  
 歩兵一等兵 小林忠一 (兵庫縣) 沈着勇敢なる指揮班員奮戰敵の逆襲を撃退して南苑に散る…………… 七三六  
 歩兵上等兵 小坂田照雄 (兵庫縣) 沈着勇敢の狙撃手重傷に屈せず奮戰行宮の陣前に散る…………… 七四〇  
 歩兵上等兵 小林五郎 (長野縣) 苦戦中見事敵の指揮官を狙撃し小隊戰勝の基を拓き寺溝村に散る…………… 七四二  
 輜重兵一等兵 小金清次郎 (東京市) 壯烈重傷を冒し大敵と奮戦自動車を守護し小寨村に玉碎す…………… 七四四

歩兵 軍曹 寺口一義 (兵庫縣)	斥候及分隊長として奮戦偉功を奏し滄州李家婁に玉碎す……………九
歩兵上等兵 手嶋一彦 (大分縣)	敵の指揮官を一發にして斃したる名射手遂に清河鎮に玉碎す……………七
歩兵 中尉 荒谷彌章 (北海道)	潑刺たる機關銃小隊長長津沱河畔陳村に勇戦し戦勝の端を拓く……………七
歩兵 伍長 阿部 勇 (岡山縣)	實弟の復讐に燃えつゝ小隊長傳令として勇敢活躍惜しくも西邊庄攻撃の華と散る(兄弟戦死)……………二八九
歩兵 伍長 有木信治 (兵庫縣)	優良なる中隊傳令難局に奮闘し姚官屯血戦の華と散る……………二九三
歩兵 伍長 青木富次郎 (愛知縣)	物資調査隊不測の大敵と血戦を交へ全員江南何姜村に玉碎す……………二九五
歩兵 伍長 天野木三 (兵庫縣)	身を壕内敵側防火に曝しつゝ一隊の水壕渡河を容易ならしめ馬落坡の華と散る……………二九七
歩兵 伍長 芦澤實春 (長野縣)	機關銃名射手西保障激戦に偉功を樹て、散華す……………二九九
歩兵 伍長 秋鹿才一 (鳥根縣)	孝子の輕機分隊長剛膽沈着猛火を冒して奮戦子牙河畔に散る……………三〇三
騎兵 伍長 赤井 淳 (鳥取縣)	率先々頭に立ちて村落内に奮戦敵の狙撃を受けて旺子村に散る……………三〇七
工兵 伍長 新井 中 (茨城縣)	雨下する敵弾下に勇敢機敏衛河の偵察を果して惜しくも敵弾に斃る……………三〇三
衛生 伍長 足立貞雄 (兵庫縣)	勇敢なる衛生兵幾多傷者を救ひ馬落坡の激戦に其の職に殉ず……………三〇〇
衛生 伍長 安東仙之助 (岡山縣)	衛生兵馬廠攻撃に身を忘れて傷者を介抱斃るるも之を庇護す……………三〇三
歩兵上等兵 有木房吉 (和歌山縣)	擔架兵彈雨の下勇敢に傷者を收容傷つ……………三〇九
歩兵上等兵 新木正雄 (大阪府)	くも尙搬送せんとして石板山に散る……………三〇九
歩兵上等兵 阿部富夫 (岡山縣)	輕機射手獨斷奮戦小隊突撃の動機を作爲し遂に團河村に散る……………三五三
	輕機關銃射手團河村に奮戦して遂に北支の華と散る(兄弟戦死)……………三五四

歩兵上等兵 淺香登美男 (栃木縣)	戰鬪慘烈の下毅然として奮戦惜しくも大冊河の陣前に散る……………三五六
歩兵上等兵 阿部 徳 (長野縣)	積極奮戦歩兵の本領を發揮して中隊戦勝の因を爲し大冊河畔に散る……………三五八
輜重兵一等兵 秋月 榮 (愛知縣)	忠誠勇武の馬取扱兵上海戦線に活躍し惜しくも羅店鎮郊外に玉碎す……………三六〇

さ

衛生 准尉 坂本喜兵衛 (茨城縣)	忠勇慧敏の衛生下士官第一線に活躍し遂に大冊河畔に玉碎す……………三七〇
歩兵 曹長 齋藤公雄 (岩手縣)	滿洲事變殊勳者再び外長城線に偉功を樹て遂に陽高城の華と散る……………三八〇
歩兵 曹長 笹川子之太郎 (福島縣)	勇敢なる分隊長峻峻なる南口西方高地を奪取して玉碎す……………三八三
砲兵 軍曹 齋藤孝平 (福島縣)	險難なる山西舊關の戦鬪に彈藥補充を完うして職に瘞る……………一〇四
衛生 伍長 坂本吉胤 (兵庫縣)	難局に傷者を救護し遂に天津南方小王莊の苦戦に散華す……………一一一
歩兵 伍長 坂入啓之助 (茨城縣)	天資優秀剛勇の士平漢沿線に每戦奮闘偉功を奏し遂に范驛村に玉碎す……………三〇五
歩兵 伍長 酒田 肇 (鳥取縣)	積極果敢なる分隊長每戦偉功を奏し遂に正莊血戦の華と散る……………三〇七
砲兵 伍長 酒井岩松 (長崎縣)	天險南口鎮附近に十數倍の敵を撃退し中隊の危急を救ふ……………三一一
歩兵上等兵 佐藤光太郎 (兵庫縣)	人情美の勇士滄州血戦に奮闘遂に玉碎す……………三二三
歩兵上等兵 澤田 實 (兵庫縣)	機關銃手彈雨の下勇敢活躍奮闘して團河村に散る……………三二五
歩兵上等兵 櫻井大次郎 (群馬縣)	拒馬河可西務に奮闘殊勳を奏し惜しくも敵の空爆に玉碎す……………三六七
歩兵上等兵 佐藤庚三 (栃木縣)	伎倆優秀の擲彈筒手毎戦々勝の基を拓きて拒馬河畔に散る……………三七〇
砲兵上等兵 佐々木壽夫 (愛知縣)	忠誠勇敢なる通信手津浦線に奮闘し遂に黃河北岸の華と散る……………三七二

索引

輻重兵一等兵 坂本松雄 (山梨縣) 壯烈大敵と奮戦死闘して小寨村に玉碎す……………七五

輻重兵上等兵 里崎一男 (徳島縣) 羅店嶺敵陣地前に決死衝鋒自働車を収容して重傷を負ひ遂に其の職に喰る……………六四

歩兵 曹長 岸下利男 (鹿兒島縣) 分隊長敵の逆襲を撃退して左側の危険を除き惜しくも南苑の華と散る……………八五

歩兵 伍長 木原一雄 (鳥取縣) 優秀なる分隊長馬廠會戦に活躍し惜しくも滄州會戦の緒戦に散華す……………三〇

歩兵 伍長 清川範治 (鳥取縣) 挺身敵陣地を偵察し後分隊獨立奮戦して敵を牽制鄰庄に散る……………三三

歩兵 伍長 北川光夫 (島根縣) 津浦線正莊の激戦に重傷を負ふも尙部下を督勵して玉碎す(殊勳甲)……………三六

歩兵 伍長 北村秀由 (鳥取縣) 輕機彈藥手死生を顧みず其の任務に邁進し開古庄に散る……………三八

歩兵 上等兵 菊岡康之 (京都府) 忠孝の士、立哨中敵襲に際し敢然單身敵中に突入格闘して玉碎す(壯烈)……………七七

歩兵 上等兵 菊池正三 (栃木縣) 率先奮闘中隊戦勝の素因を爲して惜しくも大冊河畔に散る……………七三

砲兵 上等兵 木下勝次 (兵庫縣) 忠勇なる後馬駟者津浦線北霞口に奮戦し悲壯砲側に玉碎す(壯烈)……………七四

輻重兵一等兵 木全福一 (岐阜縣) 皇軍輻重の華、上海戦線に活躍し遂に大場嶺郊外に玉碎す……………七七

歩兵 上等兵 湯淺春一 (大阪府) 輕機射手重傷を負ふも尙銃側を離れず行宮の陣地前に玉碎す……………七九

歩兵 中尉 栗日出夫 (東京市) 万全攻撃の殊勳者惜しくも嶮縣城外の華と散る……………七九

歩兵 伍長 水野良雄 (山形縣) 勇猛果敢手榴弾を以て獨斷トーチカ機關銃を撲滅して寶店嶺の華と散る……………三二

歩兵 伍長 宮坂勘一 (長野縣) 快速部隊の勇士難局に機關銃陣地を偵察し新樂郊外の華と散る……………三三

歩兵 伍長 宮崎勝治 (兵庫縣) 重傷に屈せず擲彈筒の威力を發揚し遂に行宮の激戦に散華す……………三五

歩兵 上等兵 三島一弘 (兵庫縣) 忠誠慧敏の勇士馬落坡に奮闘して惜しくも玉碎す……………七九

歩兵 上等兵 三木信雄 (兵庫縣) 孝悌の勇士津浦線四黨口に擲彈筒の威力を發揚し戦勝の途を拓く……………七九

歩兵 上等兵 宮内徳治 (茨木縣) 敵陣近く進出掩蓋機關銃位置を偵察して戦勝の素因を作る……………七九

歩兵 上等兵 三輪五郎 (群馬縣) 京漢線澤畔店に決死重任に就きて玉碎し同戰場の實見形見の飯盒を残す(戰場悲話)……………七九

歩兵 上等兵 三森七郎 (栃木縣) 擲彈筒手毎戦奮闘中隊戦勝の素因を爲して大冊河畔に散る……………八〇

歩兵 上等兵 溝上正夫 (鹿兒島縣) 重傷を受くるも尙奮戦を続け遂に南口の華と散る……………八〇

歩兵 上等兵 宮本泰 (和歌山縣) 南苑陣地直前の水濠偵察に勇敢挺身し重傷を負うも尙任務を遂行して散華す……………八〇

歩兵 上等兵 宮下政英 (長野縣) 率先勇敢突撃前進して黃村の陣前に散る……………八〇

歩兵 上等兵 宮城幸雄 (鳥取縣) 傳令萬難を排して重傷を果し中隊長と共に勇戦奮闘姚官屯に玉碎す……………八〇

砲兵 上等兵 水本茂 (岡山縣) 孝子津浦線に奮闘し滄州南方北霞口の大敵襲に玉碎す(壯烈)……………八三

騎兵 上等兵 宮崎省吾 (青森縣) 素朴豪膽の勇士北滿討匪に奮闘し遂に富錦郊外の華と散る……………八六

砲兵 曹長 白濱元 (佐賀縣) 急迫なる状況下に豪膽適切なる指揮を以て部隊の危急を救ふ(殊勳甲)……………八八

歩兵 伍長 笹田正一 (長野縣) 擲彈筒の名手西保障の激戦に偉功を奏して玉碎す……………三八

歩兵 伍長 島田朝吉 (北海道) 寡兵十數倍の共匪と奮戦して輸送物件を守護し北滿牡丹崗に玉碎す……………三〇



歩兵 伍長	清水 秀次 (長野縣)	沈着勇敢なる小銃手大冊河畔黃村攻撃に手榴彈戰の華と散る……………	三三
歩兵上等兵	篠塚勘太郎 (茨城縣)	勇敢なる速射砲手元氏附近に奮闘して華北の華と散る……………	八八
歩兵上等兵	白井辰之助 (長野縣)	惨烈なる戦況下重傷に屈せず強行渡河を掩護して大冊河畔に散る……………	八二
歩兵 中尉	樋口 要 (愛知縣)	擔架小隊長大追撃戦に勇奮活躍し蘇州河畔に斃る……………	三三
歩兵 伍長	東森 光雄 (鳥取縣)	積極挺進擲彈筒を指揮して苦況を打開し西子牙鎮に散る……………	三五
砲兵上等兵	平岡 茂 (愛媛縣)	通信手彈雨の下勇敢機敏斷線箇所を復舊し江南南梅宅に散る……………	八三
歩兵上等兵	廣木 榮 (栃木縣)	拒馬河渡河戦に於て決死猛火の下先頭舟を搬送中敵の集中火に玉碎す……………	八五
歩兵 伍長	森川小太郎 (山口縣)	至孝誠忠の士勇敢奮戦正に群を抜き惜しくも南苑の陣内に散る(軍民の鑑)	三七
歩兵上等兵	森本 正 (兵庫縣)	忠勇なる小銃手津浦線四黨口に奮闘し戦勝の礎石となる……………	八七
歩兵上等兵	本城重太郎 (兵庫縣)	孝悌忠勇の小銃手滄州決戦に奮闘し戦勝の礎石となる……………	八〇
歩兵上等兵	元永鹿太郎 (福岡縣)	剛勇なる機關銃手清河鎮南口攻略に偉勳を樹て、其の職に瘡る……………	八三
歩兵 中尉	瀬川博真 (兵庫縣)	緒戦に於て率先勇敢至難の敵翼包圍を完成し潮宗橋に散華す……………	六
歩兵 軍曹	關武一 (兵庫縣)	指揮班員として張新庄夜襲に寡兵克く敵の逆襲企圖を挫折す……………	一〇三
歩兵 伍長	妹尾久雄 (岡山縣)	敵陣に突入三名を刺殺して唐官屯攻撃の華と散る……………	三〇〇

す

歩兵 伍長	杉本源藏 (宮崎縣)	良兵良民の鑑、上海戰齊家宅の夜襲に奮戦して玉碎す……………	三四三
砲兵 伍長	鈴木龜松 (福島縣)	興家の勇士山西省娘子關の天險に奮闘して玉碎す……………	三四四
歩兵上等兵	隅谷 進 (大阪府)	重傷に屈せず射弾觀測を續行し小十三里村の側防機關を撲滅す(忠孝の鑑)	八三
歩兵上等兵	須佐見 清 (和歌山縣)	機關銃手毅然として激戦の惨烈に耐へ積極奮闘松塔鎮に散る……………	八六
歩兵上等兵	鈴木村一郎 (岡山縣)	擲彈筒手勇敢沈着敵潰滅の端緒を拓きて團河村に玉碎す……………	八四〇
歩兵上等兵	數原正雄 (兵庫縣)	忠誠敢爲の勇士張新庄の激戦に寡兵衆敵と闘ひ遂に玉碎す……………	八四三
歩兵上等兵	杉浦高夫 (大阪府)	輕機射手壯絶腸露出の儘行宮に突撃して遂に中途絶命す……………	八四五
騎兵上等兵	鈴木 稔 (長野縣)	誠實沈勇の傳令江南戦線に活躍し惜しくも羅店鎮郊外の華と散る……………	八四七
騎兵上等兵	須田七郎 (愛知縣)	皇軍輜重の華、苦闘三十數時間遂に通州血戦に玉碎す(壯烈)……………	八四九
騎兵上等兵	鈴木喜七 (靜岡縣)	皇軍輜重の華、苦闘三十數時間遂に通州血戦に玉碎す……………	八五三

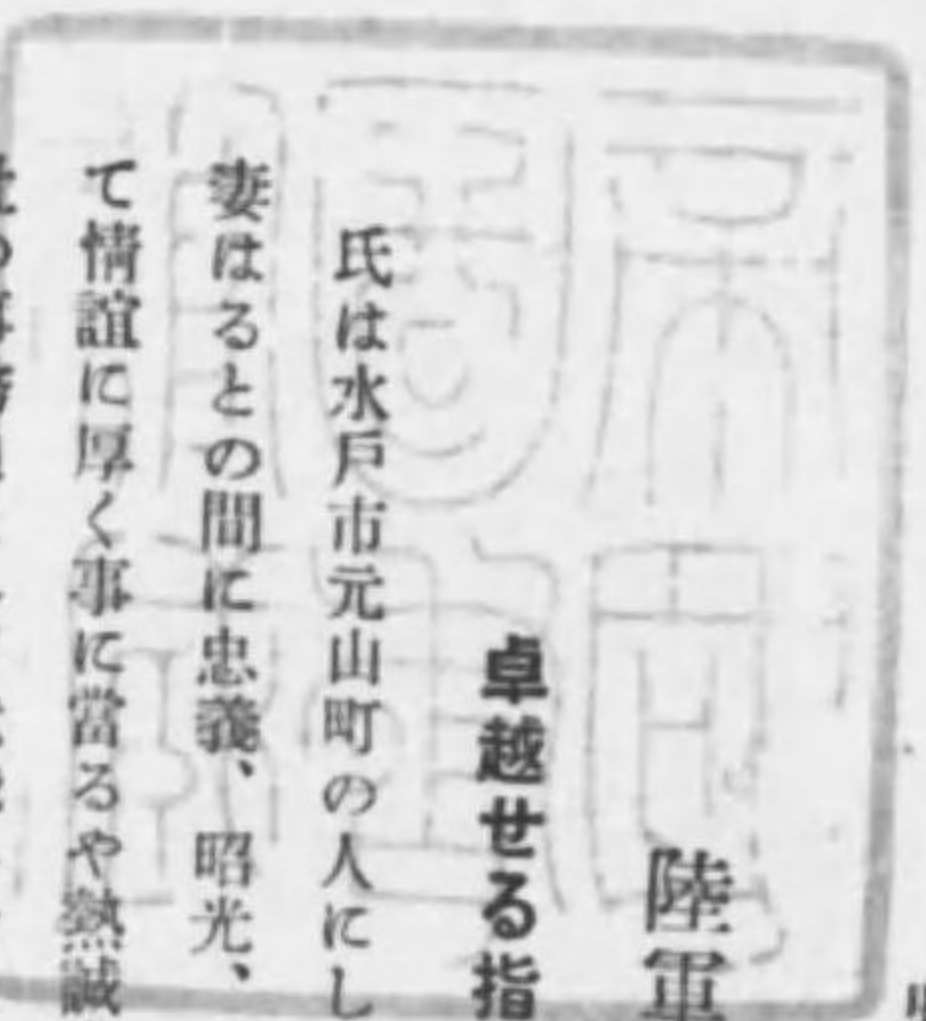
支那事變 忠勇列傳 陸軍之部 第五卷

忠勇顯彰會編纂

將校准士官之部

陸軍歩兵少佐正六位勳四等功四級 小泉寅三

卓越せる指揮を以て毎戦偉功を奏し遂に元氏郊外の華と散る（殊勲甲）



氏は水戸市元山町の人にして亡父を信亡母をあさと云ひ明治二十三年十二月一日に生れ實兄小泉定吉夫妻の養子となり妻はるとの間に忠義、昭光、武之、弘文、八世子及喜世子の子寶を授けられた。性剛毅闊達にして氣概に富み又一面極めて情誼に厚く事に當るや熱誠進取の人であつた。明治三十七年六月水戸小學校高等科を卒業し同四十年五月より東京集金社の事務員として就職し餘暇を以て大岩商業學校専修科夜學部へ通學したが都合に依り中途退學し翌四十一年十二月十八歳を以て現役志願兵となり水戸歩兵聯隊へ入營し下士官を志願して歩兵伍長に任官し爾來精勵克く其の手腕を伸べ累進又累進し昭和九年八月には歩兵大尉に進級した。其の間西比利亞出兵及滿洲事變に出征して武勳を奏し昭和十一年八月には勳四等瑞寶章を賜はつた。

將校准士官之部

支那事變起るや石黒部隊に屬し佐々木大隊の中隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支へ到着同月十二日より永定河北岸地區に於て對岸北相各莊の敵陣地に對し攻撃を準備した。永定河は河幅約百米にして水深胸に達し且水勢急で敵の陣地は亦堅固であつた。我が軍は十四日午後二時より砲撃を開始し歩兵は同日夕刻より翌十五日未明にかけ敵前渡河を決行した。氏は所屬大隊の右第一線となり永定河の濁流を徒渉して敵の第一線陣地を突破し陣内戦に入つたが隣接第一大隊が苦戦の状態となるや所屬大隊長より敵陣地の右翼を包圍して之に協力すべく命ぜられた。氏は巧に部下を誘導し陣内深く潛入して其の右側背を突破し敵に多大の損害を與へ遂に之を潰亂敗走せしめ迅速積極的に任務を完遂した。



所屬部隊は敵を急追して拒馬河畔に壓迫したが隣接の坂西部隊主力は渡河後優勢なる敵軍の爲全く包圍せられ屢々其の逆襲を受け苦戦の状態に在つた。此の時氏は所屬大隊の右第一線となり重機關銃一小隊を併せ指揮し熾烈なる敵の銃砲弾を冒して濁流を徒渉し續いて率先敵陣地に突入し疾風迅雷可西務附近の敵陣地を撃破して之を潰走せしめ所屬大隊の戦闘を最も有利に進展せしめたるに止まらず坂西部隊の戦況進展に好影響を與ふるに至つた。

斯くて所屬大隊は九月二十一日より大冊河畔石頭村附近の攻撃を開始するや氏の中隊長は當初大隊豫備隊として控置されたが愈々堅固なる第二陣地の攻撃に入るや右第一線中隊を命ぜられた。我が歩兵砲及機關銃隊は道路不良の爲未だ來着せず所屬大隊の戦闘力は十分ではなかつたが氏は適切に部下を部署し率先之を突破し更に敵が最後の抵抗線と恃める王谷莊

堡に對し其の左翼を包圍し隣接部隊と確實なる連絡を維持し遂に之を占領し次で神速果敢なる追撃に依り敵の退路を遮斷し殊に北辛莊附近に於ては第六中隊と協力し約二百名の敵に徹底的に打撃を與へ保定陥落の期を早むる一要因を成す等其の驍名を顯はれた。

十月十一日所屬部隊は元氏附近の敵陣地を攻撃したが氏の中隊長は當初大隊豫備隊として行動し夜間陣内突破戦の開始せらるゝや第二線攻撃部隊となりて第一線中隊の進路を續行し我が第一線部隊の攻撃を妨害する敵の側防機關に對し適時中隊の一部又は主力を以て側背より突入せしめては之を撃破し以て第一線部隊の陣地奪取を援助確實ならしめた。此の夜九時頃敵の逆襲企圖を察知し氏は第一線中隊たりし第六中隊長と協定し機先を制して突入撃破せんと決心せし際所屬大隊長よりも中隊全力を以て右側方より敵逆襲部隊の側背に突入すべき命令に接し氏は直ちに中隊を提げ最先頭に在りて群がる敵中に斬り込んだ。此の時氏の身邊に隨ふ者僅かに五、六名であつたがやがて追及せる部下主力も敵の側方に突入し多數の敵兵を刺殺し遂に之を潰走せしめた。然るに此の際一彈飛來氏は左下腿部に貫通銃創を受け打倒れたが屈せず尙も匍匐前進を續け部下を叱咤激勵して居た。其の後所屬部隊が自動車追撃に移るや氏は「自動車なら行けるから是非第一線へ」と嘆願したのであつた。併し重傷の身は元より同行し得べくもなく直ちに收容せられ次で入院の上手厚き加療を受けたのであつたが遂に左脚切斷の已むなきに至り而も經過思はしからず十二月十日惜しくも護國の華と散つたのであつた。氏は非常な部下思ひで出征後も陣中より實見に宛て自己の代理として戦死者の遺族を慰問すべき事を戦死者のありし度毎に依頼して居た程で氏の戦死に對し部下は何れも悲歎の涙に咽んだとの事である。

氏は多年軍務に服し熱誠眞摯倦む事を知らず部下に對する恩威並び行はれ部下皆悦服遂に鐵血中隊を率ひて聖戦に参加するに至つた。あゝ突破戦線百数十里掃風沐雨幾多の辛酸を克服しつゝ典型的實兵指揮官の眞價を發揚して毎戦偉勳を奏

し光輝ある戦勝獲得に至大なる貢献を提供した。今や斯かる忠誠有爲の指揮官を喪ふ眞に痛歎哀悼に堪えずと雖も氏が累次の武勳は天晴皇軍戦史に異彩を放ち其の芳名は百世に誦はれ英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守護し又一家殊に愛子等の前途に尊き加護照覧を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵少佐に進級し従六位に叙せられ次で勳四等旭日小綬章並に破格の功四級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級 松下武男

#### 發明的天才の將校正太線戰場に奮闘し惜しくも中山村の峡谷に玉碎す

氏は鹿兒島縣日置郡伊集院町の人にして亡父を金太母をケサクリと云ひ明治三十六年四月八月に生れ妻ヒデとの間に兼備、兼偉及きよの三愛子を挙げた。性純情にして直情徑行頭腦明晰の人であつた。氏は又友情に厚く舊友の病氣を耳にすれば多忙の際にても必ず之を見舞ひ遠く郷里を離れし後も安否を尋ねる等其の友情には舊友等しく感激して居たとの事である。大正七年三月郷里の高等小學校を又大正十二年三月には鹿兒島縣立第一鹿兒島中學校を卒業し其の後直ちに九州齒科學專門學校本科へ入學したが父死亡に依り中途退學し其の後縣内郡山小學校に教員を奉職したが氏は常に學術を如何に活用すべきかに就き不斷の工夫を凝らし實地の活用に努めて居た。大正十四年十二月一年志願兵として歩兵第四十五聯隊へ入營し翌十五年十二月歩兵軍曹に任じ滿期除隊となり昭和四年三月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられた。現役滿期後は依然小學校教員を奉職し昭和六年三月には實業補習學校教員養成所を卒業して三笠高等公民學校の助教諭を拜命し昭和八年八月には師範學校中學校及高等女學校の教員免許狀を授けられた。昭和十年春特別志願將校として採用せられ大邱

歩兵聯隊附となり同年五月丙種學生として千葉歩兵學校へ分遣を命ぜられ同年七月下旬卒業の上歸隊し翌十一年九月歩兵中尉に進級次で従七位に叙せられた。

支那事變起るや鈴木部隊に屬し和爾大隊の第四中隊長として勇躍征途に就き九月上旬北支に上陸するや所屬隊は直ちに長辛店附近の要點を占領し同月中旬にかけて集中掩護の任に就いた。其の間開古庄(長辛店西南方)附近の戦闘に於て氏



の中隊は大隊の左第一線となりて勇戦し優勢なる敵部隊を撃攘して守備の重任を全うした。斯くて我が軍は永定河々畔の敵陣地を突破し急追撃に移り所屬部隊は間もなく琉璃河附近の敵陣地を攻撃するに至つた。此の時氏の中隊は左翼隊の豫備隊として第一線部隊の後方を前進中九月十五日夜四世庄北方道路附近に於て多數の敗殘兵に會し徹宵之が掃蕩に任じ又適時友軍砲兵隊を掩護する等目覺しき活躍を續け翌十六日には第一線部隊への彈藥補充を區處して第一線部隊の戦力維持に多大の貢献を爲した。斯くて所屬部隊は琉璃河附近の敵を撃攘し翌十七日より敵を追撃して保定南方地區に向ひ前進し石坂山方須橋高荊村及望都附近の戦闘に参加したが氏の中隊は其の間大隊豫備隊となり追撃間も爲に部隊最後尾を前進せしめられ痺肉の嘆を仰ちありしが氏は克く泥濘に悩む車輛諸部隊の前進を援助し夜は自衛力少き之等部隊の爲至嚴なる警戒に任ずる等隠れたる活躍を續けて居た。次で十月五日滹沱河畔に向ひ追撃を開始せらるゝや中隊は待望の尖兵中隊を命ぜられ進路上の敗敵を蹴散らして部隊の前進を容易ならしめつゝ田營鎮に向ひ前進し愈々滹沱河畔の敵陣地を攻撃するに

至るや大隊の左第一線中隊として疾風迅雷の勢を以て逐次敵陣地を攻略し以て大隊の戦果獲得に大なる貢献を與へた。所屬部隊は其の後山西省太原方向に對する作戰の爲左進撃隊となり山岳地帯を西進するに至つた。敵は其の精銳を誇る支那中央軍にして古來難關を以て有名なる娘子關一帶の天險に據り頑強なる抵抗を企圖して居た。十月二十三日所屬部隊は先づ舊關の堅壘を奪取すべく所屬大隊は午後三時半展開を完了し氏の中隊は中央第一線となり攻撃前進を起した。此の時敵は三方より熾烈なる銃砲火を浴びせて來たが氏は克く部下を掌握し險峻を攀登して敵陣地に肉薄し夜に入りて數回の逆襲を受けたが冷靜沈着好機に投じて敵に猛射を浴びせ多大の損害を與へて毎回之を撃退し次で隣接中隊と協同し自ら陣頭に立ち壯烈果敢なる突撃に依り之を奪取するに至つた。續いて附近の山岳戦に参加し同月二十五日には流石に天險を誇りし附近一帶の堅壘を突破し同月三十日平定を占領するに至つた。所屬部隊は更に敵を追撃して十一月二日平定を出發し松塔鎮を経て榆次方向に向ひ前進を續けた。氏の中隊は縦隊の最後尾を前進し野戰病院衛生隊彈藥小隊等行軍長徑約二千米に亘る長縱隊の護衛を命ぜられた。午後零時半此の縦隊は中山村附近を前進中であつたが左右兩側は險峻なる山岳屹立し路面甚だ不良なりし爲特に衛生隊は後進遲滞し前方を行進せる彈藥小隊と著しく離隔するに至つた。茲に於て氏は彈藥小隊の危險を顧慮し附近にありし部下の一小隊に直ちに彈藥小隊に追及すべき事を命じ又後續部隊に對する處置を講じ自身は所要の指揮班員を隨へて前進し中山村の西方に進出するや突如熾烈なる敵彈を浴びた。氏は沈着冷靜先づ敵情を視察せんと直ちに谷底より路側の臺上に駆け上りしに無念敵より狙撃せられ頭部に貫通銃創を受けた。氣丈の氏は瀕死の重態に在り乍ら尙軍刀に身を支へ攻撃命令を下して遂に壯烈なる戦死を遂げた。當面の敵は約二箇聯隊の大敵にして中山村附近より松塔鎮附近にかけ峡谷を利用して待伏せて居たのであつた。中隊長を喪ひたる部下中隊は悲憤の涙を抑へつゝ直ちに攻撃に移り惡戰苦闘の後敵を撃退し午後十時部隊を集結するを得た。

氏は天真爛漫一隊の元氣者と稱せられ數學理學に通曉し軍用照明器二種を發明して今次戰闘に活用され又八九式重擲彈筒射撃用具を考案して師團長より表彰を受け尙師團劍術大會に於て全勝して師團長賞を授けられし程の猛將なりしに不利なる地形に於て大敵に遭遇し早くも兇彈に斃れしは千秋の恨事とする處である。併し乍ら參戰以來幾多の戰闘に参加し指揮掌握適切にして所屬部隊の戦勝獲得に貴重なる素因を與へた其の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史を飾りて芳名は千載に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵大尉に進級し正七位に叙せられ次で勳五等双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍軍醫大尉正七位勳六等功五級 梶山利男

#### 二世俊才の軍醫一死其の重責を完ふして護國の華と散る(山西省東溝)

氏は廣島縣安藝郡海田市町の人にして父を市松母をムラと云ひ其の一人息子として明治三十九年九月十七日加奈陀カンパイルランドに生れ未だ獨身であつた。資性温順思想穩健殊に孝心深く年長を敬ひ頭腦明晰稀に見る俊才であつた。又運動に趣味を有し野球ゴルフ等の選手として白人間にも知られてゐた。大正四年九月加奈陀カンパイルランド國語學校を卒業引續きパブリックスクールに入學同十一年九月卒業更にパブリックハイスクールに入り同十五年首席にて卒業金メダルを授與せられ同年九月B.C.大學に入學昭和五年同大學文科を首席にて卒業したが別に又大正十五年九月トロント醫科大學にも入學し同學に於て各級進級試験に首席を占め毎年獎學金三百弗を授けられた。而して昭和八年には同大學より選ばれて汎

米醫學會員となり同年同大學を二番にて卒業しドクターの學位を受け同年十月兩親と共に歸朝し十一月より東京聖ルカ國際病院に勤務してゐた。昭和十一年二月看護兵として奉天獨立守備歩兵隊に入營し同年九月優秀の成績を以て短期軍醫に合格し龍山歩兵聯隊に配屬せられ同十二年四月軍醫中尉に任官し從七位に叙せられた。



支那事變起るや森本部隊中川大隊に屬し大隊附軍醫として昭和十二年七月十六日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し南苑坊靈壽等の各戦闘を経て十月上旬滹沱河の渡河戦には王母村附近の戦闘に十月下旬娘子關附近の戦闘には木曹松樹村石門口西郊等の各戦闘に参加し毎戦多數戦傷者續出せるに拘はらず彈雨の下勇敢機敏に活躍して多數傷兵を救護して大いに將兵の信頼を受くるに至りしのみならず大隊長の戦闘指導に精神上の貢獻を爲せし所尠くなかつた。

十月二十九日所屬大隊は平定縣東溝附近(山西省)の既設陣地に據れる約一聯隊の敵に對し午前十時より攻撃を開始し各種重火器協力の下に第一線中隊は逐次攻撃前進し其の近迫に伴ひ戰闘漸次激烈となり第二中隊は將に敵の前進陣地を奪取せんとする頃氏は大隊本部の位置にありしが第二中隊方面に多數傷者發生の報に接するや其の頃敵の機關銃小銃彈の飛來愈々熾烈を極めしに拘はらず氏は擔架兵を激勵しつゝ彈雨の中を前進して第一線に進出し篠つく雨の如き敵彈下に衛生兵擔架兵を指揮して傷者を手當收容し午前十一時二十分頃無事之等の救助後送を終り大隊本部の位置せる東溝村東側高地に歸りしが時恰も同地附近に於て戰闘中なる我が速射砲中隊の南潮伍長が腹部に

受傷せるを見直ちに之が救護に當り重傷の爲意氣銷沈せんとせる同伍長を鼓舞激勵しつゝ救急處置を講じて死の危機を脱せしめ次で之を速かに後方に擔送せんが爲擔架兵を招致せんと折敷其の儘の姿勢を以て振り返り擔架兵を呼びつゝある時無念敵機關銃の一彈は氏の左胸部を貫き午前十一時三十五分同伍長の腕を握りたる儘其の場に倒れ微かながらも口の中に陛下の萬歳を奉唱し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。かくと知りたる將兵一同は恰も慈母に別れし如く其の死を惜しまぬものはなかつた。其の遺書に「此の度帝國軍人の一員として御國の爲に斃れることは男子として無上の光榮とする所である、殊に小生の如き外國生れの二世でも國を思ふ心に二つなく事に臨み喜んで身を國家の爲大君の爲に捧げ得ると云ふことを示す機會を得たことを感謝する」とあり彈雨の下身の危険を顧みず其の職責に活躍せるは蓋し此の精神の流露と謂ふべきである。

氏や醫學の俊秀であり其の戦陣に臨むや四周非衛生極りなき北支に於て而も皇軍破竹の進撃に伴ふ兵員の過勞物資缺乏に伴ふ兵員體力の衰弱に處し粉骨碎身以て大隊の衛生成績向上に苦心貢獻せし所甚大なりしは勿論毎戦々陣に立つや彈雨の下剛勇敢只管其の職分に邁進し遺憾とする所はなかつた。かくの如きは醫官たる重責の存する所一身を君國に捧げ盡るゝまで職分を遂行せんとせる旺盛なる責任觀念の發露にして一面遺書に披瀝の如く所謂第二世たりと雖も其の血管には大和民族の血は滔々として流れ其の血液中に存する我が國古來傳承の日本精神を遺憾なく發揮し身を以て盡忠の赤誠を顯現せしものと謂ふべきである。然るに參戰幾何もなくして此の忠烈優秀の醫官を喪ひしは國軍の大なる損失にして洵に痛惜哀悼に堪えざる所である。併し氏が其の職責に一死奮闘して以て樹てたる拔群の勳功は赫々として千載に亘りて皇軍衛生史を飾り其の芳名は醫官の華として千古に驅はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

因に氏の忠烈勇敢なる活動と戦死の状況はカナダ新聞トレント新聞にも掲載せられていたく内外人を感激せしめたのであつた。

氏は戦死の日軍醫大尉に進級し正七位に叙せられ次で勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 岩本 二郎

#### 青年將校の模範北滿五頂山の討匪に積極奮戦惜しくも散華す

氏は和歌山縣和歌山市宇須の人にして父を孝之助母をとみと云ひ大正四年二月十三日に生れ未だ獨身であつた。資性快活恬淡頭腦明晰にして孝心極めて深く又友情に富み部下に對しては骨肉の情を以てし上下の信望厚く殊に氏は研究心旺盛寸暇を惜しみて勉學し青年將校の模範として將來を囑望せられてゐた。昭和七年三月和歌山中學校卒業在校間成績優秀引續き陸軍士官學校豫科に入校し同十一年六月同校本科卒業同年十月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられ和歌山歩兵聯隊附に補せられた。

昭和十二年四月所屬部隊と共に滿洲に派遣北野部隊清水隊小隊長として奉天に駐屯し六月三江省湯原縣蓮江口に移駐し約一ヶ月の間同地附近の警備に任じた。此の期間短かゝりしも氏が警備の爲遣したる成果は決して尠くなかつた。殊に七月下旬討伐肅正に出動するや常に先任小隊長として中隊長を輔佐し當時連日の降雨と惡路を冒し殆ど數日間は全く泥水の中の行動なりしにも拘はらず不屈不撓部下を激勵し克く小隊を掌握して肅正行動の樞軸となり同月二十五日東板子房に於て敵匪と遭遇するや小隊獨力該匪を驅逐する等積極的に活動して克く其の成果を擧げた。次で八月四日湯原縣蓮江口を出

發し富錦の西方西安鎮附近の討伐に向ふや八日太平溝附近に於て匪賊に遭遇した。其の際氏は尖兵長として勇敢機敏に行動し瞬時にして該匪に多大の損害を與へ爾後中隊展開するや其の左第一線となり中隊長指揮下に該匪を勇敢に攻撃し遂に之を潰走せしむるに至つた。



九月八日中隊は太平川屯に於て肅正行動中午後二時頃富錦同江縣境五頂山に共匪(獨立師)約三百ありとの情報に接するや之を攻撃する目的を以て午後三時太平川屯出發五頂山に向つた。氏は此の時も尖兵長として前進し途中早くも五頂山西麓部落に約二百五十名の共匪あり現在其の後方高地を占領しつゝある事を發見し直ちに中隊長に報告すると同時に急速なる歩度を以て一舉山麓部落を占領し尖兵の後方を續行せる機關銃小隊長と協同して獨斷射撃を開始し以て中隊主力の展開を掩護し午後五時四十分中隊展開を終るや其の左第一線となり攻撃前進を開始した。當時敵彈熾烈を極め時刻の經過と共に我が死傷益々増大せん事を顧慮し機關銃小隊長と協同して適切なる指揮の下に一意前進して遂に五頂山の最高地脚に進出し部下を掌握して突撃の機熟するを待つた。總て我が機關銃小隊の進出に伴ひ敵兵動搖の色あるを看取るや氏は猛然自ら陣頭に立ちて突撃を敢行せるに該山頂を占據せる約三、四十名の敵は驚愕して山頂を棄て退却を開始せるを以て直ちに該山頂を占領確保することを得た。然るに敵は一旦山頂を棄てたるも地形上所詮退却不可能なるを知り反對斜面の中腹に踏み止まりて頑強に之を死守抵抗し猛射を我に浴びせ來りし爲我が軍死傷相次で生ずるに至り加之谷を隔てたる三

百米前方の高地より輕機關銃の急射と右側方より急霰の如き射撃を受け小隊は今や苦戦に陥るに至つた。併し氏は毫も之に屈することなく沈着克く部下の地利利用にまで細心の注意を喚起し適切に部下各分隊を部署して的確なる射撃指揮をとると共に自らも拳銃を執つて近く正面にある斜面の敵を射撃しつゝ部下の志氣を鼓舞し鬼神の如き活躍奮戦を続けつゝあつたが午後六時三十分前方高地より射撃せる敵の一弾は無念氏の前額部に命中し再び起つ能はず一言微かに 聖上万歳の聲を遣して壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし敵は氏の勇敢なる行動により聽て全線動搖を始め多大の損害を受けて周章狼狽遂に潰走するに至つた。

夫れ氏の警備地たるや南中北支戦線の如く世の注目を牽くこと尠きも外は滿蘇國境一觸即發の危機に備へ内は同胞の大陸發展に不可欠の治安肅正を要し其の重任と苦心とは蓋し想察に餘ある所であつた。然るに此の環境の下氏の北滿警備に就くや一面教官としては對蘇討匪必勝必滅の訓練に日夜精進すると共に他面指揮官としては屢々中南北支の戦闘に讓らぬ危険と辛酸を嘗み常に率先陣頭に立ち其的確なる指揮により討伐の成果を揚げ中にも五頂山の攻撃の如きは積極果敢しかも戦闘惨烈の極所に立ち毅然として部下を指揮し部下亦悦んで其の身邊に斃れ中隊戦勝の端を拓くに至つた。氏素と至孝の人出で、戦陣に立つや素より忠孝一道にして叙上の如きは全く一身を君國に捧げ將校たる負托の重責に一意邁進せる盡忠至誠の發露に外ならずと謂ふべきである。渡滿後幾何もなくして北滿の華と散りしは痛惜に堪えざるも其の奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘りて皇軍戦史に輝き其の芳名は万世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 石井米市

#### 馬廠攻撃に渡河掩護の決死隊小隊長として奮戦其の任を果して玉碎す

氏は岡山縣上房郡上竹莊村の人にして父を友八母をきんと云ひ明治四十三年六月廿六日に生れ妻幸世との間に純一、幸及政恵の一男二女を擧げた。資性濃厚篤實謙讓の美德を備へ責任觀念旺盛しかも霸氣に富み研究心強く農業經營地方産業開發に貢献せし所尠からず爲に昭和十年一月には講談社より「キング」表彰を受けた。元來氏の家は篤農家にして模範的經營を爲し父も曩に帝國農會より特別名譽表彰を受けたのであつた。大正十四年三月崇道小學校高等科を卒業し引續き岡山縣立高松農學校に入り昭和三年三年同校卒業直ちに京都府郡是製絲株式會社蠶事所に入り同四年三月其の課程を修了し爾後前記會社の蠶業技手として勤務し昭和五年十二月幹部候補生として松江歩兵聯隊に入營翌年十一月除隊し昭和九年三月歩兵少尉に任官正八位に叙せられた。除隊後は再び前會社に復職し同十一年退職爾後家にあつて農業に従事し岡山縣上房郡上竹莊村納地養蠶實行組合長となり又同十二年三月より青年學校指導員に推されて居村青年の訓練に力を注いでゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召赤柴部隊高田中隊に編入第一小隊長として八月十日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着するや間もなく八月二十二日には西邊庄の敵陣地攻撃に参加した。此の日所屬隊は午後一時三十分七里堡を出發し午後五時攻撃準備の位置に就き翌二十三日午前五時四十分より中隊の右第一線小隊として攻撃を開始した。氏は雨下する敵の銃砲彈下に克く部下を掌握指揮して勇猛果敢に攻撃前進し遂に午前八時三十分敵に多大の損害を與へて敵陣地を占領し延いて靜海縣附近の敵を全く包圍し其の退路を脅威するに至つた。次で翌二十三日中隊は大隊の左翼據點として東窪附近を警備中同夜午前二時約三百の敵は氏の中隊正面に夜襲して來た。此の時も氏は沈着克く部下を掌握して敵が至近の距



繼に来るまで射撃することなく引き着け一舉之に猛射を浴びせて甚大なる損害を與へて撃退することを得た。其の後九月四日には馬辛庄林庄五日には曲庄陳庄後屯の攻撃に第一線小隊長として勇敢し其の間又將校斥候長として活躍し有利なる報告を呈出する等中隊の戦勝に寄與する所大なるものがあつた。



九月十日所屬赤柴部隊は敵の堅陣馬廠の攻撃を開始することとなつた。其の前日午後所屬高田中隊は重大なる任務を受けた。即ち中隊は決死隊となり運河を通航し十日夕迄に馬廠河對岸に地歩を占め我が主力の渡河を掩護せよとの命令であつた。馬廠河は幅約三十米にして敵は閘門を閉鎖せし爲運河馬廠河共に水深深くして到底徒渉を許さず而も敵は馬廠河對岸を距る五六十米の線に直接配備の陣地を構築し悉く掩蓋を設備し各種火器を配置し巧に側防機關を設置して頗る堅固に構へて居た。氏の率ゆる小隊は中隊の第一線として十日午後二時四十分曲庄に於て發動艇に乗舟して運河を通航し午後三時五十分砲兵支隊射撃終了と共に陸官屯東方馬庄河の對岸に一齊に上陸した。敵の野砲迫撃砲機關銃等の射撃は我が上陸兵に集中せられ眞に敵弾は雨か霰の如き状態であつた。しかし中隊の右第一線小隊長たる氏は之を物ともせず的確なる指揮と確實なる掌握とにより先づ河岸を占領し部下輕機關銃擲彈筒等を適切に部署して爾後全く利用すべき地形地物もなくしかも行動困難なる泥地を自ら率先陣頭に立ちて勇敢に敵の猛烈なる斜射側射を冒して一進一止しつゝ敵に近迫して地歩の獲得に努め敵を猛射制壓しありしか午後四時三十分頃無念敵彈胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しか

し氏の率先勇敢的確なる指揮奮闘は遂に對岸に地歩を占領して我が主力の渡河を容易にし其の結果所屬赤柴部隊は午後七時遂にさしも頑強なりし馬廠陣地を占領することを得た。尙氏が幾多の戦闘を経て本戦闘直前舊友に一書を寄せ惡路惡水蚊軍に困惑の狀を述べ却て「敵の彈なんか苦にはならんです志氣益々旺盛大いにやります」と陣中所感を述べてゐるが氏が如何に勇敢なりしかは蓋し此の心境の現はれであらう。

氏の郷に在るや篤農家として郷閭の信頼を受け今次召されて征旅に就くや克く部下と死生艱苦を共にし爲に期せずして部下の尊信を一身に集め其の彈雨の下常に率先陣頭に立ちて部下を率ひ指揮的確掌握確實每戦小隊の戦力を發揮して遺憾なかつた。就中馬廠攻撃に於ける氏の奮闘活躍は神技的にして實にかくの如きは一身を君國に捧げて只管幹部たる統率の重大負托に答へんとせる旺盛なる責任觀念の發露盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。聖戦幾何もなくして此の良指揮官を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも氏が毎戦樹てたる拔群の武功は赫々として萬世に互り皇軍戦史を飾り其の芳名は千載に武人の華として譲はれ不滅の英魂は護國の神と祀られて神靈尙も皇國の前途を守護すると共に愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し従七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵中尉従七位勳五等功五級 田島和太郎

滿洲事變の殊勲者大册河畔黃村に奮戦し戦勝の途を開いて玉碎す

氏は長野縣小縣郡傍陽村の人にして父を三之助亡母をみわと云ひ明治三十五年四月七日に生れ妻きせとの間に幸子、和

男及輝夫の二男一女を挙げた。性濃厚篤實にして半面豪氣果斷の性格を兼ね備へ事に當るや熱誠眞摯にして倦む事知らず又長上に事へて恭謙已を持し後輩に對しては骨肉の情を以て臨み諸人の敬愛を受けて居た。郷里の小學校を卒業後大正八年十二月十八歳の時現役志願兵として松本歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して優良なる成績を挙げ下士官候補者として教育を受け翌九年西比利亞事件に當り出動活躍し功を以て勳八等瑞寶章を賜はり歩兵伍長に任官し爾後累進して昭和七年歩兵特務曹長に進級すると共に滿洲上海事變に出征し赫々たる拔



群の功を奏し勳六等に叙せられ功六級金鷄勳章を賜はり同十一年には從七位に叙し翌十二年四月歩兵少尉に任官の上豫備役を仰付けられた。歸郷後は郷土須坂中學校教諭心得を拜命し就任幾何も經ずして全校職員生徒の深き信頼を受くるに至つた。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召遼山部隊に屬し見波中隊の第一小隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し九月十四、五日永定河畔の戰闘に参加し十六日には琉璃河の線に敵を追撃し所屬谷島大隊は午前十一時五十分より狼家庄の敵陣地に對し攻撃を開始した。此の時所屬中隊は大隊の左第一線中隊となり氏の小隊は其の左第一線小隊として攻撃前進に移つた。敵は部落の土壁を利用して頑強に抵抗して居たが氏は部下小隊を激勵して前進を繼續する中敵の一部は小嶺にも我が左翼に向つて猪突猛進して來た。氏は頃合を見計らひ猛然此の敵に對し突撃を敢行し之に殲滅的の大打撃を與へて南方に擊退した。此の機宜に適する突撃の結果は所屬大隊正面の頑敵にも動搖を來たさしめ戰勝獲得の一素因をなす

に至つた。

所屬部隊は尙も敵を急追して九月二十日頃大冊河北岸地區に到達し爾後黃村附近の敵陣地に對して攻撃を準備した。敵は大冊河の大障礙を利用し其の南岸地區の諸村落を據點とし數線より成る堅固なる陣地を構築し頑強に抵抗して居た。所屬大隊は二十二日未明濁流胸を浚する大冊河を徒涉し右第一線大隊として同日正午稍々前黃村北側に進出した。當時黃村部落の一部は猶頑敵に依て保有され隣接の友軍加島大隊は之を力攻中であつた。此の時敗退せる敵は兵力を集結し所屬大隊の前面約八百米を我に向ひ逆襲して來た。然るに所屬大隊の位置せる地形は一物の據るべき地物なく全く敵火に暴露して居た。所屬中隊は大隊の左第一線中隊となり氏の小隊は中隊の右第一線として午後零時四十分頃黃村の西側凹地附近に在りし敵を驅逐し此の凹地を占領したが新來の逆襲部隊は附近の殘存部隊と相呼應して熾烈なる十字銃砲火を浴びせ來り所屬中隊も逐次損害を増し攻撃前進困難となつた。氏は泰然毫も戰況を悲觀せず部下を激勵して有効適切なる火力を發揚して敵に多大の損害を與へ第一線諸部隊の追撃前進の動機を作爲すると共に率先追撃に移らんとし部下分隊長に命令下達中憎や一彈飛來氏は右胸部より背部にかけて貫通銃創を受け側に居つた三井一等兵に「やられた」と漏らし乍らも尙も追撃命令を下して居た。其の後敵は我が猛攻に堪えかねて逆襲の企圖を放棄し遂に算を亂して潰走するに至つた。氏は尙も氣力旺盛にして「敵はどうしたか」と尋ね「敵は退却しました」との答を聞いて「そうか」とにつこり笑を漏らし一言私事に及ばずして從容護國の華と散つた。併し氏の積極的奮戰力闘は獨り所屬大隊の戰況を有利に進展せしめたるのみならず加島大隊の戰闘にも有利なる影響を與ふるに至つた。

氏は郷に在りては質實剛健情誼に厚く到る處其の美德を誦はれ軍に従ひては曩に滿洲上海事變に拔群の武勳を奏し今次聖戰に参加するや既往歴戰の體驗に基き克く中隊長を輔佐し又澄利たる意氣と骨肉の温情を以て部下を激勵し適切機敏な

る戦闘指揮に依り毎戦績々たる戦果を収め而して責任觀念の旺盛なる事は死期に至るも尙戦勝を顧念して止まず眞に武人の典型皇軍の精華であつた。今や風發叱咤の壯容に接すべくもなく痛恨哀悼極まりなしと雖も氏が累次の武勳は煥然として皇軍戦史に輝き芳名は不朽に傳へて愈々芳ばしく不滅の英靈は尙愛子等の心身に生くるは勿論護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護照覽を垂ることであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し次で勳五等双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵中尉從七位勳五等功五級 内田 幸榮

#### 誠實勇敢なる小隊長通神攻撃に活躍して戦勝の端を拓く

氏は佐賀縣佐賀郡中川副村の人にして父を圓太郎母をナカと云ひ明治四十一年三月十四日に生れ妻きそとの間に長男徹を擧げた。性淡泊快活にして寡黙宏量克く人を容れ常に責任を重んじ進んで難局に赴くの美風を有し諸人の愛敬を受けて居た。氏は又情誼に厚く孝心深く兄弟に親切にして一家和樂の中心となり舊師に對しては四時消息を怠らず歸郷時には勞を厭はず必ず安否を尋ぬる等稀に見る律義者であつた。大正十一年三月郷里の高等小學校を卒業し其の後は家庭に在つて農業を手傳ひ傍村立實業青年學校へ通學し大正十五年同校第五學年第二學期の課程を修了した。昭和二年一月現役志願兵として龍山歩兵聯隊に入營し同年七月下士官候補者として豊橋陸軍教導學校に派遣され翌三年七月同校卒業同年十二月歩兵伍長に任官し爾來精勵恪勤果進して昭和八年九月歩兵曹長に任ぜられた。其の間滿洲事變に出征し滿洲國輯安縣皮條溝子並に老爺嶺附近に於て匪賊を討伐し又警備の重任を全うし功に依り勳七等青色桐葉章を賜はり昭和十年十月少尉候補者

を命ぜられ次で陸軍士官學校へ入校歩兵特務曹長に進級し翌十一年十一月同校を卒業十二年三月歩兵少尉に任官支那駐屯歩兵聯隊附を仰付けられ同年六月の定期叙勳として勳六等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月蘆溝橋事件起るや品部部隊に屬し永松中隊の第三小隊長として七月十四日夜駐屯地出發天津——通州道を尖兵長となり通州に向ひ前進した。折柄炎熱甚だしく而も情況急を要し難行軍を實施したが氏は克く部下を激勵して尖兵の任務を果し十八日通州に到着した。所屬部隊は爾後通州の警備に任じたが氏は或は巡察將校として舍營地區及市内を巡察して住民の動靜間諜の防遏等治安維持に貢獻し或は繁劇なる警備勤務の傍城壁の攀登法高梁内の戦闘法等部下小隊の教育訓練に積極的活躍を續けて居た。

其の後通州の情勢惡化し我が軍は遂に膺懲の鐵鎚を加ふるに決し七月二十六日夜より攻撃準備に着手したが所屬中隊は翌二十七日に於ける攻撃の爲東兵營方面の敵情地形の偵察を命ぜられた。氏は其の將校候補として三軒家方面の敵情地形を偵察し有力なる情報を擧げ中隊の攻撃準備を的確ならしめた。翌二十七日朝に至り愈々攻撃を開始したが所屬中隊は左第一線中隊となり東兵營の東北角以南の敵陣地を攻撃し同陣地南端に進出すべき任務を受けた。東兵營は二百米平方の地幅を有する廟を平素より利用せるもので其の周圍は高さ三米上幅五十碼の堅固なる土壘を巡らし之に上中下三段の銃眼を設け其の圍壁下には掩蓋を有する散兵壕を設け爆撃及砲撃の損害を避け得る如く構築されて居た。所屬中隊は大隊の攻撃重點を擔當して第一線左中



將校准士官之部

隊となつた。氏の小隊は中隊の左第一線として敵前百五十米に攻撃準備の陣地を占領した。然るに之より敵陣地迄の地形は高梁密生して敵陣地を目視し得ざるのみならず前進方向の維持も困難であつた。氏は機を失せず高梁畑の縁端に挺進して自己小隊の占位すべき幅員、地形を視察して適切に小隊を誘導せるのみならず敵の側防機關銃位置を確認し適時擲彈筒分隊を以て十分なる制壓を加へ所屬中隊が一番乗の榮冠を獲得すべき素因を興ふるに至つた。續いて敵前二十五米の高梁畑の縁端に於て敵の手榴彈小銃輕機關銃の猛射を浴びつゝ輕機關銃を以て當面の敵銃眼に對し猛射を加へると共に率先陣頭に立ち突撃號令を下し將に突入せんとする一刹那惜しくも頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。時に午前九時頃であつた。小隊は直ちに中隊附准尉の指揮を以て奮然圍壁の右破壇孔より突入し、頑敵を粉碎して小隊長の仇を報じ次で東兵營を占領するを得たのであつた。

氏は北支の風雲日に、險惡を加ふる時期に於て傲岸不遜なる頑敵に痛撃を加ふべく周到且機敏豪膽なる行動に依り突撃の諸準備を完了し而も突入の直前に玉碎せるは眞に痛憤禁じ得ぬものがあつたであらう。然れども聖戰の初期に皇軍が疾風迅雷寡兵克く十數萬の敵軍を蹴散らし爾後の作戰に行動の自由を獲得せるは實に氏の如き忠勇義烈の良指揮官の奮闘に俟つ所甚大にして其の赫々たる武勳は皇軍戰史に輝き芳名は永く後世に誦はれ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳五等双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功四級 楠本 三藏

楠公を精神とせる忠烈新進の小隊長屢々偉勳を樹てて東花園に玉碎す(殊勳)

甲)

氏は福岡縣築上郡黒土村の人にして父を甚十郎母をキクエと云ひ大正三年八月二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性高潔剛膽寡言にして氣概に富み忠孝の精神に燃え弟妹を慈しみ上官の命には常に絶對服従し部下に對しては温情頗る厚かつた。昭和八年四月陸軍士官學校に入學同十二年六月卒業し同年八月歩兵少尉に任官島取歩兵聯隊附に補せられた。

支那事變起るや長野部隊田巻中隊に屬し第一小隊長として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。其の出征に先だち七月十一日氏は家郷に書を寄せ「(前略)我々は異常なる緊張にて出勤命令を今や遅しと待ち構へ居候、何れ出征致すべく要は只時期の問題のみに候。兒幸に此の幸運に恵まれ男子の本懐之に過ぐるなく欣喜の至りに存候。父上も皆様も御喜び被下度候。神國の大丈夫奸邪を征す誰か我に敵せん。一劍克く萬敵を斃す皇軍の進む所醜草悉く靡き伏す。御稜威は世界の涯に普く燦たり。世界無比の神國に生を享け而して身を以て 陛下の赤子たり。誰か一死以て君に報ひざらん。楠公七生報國の志は兒が胸に生く。幸に楠公の姓字を冒す亦以て昭和の大楠公たらざるべからず。楠公の精神以て兒が精神と致すべく多くを述ぶるを要せず。出征は何時か出帆は何港か知る所には郷を出づる時既に御別れ申上げ置候へば更に拜顔の望仕らず候。菊雄も幸ひ日本男兒に生る。必ずや大に皇國に盡すの心掛あるべく報國の精神は小楠公を見習はれよ。皆様には御身體御大切になされ家業に精勵なされ度候。兒か出征に當りては小隊長たるべく必ずや決死奮闘日本男兒の譽を世界に輝すべく候。先は出征に當り決心語り訣別の辭と致すべく候」と更に又七月二十七日書信を送り「愈々動員下令

と相成候。七生報國。平素父上の知らるる如く兒が心に一點の憂なし血湧き肉躍る思は既に北支の彼方に仕り。君が代の千代に八千代を祈り奉る」と以て氏の忠勇義烈一死報國の牢固たる決意が窺はるゝ次第である。

斯くて所屬部隊は北支に到着するや津浦線に沿ひ南下したが當時該地方は稀なる豪雨に到る處出水して泥海化し道路は泥濘馬脚を没し軍隊行動の困難は筆紙に盡し難く時には一日漸く二里を行軍し得たるのみの事もあつた。此の間氏は堅忍不撓有ゆる困苦を征服し部下を激勵しつゝも又之を勞はり其の活躍は部下一同の深く感激した所であつた。而して氏は將校斥候として九月四日には大李家莊附近の敵情地形の偵察を。六日には小王莊附近敵陣地前水壕の状況を更に九日には小王莊夜襲の目的を以てする地形偵察を命ぜられ前後三回有ゆる困難危険を冒して偵察を遂げ毎回重要な報告を呈した。就中六日小王莊偵察の際には同日夕六時出發暗夜錯雜せる地形に動もすれば方向を誤り易き状況なりしに拘らず氏は不屈不撓周到なる着意を以て大膽にも至嚴なる敵陣地前の警戒網を突破して敵陣内深く流河鎮西側地區に潛入し敵陣の中樞たる



該地附近水壕の状態敵情地形を仔細に偵察し七日午前一時卅分其の重任を果して歸還報告した。其の後九月九日小王莊及流河鎮部落夜襲に際しては所屬中隊は大隊の第一線となり午後十一時四十分姚家莊出發氏は其の第一線小隊長として中隊長指揮下に逐次敵に近迫し敵陣地直前の大水壕に達するや午前三時卅分奮然身を没する水壕に躍り入り軍刀を抜きたる儘泳ぎ渡り敵の第一線陣地に突入し引續き部下を掌握し敢爲突進して率先流河鎮部落中央敵退路上の要點たる家屋を占領し

た。然るに敵は其の優勢を待みて大舉再び逆襲し來つた。氏は屈せず自ら屋根に登りて跟随し來れる僅かの部下を指揮激勵し敵に猛射を浴びせて之を拒止した。併し敵は優勢にして其の射弾は熾烈を極め僅かの部下は相次で死傷する状況となりしが氏は群がり來る敵に向て自ら拳銃を以て或は手榴彈を投擲し爲に敵の斃るゝ者算なく遂に優勢なる敵の逆襲部隊は多大の損害を受けて敗走するに至つた。此の要點の確保と逆襲部隊の敗退は馬廠附近敵全線崩壊の動機となり午前六時頃敵は逐次退却を開始した。此の頃小隊主力は追及し來りしかば氏は小隊の全火力を以て敵を猛射し之に殲滅的損害を與へた。馬廠攻略に續いて滄縣の攻撃は開始せられた。敵は東花園人合庄姚官屯等の線に數線に亘り頗る堅固に陣地を構築し少くも數ヶ月は日本軍を拒止し得ると豪語して居たのであつた。九月二十三日所屬大隊は東花園北方敵の第一線陣地に對し夜襲を決行する事となつた。此の時氏の屬する田卷第二中隊は第四第三中隊間の敵陣地攻撃を命ぜられ氏の小隊は中隊の右第一線であつた。一同は決死輕裝して午後六時半行動を開始したが其の前進地區は泥濘膝を没する沼澤地にして其の行動は頗る困難なるのみならず敵は我が夜襲部隊の近接を知るや小銃機關銃迫撃砲を亂射して來た。氏は第一線に立つて部下を激勵し敵に應射することなく一意前進を續けて敵陣地に肉迫し次で中隊主力が正面敵のトーチカに向つて突撃せんとするや中隊の右翼にありし氏は逸早く小隊を率ゐて該トーチカの側背に迫つた。此の時敵の一部逆襲し來るや氏は部下の率の機先を制して敵の逆襲部隊に向つて突撃し忽ち敵數名を斃し其の逃ぐる敵に尾して敵のトーチカ陣地に突入し正面の中隊主力亦突撃して遂に之を占領した。氏は尙之に満足することなく更に勇躍東花園部落の陣地に向はんとするや無念此の時左大腿部に敵手榴彈の破片創を受け其の場に倒れた。傍にありし部下の八田及才田の兩名は直ちに假纏帯を施し後退せしめんとしたが氏は嚴として之を肯せず尙も部下を激勵叱咤して前進を促しありしが出血甚しく遂に其の場に壯烈なる戦死を遂げたのであつた。併し中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲殊に氏の右翼小隊長として勇敢機敏適切なる行動の結果二十

四日午前一時十分敵の第一線陣地を占領することを得たのであつた。

氏の戦陣に立つや新進氣鋭或は斥候として或は小隊長として實に剛膽勇敢其の指揮的確部下の掌握亦確實にして累次偉勳を樹て部隊戦勝の端を拓きて遺憾なかりしのみならず死期迫るも尚は任務に邁進し其の壯烈鬼神をも哭かしむるものがあつた。實にかくの如きは旺盛なる攻撃精神の發露にして是畢竟出陣時決意披瀝の如く燃ゆるが如き盡忠赤誠の顯現と謂ふべく眞に皇軍青年士官の龜鑑である。聖戦中途にして氏の如き得難き忠烈の士を喪へるは洵に國軍の損失なりしと雖も決死補公の精神を繼承して以て樹てたる拔群の武功は千載の下標として皇軍戦史に輝き其の芳名は万世不朽武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國を守護し一家の前途に尊き加護を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙せられ勳六等單光旭日章並に破格の功四級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 矢 芝 春 美

#### 姚官屯攻撃に中隊長代理として率先勇敢に突撃し戦勝の端を拓いて玉碎す

氏は鳥取縣岩美郡宇倍野村の人にして父を源一母をしなと云ひ明治四十五年三月二十一日に生れ妻嘉津子との間に未だ子はなかつた。資性濃厚篤實にして眞面目殊に孝心深く又上長に服して忠實部下を愛すること子の如く常に實行を旨とし任務遂行の爲には水火尙辭せざる氣概を持つて居た。尙氏は幼より十ヶ條の座右の銘を備へ朝夕修養怠りなく自己完成に精進してゐた。昭和三年三月鳥取縣立第二中學校第三學年修業引續き同縣立工業學校修道館建築科に入學し同六年三月同校卒業此の間成績優秀常に選ばれて級長となり級友の範として尊敬せられてゐた。學校卒業後は學校より推薦せられて日

本赤十字社大阪支部建築事務所に入所し其の優秀なる手腕を發揮し逐次要務に就くに至りしが昭和七年十二月幹部候補生として鳥取歩兵聯隊に入營翌八年十一月除隊し除隊後は前任地より復職を要望せられしも家事の都合により家に留まり父の建築請負業を輔佐しつつ鳥取縣土木課に通勤してゐた。昭和十一年三月歩兵少尉に任官正八位に叙せられ在郷軍人分會及消防組幹部として公共の爲盡瘁し又率先して青年の垂範指導に任じ居村青年の薰陶に努めてゐた。殊に居村の忠魂碑建設に當りては東奔西走集議を纏め自ら設計して近郷に誇る大工事を

見事完成するに至つた。



支那事變起るや昭和十二年七月應召長野部隊第八中隊に編入第二小隊長として八月十日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し折柄連日豪雨出水地帯を津浦線に沿ひ南進し九月二十一日夕所屬大隊が人合庄北方無名部落を占領するや豫備隊たりし氏の中隊は部落の掃蕩戦果の擴張に任じ氏は午後八時過部下小隊を率ひて尙敵が占據して抵抗しある其の西南獨立家を攻略して之を確保すべきを命ぜられた。氏は直ちに小隊を率ひ敵の猛火の下水深胸に達する浸水地を物ともせず勇猛果敢に攻撃し遂に所命の獨立家を占領し大隊の右側掩護に任じた。然るに敵は該家を我に占領せらるゝや其の優勢を恃み二回に亘り逆襲し來り之が奪回を企てしも氏は克く部下を掌握し的確なる指揮を以て奮戦大に努め其の都度敵に多大の損害を與へて撃退し遂に同地を確保して大隊及中隊主力の行動を掩護し人合庄北端の攻撃を容易ならしむることを得た。

續いて所屬隊が二十三日姚官屯附近（滄州會戰）敵主陣地に對し攻撃を開始するや氏は中隊長代理として中隊を指揮し大隊の右第一線となり午後六時より攻撃前進を開始した。然るに暗夜方向の維持さへ容易ならざるに敵弾は急霰の如くにして行動頗る困難なりしが氏は確實に部下を掌握し的確なる指揮の下に逐次敵に近迫し敵前五、六十米の至近距離にある水壕の線に進出し水深胸を浸す壕内に於て突撃を準備した。然るに此の頃中秋の月は東天に輝き敵情の偵察障物の破壊は極めて至難となりしが氏は克く部下を激勵指揮し水壕の前方三十米敵陣地前二十米に張り繞らせる鐵條網まで猛烈なる敵火を冒して交通壕を掘開せしめ突撃路を開設して其の突撃準備を完了し突撃時期の到来を待った。而して二十四日午前四時右第一線たる第六中隊と共に猛然立つて突撃を開始するや氏は中隊の先頭に立ちて鐵條網の破壊口を通過し勇猛果敢に敵陣地に向ひ突進し將に敵陣地に突込まんとせる數歩前無念腹部に貫通銃創を受け其の場に倒れた。併し氣力の横溢せる氏は尙も起き上り「續いて突込め」と叱呼せしが又も敵の投擲せる手榴彈炸裂して其の爆創を蒙り遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし氏の勇敢適切なる指揮により中隊は午前五時突撃に成功し其の成功は敵總退却の動機を爲し大隊に敵陣地突破の端緒を與ふるに至つたのであつた。

氏や平素精神の修養怠りなく日常の言行は郷黨の敬慕措かざる所であつた。而して今次召されて其の戦陣に臨むや一隊の楨幹として彈雨の下常に勇猛果敢率先々頭に立ちて部下を率ひ指揮的確掌握確實小隊長として將た又中隊長代理として克く其の重任を完ふして遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて其の任務に邁進し將校たる負托の重きに答へんとせる旺盛なる責任觀念の發露盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。然るに參戰幾何もなくして遂に北支の華と散るに至りしは洵に痛惜に堪えざる所である。併し士は百戦功なくして瓦全を耻づ。氏が姚官屯の一戦に奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載の下皇軍戦史に輝き其の芳名は万世不朽武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇

國の前途を守護すると共に氏が嘗て其の全魂を傾倒して建てたる郷土忠魂碑の祭神ともなり遺族並に居村後昆の將來に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 荒谷彌章

#### 潑刺たる機關銃小隊長津沱河畔陳村に勇戦し戦勝の端を拓く

氏は札幌市北七條西七丁目の人にして父を順二亡母をユウと云ひ明治四十三年十二月二十五日に生れ妻光子との間に長男將彦を擧げた。性温良志操堅實にして事に従ふや積極進取又難局に處しては堅忍剛毅目的を貫徹せずんば止まざるの氣概を持つて居た。昭和四年三月夕張工學校を卒業し其の後は北海道炭礦氣船株式會社に入社し精勵恪勤逐年良成績を擧げて上下の信頼を受け同七年十二月幹部候補生として札幌歩兵聯隊へ入隊し翌八年十二月除隊、同十年三月少尉に任官した。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召中尾部隊渡邊機關銃中隊に屬し第三小隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬北支へ到着し同月二十五日長辛店に下車後京漢沿線を南進し泥濘飢渴の難行軍を續けたが氏は常に人馬を勞はり適切なる指揮指導に依り克く長途の行軍力を維持し又常に中隊長の命令意圖に基き積極的に任務を遂行し中隊將兵一同の厚き信頼を受けて居た。所屬部隊は十月七日漸く第一線部隊へ追及し直ちに津沱河右岸の敵陣地に對し攻撃準備に着手した。所屬中隊は十日未明行動を起し午前八時半所命の陣地に進入を完了し午前九時半より敵陣地の要點に對し射

撃を開始するや氏は敏活適切なる射撃指揮に依り敵に多大の損害を與へた。午前十一時四十分頃戦況は有利に進展し氏は中隊長より爾後の追撃戦闘の爲陳村北側に於ける徒渉場の偵察を命ぜられ若干の斥候要員を隨へ決死河岸に進出し友軍の砲弾に噴接して濁流に跳び込み詳細なる偵察を遂げ更に豪膽にも敵岸に繋留しある民舟を分捕りて我が軍爾後の用途に供する等偉功を奏した。斯くて午後三時半頃友軍は敵を壓倒して涪沱河を渡河し先づ陳村を占領し續いて高庄附近の敵陣地を攻撃したが氏の小隊は中隊の右第一線を命ぜらるゝや氏は敵彈雨



を攻撃したが氏の小隊は中隊の右第一線を命ぜらるゝや氏は敵彈雨飛の下に綿畑の中を率先一氣に二百米を疾驅し適切なる射撃陣地を選定して部下小隊を招致すると共に速に敵情を偵察して機敏に射撃目標を選定し小隊が火線に到着するや否や息つく暇もあらず疾風迅雷の猛火力を集中して敵を壓倒した。敵は我が猛攻撃に堪えかねて潰走し始めたが氏は機を失せず當面の敵を殲滅するの目的を以て更に陣地を推進せしめんと率先躍進の途上左方約十米の綿畑に潜伏しありし敵兵二名より狙撃を受け惜しくも腹部に貫通銃創を受けどつと地上に打倒れしが氣丈の氏は忽ち身を起し素早くも拳銃を執りて其の一敵を射殺し更に一發を他の一敵に酬いた。此の時又もや一彈氏の胸部を貫き仰向けとなつて遂に壯烈なる戦死を遂げた。されど氏は尙も半眼を開きて敵方を凝視し堅く拳銃を握り縮めて居た。當時小隊長の危急を見たる部下の村木上等兵は飛鳥の如く小隊長の許に駆け寄つたが同上等兵亦不幸にも腹部に貫通銃創を受け名譽の戦死を遂げた。分隊長星山上等兵は怒髮天を衝き拳銃を以て他の一敵を射殺し忽ち小隊長及战友の仇を報じた。而して所屬部隊は氏等の奮戦と尊き

犠牲に依り午後四時四十分當面の敵を撃破し石家莊方面への追撃に移つた。

氏は盡忠報國の至誠に燃え豪氣果斷常に潑刺たる意氣を以て部下を指揮し而も天資明朗克く部下小隊の人馬を愛護し小隊の團結は鐵石の如く堅かつた。あゝ涪沱河畔の一戦氏が不惜身命の活躍は眞に鬼神を哭かむる壯烈なる行動にして皇軍機關銃隊の眞價を發揚し又青年將校の龜鑑たるものであつた。氏が兇彈に墮るゝや所屬中隊長は片腕を失へるが如き思を以て氏の遺體に駈けつけて自らの水筒より最後の水を取らせて心からなる禮を述べ氏の部下等は號泣して氏の尊き遺骸に取りすがつた。蓋し氏が高邁なる人格と優秀なる指揮官たりしことを證明して餘ありと謂ふべきである。今や氏が壯容聲咳に接すべくもなく痛歎哀悼の情を禁じ得ざるも氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に光彩を放ちて芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級 渠 日出夫

#### 萬全攻撃の殊勳者惜しくも崑崙城外の華と散る

氏は東京市淀橋區下落合の人にして父を平騏母をトメと云ひ明治四十四年七月十九日に生れ未だ獨身であつた。人格高潔資性明朗快活にして果敢斷行の氣魄を有し又一面情愛に富み衆人の愛敬を受けて居た。大正十四年四月先住地の札幌市北海中學校に入校昭和五年三月卒業し同六年十二月幹部候補生として東京麻布歩兵聯隊に入營熱心軍務に精勵して翌七年



十一月満期除隊となり十年三月歩兵少尉に任官し次で正八位に叙せられた。氏は除隊後八年四月早稲田大學専門部に入學したが在學三年の時現役特別志願將校を出願し採用せられて歩兵第三聯隊附となり歩兵學校に派遣せられ新らしき軍事學術の教育を受け約三ヶ月の後歸隊し十一年五月湯淺部隊附として滿洲に派遣せられチ、ハル新京等に駐屯し治安の維持及警備の重任に服して居た。



支那事變起るや昭和十二年七月下旬湯淺部隊田邊中隊小隊長として所屬部隊と共に急遽天津地方に出動し同地方に於ける支那軍の掃蕩並に治安維持に任じ其の盡す所甚大であつた。其の後所屬部隊は承德を経て遠く張北方面へ轉進し八月十七日より外長城線附近の敵を攻撃した。此の時所屬中隊は兵團の豫備隊となり中隊長以下勃々たる勇心を押へつゝ司令部の直接警戒並に砲兵掩護に任じて居たが所屬部隊は遂に敵を撃攘し續いて二十二日夜萬全附近の敵を攻撃するや氏の中隊は待望の第一線となり勇躍前進した。然るに萬全北側の隘路を強行通過中距離約二百米の正面及側方高地より俄然敵の十字火を浴び苦境に陥りしが氏は中隊の右第一線小隊長として躊躇することなく右側岩山高地の敵を撃攘すべく暗夜克く部下を掌握指揮し猛火を冒して敵に近迫し一舉敵陣に突入して該高地を占領した。此の神速勇敢なる氏の活躍奮闘は大いに部下の志氣を鼓舞せしのみならず同高地の占領は著しく中隊の前進を容易にし延いて戰勝の素因となり遂に所屬部隊は翌朝萬全を占領して敗敵に大打撃を加へたのであつた。次で二十五日中隊は沈家屯附近を占領し河合以東の地區よりする敵

の反撃に備へたが二三百の敵は執拗にも晝夜三回に互り攻撃し來つた。氏は第一線小隊長として毎夜堅忍して敵を陣前近くに引き寄せ一時に猛火を浴びせて撃退し此の執拗なる企圖を全く水泡に歸せしめた。翌二十六日中隊は再び大隊の第一線となり小場附近の敵を攻撃した。此の時氏の小隊は右第一線となり圍壁に據る頑敵を攻撃することとなつたが氏は其の熾烈なる敵火を物ともせず猛攻に猛撃を加へて遂に敵をして敗退の已むなきに至らしめ爾後中隊主力をして當面の敵の側背進出を迅速容易ならしめ敵に大なる損害を與へ以て勝利の榮冠を獲得するに至らしめたのであつた。斯くして張家口附近の要地は最も迅速に所屬兵團の占領する所となり空中よりの爆撃と相俟つて敵の唯一の後方連絡線たる平綏線は見事に遮断せられ敵は長城線に幾多の屍體を遺棄して南方に潰走するに至つた。續いて所屬部隊は敵を追つて山西に進入し九月七日には天鎮十一日聚樂堡十三日大同二十四日下社を攻略して遂に内長城線を越へ蔚縣城に向つて前進した。當時將兵一同は連日の猛追撃と戰鬪に疲勞其の極に達し加ふるに進路は山岳地帯にして給養續かず其の困難は名狀し難きものであつたが氏は堅忍不屈終始部下を激勵すると共に之を勞はり率先垂範愈々部下の尊信を高むるに至つた。

十月三日所屬兵團は愈々蔚縣城附近の敵陣攻撃を開始するに決し同夜氏は兵團長より將校斥候となり敵陣地の右翼及陣地附近の地形偵察を命ぜられた。氏は部下二十一名を率ひ午後十一時三十分鄭家庄を出發した。當時優勢なる敵は縣城附近一帶の部落を占領しあるも其の情況は詳かでなかつた。氏は危險を冒し夜暗を利用して大膽にも敵中に潛入し具さに敵情及地形を偵察して翌拂曉歸來し有利の報告を提出し兵團爾後の作戰に大なる貢獻を爲した。斯くて四日拂曉より蔚縣の攻撃は開始せられ氏の中隊は第一線となり縣城西北の隘路に向つて攻撃前進した。氏は斥候より歸隊後直ちに右第一線小隊長として雨下する敵火を冒して前進し途中屢々丈餘の地隙水流等障礙を踏破し神速且放膽なる行動を以て敵の左側に迫り局部包圍の態勢を完遂し中隊主力の攻撃を容易ならしめ續いて午後二時頃下凹村に向つて攻撃した。當時敵の銃砲火は

頗る熾烈を極め死傷相次で生じたが氏は陣頭に立ちて部下を激勵し躍進又躍進して敵に近迫し猛火を浴びせて之を制壓し機熟するや決然陣頭に躍り出で猛烈果敢に敵陣に突入し遂に敵をして累々たる屍體を遺棄して潰走せしめ同夜は下凹村東方本道附近に進出し夜を徹した。續いて五日所屬隊は尙縣城外部落に残つて輕強に抵抗しつゝある敵を擊破掃蕩し翌六日より愈々敵の本壘たる嶮縣城を攻撃するに至つた。嶮縣城は高さ二十米幅十米の城壁を繞らし壁上には更に工事を施して各種近代兵器を配置し頗る堅固なるものであつた。我が全砲兵は午後二時一齊に砲口火を吐いて天地も震撼する斗りに破壊及制壓射撃を開始し之に連繫して第一線歩兵は午後四時攻撃前進を開始した。敵は我が第一線歩兵の前進開始と共に迫撃砲重輕機關銃の猛射を開始し其の射弾は全く雨か霰の如くであつた。我が第一線は砲兵の援護射撃の下に一進一止敵を制壓しつゝ躍進して遂に薄暮敵前五十米に近迫した。然るに敵の銃砲弾は愈々熾烈を極め我が死傷相次で生ずるに至つた。當時氏の小隊は最初より第一線となり氏は常に陣頭に立ちて部下を激勵しつゝ勇猛果敢に攻撃前進し敵前五十米に達して頗る苦戦に陥りし時も剛膽勇敢に部下を鼓舞激勵し小隊の全火力を最高度に發揚して今や突撃せんと其の機をうかゞひありし刹那無敵の一迫撃砲弾は氏の身邊近く炸裂して其の破片創を受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲により嶮縣城の堅壘は遂に陥落したのであつた。

氏は平素自身教育練成したる部下を率ゐて出征し其の上下の關係は親子も管ならざるものがあり小隊長以下全く一心同體であつた。従つて其の第一線に立つや一致團結小隊の向ふ所如何なる頑敵も堅陣も擊破せられざるはなかつた。是一つは氏の人格徳望と適切勇敢なる指揮統率の結果であり一つは氏の常に戰鬪慘烈なる敵弾下に於て泰然自若部下をして仰いで富嶽の重きをなし愈々其の尊心を高めし結果である。あゝ此の忠勇義烈前途有爲の才幹を聖戰中途に喪ふ洵に痛恨哀悼の極みである。然れども士の戰場に臨むや元より生還を期せず。今や氏の肉體は護國の華と散りしも其の赫々たる武動は

燦として皇軍戦史に輝き其の芳名は千古に轟はれ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又遺族の將來を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し従七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵中尉従七位勳六等功五級 樋口 要

#### 擔架小隊長大迫撃戦に勇奮活躍し蘇州河畔に斃る

氏は愛知縣知多郡野間村の人にして父を勇三郎母をはんと云ひ明治三十七年五月十五日に生れ妻みつとの間に一男武を擧げた。資性温順剛膽にして責任觀念強く事に當り忠實熱誠遂げずんば已まざるの氣魄を有し又孝心深く友情に富み世人より信望を受けて居た。大正七年四月關西學院中學校に入校十二年三月卒業續いて同學院高等商業部に入學昭和二年三月卒業同年十二月幹部候補生として靜岡歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し翌年十一月滿期除隊し一時家庭に在りしが同四年八月より不動銀行岸和田支店に勤務し其の間昭和六年三月歩兵少尉に任ぜられ正八位に叙せられた。而して同九年十月家事上の都合に依り退職し翌十年九月東京市京橋區大岩商店に勤務し應召時に至つた。在動中は成績良好にして上下の信頼厚かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月十四日應召片桐衛生隊擔架第三中隊に編入せられ第一小隊長として勇躍中支方面への征途に就き九月上旬上海北方要地に上陸した。當時我が先遣兵團は江岸に近き地域に於て優勢なる敵に對し猛攻中であつた。敵は葦布點在の部落と縱横に通ずる大小クリークの天惠地區を利用して最も堅固なる數線の陣地帯を構成し配するに

中央軍の精銳を主力とする我に十數倍の大兵團を以て頑強に抵抗したが皇軍の猛攻に日々歩々後退防戦しつゝある狀況であつた。所屬隊は九月七日より二十八日に至る上海市政府附近の戦闘には片山部隊方面に於て又二十九日より十月二日に至る劉家行及顧家屯附近の戦闘には田上部隊方面に於て更に十月三日より十五日に至る蘆蕩瀆クリク附近の戦闘には川並及田上兩部隊方面に於て。夫れく第一線部隊に跟隨前進した。然るに其の前進地區は水流及水田等縱横に錯綜し加ふるに敵の銃砲弾は雨霰と注ぎ其の通過は頗る困難であつたが氏は夫れ等困苦と危険とを克服し終始沈着勇敢に第一線部隊と緊密に連絡し第一線傷者の現況を明かにし搜索斥候の派遣及擔架の配置を適時適切に部署し患者の收容及後送を機敏且迅速に行ひ以て戦闘部隊の攻撃を容易ならしめた。



次で十月中旬より敵の堅壘大場鎮の攻撃開始せらるゝや所屬隊は應森、田上兩部隊方面に。續いて蘇州河附近大追撃戦に於ては田上部隊方面に連日連夜不眠不休の活躍を續けたのであつたが此の間氏は疲労困憊其の極に達せるも克己堅忍部下を激勵して機を失せず傷者を收容し其の敏速なる活躍に一命をとり留めたる傷者は尠からざるものであつた。殊に十月二十六日午後五時頃田上部隊の第一線に於て傷者續出の報に接するや氏は直ちに部下を率ひて雨下する敵弾下を勇進し大場鎮西方東木橋の南方約百米の橋梁附近に達するや大場鎮南方候宅附近を占領する敵より俄然猛射を受け忽ちにして部下關戸分隊長加島上等兵負傷し前進甚だ困難となつた。之を見た氏は「自分に從へ」と大聲叱呼し奮然立ちて前進し其の勇猛果敢の態度に部下亦勇奮

前進し遂に大場鎮西南方約千米の徐宅に進出し直ちに第一線部隊と連絡し夜に入るも不屈不撓全員傷者の搜索收容に邁進し遂に八十三名の傷者を東木橋橋梁所に收容したのであつた。又蘇州河に向つての大追撃に我が第一線は猛追奮進を續け其の後方を前進する衛生隊は側方又は豫期せざる方面より突如敵敗殘部隊の猛射を浴びせらるゝ事屢々であつたが生死を超越せる氏の眼中には敵の銃砲火も空爆もなく唯だ衛生隊としての任務あるのみであつた。斯くて萬難を排し克く第一線に跟隨し十一月五日午後四時第一線は蘇州河左岸全家頭附近に於て死傷續出しありとの報を受くるや氏は小隊を率ひ該地に急進した。然るに敵は幅約五十米而も徒渉し得ざる蘇州河を前にし對岸距離の葭家野郁家宅の家屋に據り主として重機關銃迫撃砲を以て熾烈なる十字火を我が第一線に浴びせ頑強に抵抗して居た。此の戦況に氏は唯機を失せず傷者を收容せんとの一念に燃ゆるのみであつた。氏は直ちに篠つく雨の如き敵火の中に小隊を部署して傷者の收容に努め東奔西走擔架を指揮しありしが無念敵の一弾は氏の腹部に命中して倒れた。部下は直ちに氏を手當せんとするや氏は「傷は浅い」と叫び手當を排して立上り數歩を前進して再び昏倒氣息奄々たる裡に「今敵彈に斃れ完全に任務を達成出来なかつたのは残念だ」と述べ人事不省となつた。時に午後六時三十分であつた。氏は部下に收容せられ眞茹野戦病院に於て手厚き治療を受けたが其の甲斐なく十一月八日惜しくも江南の華と散つた。

氏の聖戦に参加するや江南平野の敵は晝夜靱強なる抵抗を續け敵ながら克く防戦し毎戦其の銃砲火は甚だ熾烈であつたが氏は毫も屈することなく苦難に堪へ且悲況に在りても部下を確實に掌握し又戦線の現況に即應して迅速的確に部下を部署し職責の達成には渾身の力を傾注して之を遂行し實戦の體驗を積むに従ひ一死報國の信念は愈々強固を加へ任務に瘳れるは男子の本懐なりとし忠誠勇武の軍人精神を遺憾なく發揮したるは軍人の龜鑑なりと謂ふべく征戰幾何もなく前途有爲の才幹を喪ひたるは痛恨哀悼を禁じ得ざる所である。然りと雖も其の赫々たる武勳は皇軍戦史に輝きて後世永く其の芳名

を願はるべく英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神ともなり遺族殊に愛子の前途を照覽し尊き加護を垂るゝことであらう。

氏は戦傷死の日歩兵中尉に進級し従七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

### 陸軍歩兵中尉従七位勳六等功五級 瀬川 博 貞

#### 緒戦に於て率先勇敢至難の敵翼包圍を完成し潮宗橋に散華す

氏は兵庫縣飾磨郡飾磨町の人にして父を貞次母をふじると云ひ大正元年九月十九日に生れ未だ獨身であつた。資性温順眞面目にして業務に熱心責任觀念強く又部下に對し温情厚く今次應召以來日尙淺かりしも部下克く心服して居た。しかも一度戦陣に臨むや頗る勇猛果敢であつた。昭和六年三月兵庫縣立姫路中學校を卒業し同七年十二月幹部候補生として松江歩兵聯隊に入營翌八年十一月除隊し同十一年三月歩兵少尉に任官正八位に叙せられ同年十月より神戸市帝國信榮株式會社に勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召沼田部隊第六中隊に編入第二小隊長として八月十日勇躍征途に就いた。其の應召時家郷に一書を寄せ其の心懷を披瀝し「待ちに待つて居た時機が漸くやつて來たので僕はそれこそ勇躍して軍裝を身に着け従軍して來たのでした。絶好の死場所文字通り男子の本懷を遂ぐる事の出来る場所を見付け而も其の日も近い内に定まつた様な氣がして今日こそ不思議な程心底の落ち着きと腹の締りが出來たと思ひます(中略)我々小隊長に至るまで我より十倍の敵を引受けて之に打勝つ自信と覺悟を持つて居ります。軍刀の磨きも十分やりました。腰の拳銃も買彈を發射する

ゝ時を持つて居ります。早く戦地に到着して思ふ存分の働きをやつて見たいものだ」と兩腕を摩つて居ります」とあり決死勇躍出陣せし雄々しき胸臆を窺はるゝのである。斯くて北支に到着するや八月十六日より十九日に亘る間氏は部下小隊を率ひ獨立小隊として所屬隊主力より離れ南大門の占領並に警備を命ぜられた。氏は克く部下を掌握し日夜周到の着意と努力を以て克く其の獨立任務を完遂した。



八月二十一日所屬部隊は午前六時小姑を出發し五里に亘る惡路の強行軍を續けて潮宗橋に向ひ前進した。午前十一時稍々前尖兵中隊たる第七中隊は進路上にありし約一小隊の敵を撃破し正午頃より潮宗橋の敵に對し攻撃を開始した。敵は村落に據り銃眼並に掩蓋機關銃座を設備し頑強に抵抗し爲に運河堤防よりする尖兵中隊の攻撃は意の如く進捗しなかつた。大隊長は本夕刻迄に潮宗橋の奪取を企圖し午後二時十分氏の所屬中隊に對し直ちに歩兵中隊の右翼に増加して攻撃すべく命令した。所屬中隊は直ちに展開し氏の小隊を右に第三小隊を左第一線とし第一小隊を右翼後の豫備と爲し潮宗橋村端に據れる敵の左翼を包圍する如く逐次敵前を横行旋回して右翼を十分張り出し氏の小隊は敵陣地左翼を目標とし午後二時三十分攻撃前進を開始した。然るに此の附近一帶は高粱繁茂し且豪雨の爲泥濘膝を浸する沼田と化し所々に存在する水濠は深さ胸以上にも達し行動頗る困難なるのみならず敵彈熾に高粱を薙ぎ殊に敵陣地に直角に走れる水濠通過の部分は敵の縦貫掃射地帯であつた。かくの如き敵情地形の下に敵の掃射を冒して包圍態勢を整ふことは蓋し容易の業ではなかつた。

然るに氏は雨下する敵陣を冒して率先々頭に立ち部下を激勵し其の水濠を越ゆること三度の確なる指揮確實なる掌握の下に其の至難なる行動を誘導して遂に其の包圍態勢を完成するに至つた。斯くて午後四時稍々前敵前二百米の地點に於て中隊長と會し最後の意圖を承知し更に判明せる現地に於て部下分隊に攻撃目標を指示し「小隊の攻撃目標はあの村落の右端、攻撃前進！」と大聲に叱呼し軍刀を以て目指す村落西端の目標を指示しつゝ率先水濠りを揚げながら又も水濠を渉るや部下皆之に準ひ氏に従ひしも此の頃敵の銃眼及掩蓋銃座より發射する敵彈益々猛威を逞ふし爲に第一線分隊の前進漸次膠着状態に推移せんとするに至つた。茲に於て氏は益々部下を激勵し更に前進を續けんとし高粱を分け又々水濠を超へて躍進するや無念敵の一彈は氏の左胸部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。時正に午後四時十五分であつた。しかし氏の勇敢適切なる指揮により完成せる包圍態勢は敵陣地奪取の誘因を爲し翌二十二日午前五時にはさしも頑強なりし潮宗橋を占領することを得た。尙氏戦死後未發送の儘なりし本戰團直前の陣中通信中に「此の手紙が何時御覽願へるか或は其の時は既に私の戦死後であるかも知りません」と記載せられあり顧みて氏の勇敢なりし行動は本戰團即ち初陣に於て早や死を覺悟しありし事が明瞭である。

氏や平素温順なるも一度戰陣に立つや彈雨の下勇猛果敢、指揮的確、掌握亦確實にして中隊長企圖の如く至難なる敵翼包圍を完成して中隊戰勝の素因を作爲して遺憾なかつた。殊に緒戰成否の將來に及ぼす影響の甚大なるを思ひ常に率先陣頭に立ちて部下を激勵し初陣に於ける部下の不安危懼を一掃して只管戰勝に導きしは是畢竟氏が義きに決意披瀝の如く一身を君國に捧げて將校たる負托の重きに答へんとせる旺盛なる責任觀念の發露盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。參戰日ならずして北支の華と散りしは惜しみて尙餘あるも死所を得て一戰玉碎せるは百戰功なき瓦全に優る。實に氏の樹てたる拔群の武功は萬世に皇軍戰史を飾り其の芳名は千載に武人の華と謳はれ不滅の英魂は永遠に護國の神と祀られ神靈尙も皇

國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

陸軍砲兵中尉從七位勳六等功四級 千葉 正

豪膽優秀の觀測將校上海戰線に偉勳を樹てて蘇州河畔に散る(殊勳甲)

氏は埼玉縣北足立郡浦和市高砂町の人にして父を安宇泥母をきわと云ひ大正元年十二月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性豪放にして恬淡。積極敢爲の氣概に富み又親に對し至孝且友情に厚く諸人の愛敬を受け大いに其の將來を囑目せられて居た。大正五年三月埼玉縣浦和中學校を卒業し續いて東洋大學東洋文學科に入學し同八年三月卒業したが小學校より大學卒業迄成績優等にして特に文藝及美術の造詣深く且柔道に長じ五段の免許を得て居た。大正九年十二月幹部候補生として海城野戰砲兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し翌年十一月除隊となり十二年三月砲兵少尉に任官し次で正八位に叙せられた。歸郷後は農林省東京蠶絲試驗場庶務課に勤務し大いに其の力量を現はしつゝあつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長屋部隊今野隊本部附觀測掛將校として勇躍中支方面への征途に就き江岸の要地に上陸した。當時敵は最も堅固なる陣地帯を數線に設け各種の近代兵器を配備し且優勢なる中央軍の精銳を集め所謂守るに易く攻むるに難き半永久的陣地に據り之が攻撃には戰鬪の骨幹たる砲兵の協力を最も必要とする状況であつた。九月七日よりの月浦鎮附近の攻撃には新銳の所屬大隊は天谷支隊に配屬せられ七日夕月浦鎮東方約二軒の王家宅附近に前進し八日朝より月浦鎮附近の敵本陣地に對し砲撃を開始した。此の時氏は大隊觀測所及補助觀測所の設備、射彈の觀測及協力歩兵

部隊との連絡等敵火の下に不眠不休の活躍を爲し大隊の射撃威力發揚に貢献する所甚大であつた。就中九日敵前距離に進出する第一線歩兵部隊に連絡の爲氏は午前五時通信班と共に月浦鎮東北方地區に潜行し協力歩兵部隊と連絡を確保し月浦鎮東北側及北側の敵陣地の破壊並に制壓の射撃觀測に任じた。然るに敵陣地は巧に遮蔽せられ尙且視界不良にして射撃の觀測は頗る困難であつた。之が爲氏は雨下する敵砲彈下を疾驅して第一線歩兵小隊長と連絡し敵陣地の狀況と我が射



撃を觀測し機を失せず之を報告して大隊長の戰闘指揮を的確ならしめた。斯くして此等砲兵の密接なる協力と飛行機の戰闘参加に依り第一線歩兵は一步一步敵に近迫して晝夜力攻激戦を交ふること三晝夜其の間水濠を越へ鐵條網を破壊して敵陣に肉薄し勇猛果敢なる肉弾戦を以て遂に十日午後二時過月浦鎮を攻略したのであつた。此の攻撃に於て氏が大隊觀測將校として連日連夜に互る勇敢適切なる活躍は其の攻略に大なる貢献を爲したのみならず月浦鎮を攻略するや氏は神速機敏に月浦鎮西端に觀測所を推進し爾後の掃蕩及追撃戦に大なる効果あらしめた。

九月二十二日より羅店鎮附近の攻撃は開始せられた。此の日午前八時より所屬大隊は羅店鎮南方の敵陣地に對し射撃を開始した。氏は之より先觀測手二名通信手三名を率ひ最前線たる同地東南方堤防上に觀測所を選定して重任に就いた。該地と後方友軍間は全く敵の彈巢地帯と化し連絡至難であつたが氏は克く危険萬難を排して連絡を保ち特に所謂白壁の家及其の東南クリークの線にある敵陣地の破壊制壓射撃に方りては目標の選定射撃觀測等適切にして敵の側防火器を制壓破壊

するもの四箇所に及び大いに第一線歩兵の攻撃前進を容易ならしめ遂に羅店鎮南方地區に進出せしむるに至つた。爾後兵隊は攻撃の對壕抗道を掘開し一進一止逐次敵陣に近迫したのであつたが氏は二十七日羅店鎮南方揚家宅に於て射撃の觀測中迫撃砲彈の破片にて左耳後部に受傷し後退するの已むなきに至つた。然し責任觀念旺盛の氏は大隊長の療養勸告にも耳を傾けず其の全癒を待たず原隊復歸を強要して十七日には再び第一線に出で欣然として活動を繼續し將兵一同を感激せしめ上下の信頼は益々深きを加へた。

次で十月二十三日よりの大場鎮方面に對する總攻撃及其の一大追撃戦に際しては所屬大隊は歩兵部隊の急追に伴ひ三十日右翼隊の蘇州河敵前渡河に協力すべく同河北岸夏家頭附近に陣地を占領し正午より敵陣地の破壊及制壓に任じた。然るに彼岸の敵陣地は低地に構築せられ觀測所よりの確認困難にして十分なる破壊を企圖し得ず茲に於て大隊長は氏を觀測所候として前方に派遣した。氏は危険を冒して死地に生を得蘇州河左岸近くに潜行し敵の配備等細部を偵察し有利の報告を呈した。實に三十一日及一日に於ける我が砲撃は主として該報告を資料として實施せられたるものにして其の結果渡河點たる張家屯東側河岸の火點を破壊し又特に低陣地の自動火器をも制壓或は破壊し以て右翼隊の進出を容易ならしめ遂に正午より渡河を執行し得しめたのであつた。而も氏は此の砲撃間主として射撃の觀測に任じ戰況の推移を適當に判斷し大隊の火力運用を戰況に即應せしめ大隊をして右翼隊協力の目的達成に大なる貢献を爲したのであつた。其の後戰果の擴張に伴ひ三日大隊長は歩兵の第一線に前進觀測所を設備すべく氏に命じた。氏は本部通信掛齋藤少尉と共に十名の部下を指揮し敵彈下の蘇州河舟橋を煙幕に蔽はれて辛ふじて通過し機を失せず前岸に所命の如く觀測所を選定し飛彈頻りなる狀況下に於て大膽機敏に觀測に任じた。而して翌四日に至るや大隊長は更に大隊觀測所を張巷南側に推進し近距離内にある施家街、八字橋、屈家橋附近の敵陣地を速かに破壊し或は制壓すべく決意し所要の命令は氏に下された。氏は敵情を最もよく

監視し得べき敵前四百米の堆土に観測所を選定した。併し該地は敵弾の飛來頗る熾烈の爲掩護工事を必要とし氏は直ちに観測手をして先づ砲臺鏡の位置に工事を命じ自らは堆土上に匍ひ昇り敵情を偵察して居たが偶々左前方よりの敵機關銃射撃の爲惜しくも胸部及右手首に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し大隊は氏等の剛勇なる決死の活躍奮闘に依り爾後有効なる猛砲火を敵に加へて震駭せしめ逐次南方に敵を撃滅し上海戦局に一大轉換を到來せしむるに至つたのであつた。

氏は平素武道に精進し心身の修養鍛錬に努めて居たが今次聖戦に参加するや砲兵の眼目たる大隊観測掛將校として常に最前線に立つて重要な任務に服し毎戦敵の銃砲弾下に死を鴻毛の輕きに置き滿身是忠是膽加ふるに其の卓越せる技倆と慧眼とは砲兵大隊長の戰闘指導を的確且機宜に適せしめ遺憾なく皇軍重砲の威力を發揮せしむるに至つた。實に此の如きは日頃修養を積み忠勇義烈職分の存する所水火尙辭せざる氏の如き士にして始めて能くし得る所にして正に軍人の龜鑑である。然るに聖戦中途此の忠烈有爲の幹部を喪ひし事は眞に痛惜哀悼の極みである。然りと雖も氏の赫々たる拔群の功績は千載の下皇軍戦史に輝き其の芳名は萬古に流れて盡きざるべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇軍の戦勝を守護し又一家の前途に限りなき加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日砲兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に破格の功四級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

### 陸軍工兵中尉從七位勳六等功四級 千葉平吉

#### 南苑總攻撃の華、壯烈肉彈を投じて戦勝の途を拓く(殊勳甲)

氏は岩手縣東磐井郡藤澤町の人にして父を平一母をなをと云ひ明治四十年三月五日に生れ妻しづゑとの間に長男昭弘を擧げた。性温良着實にして特に親に仕へて至孝且舊師舊友に對する情誼に厚く歸省時の如きは自宅に入る前に必ず母校前に下車して舊師を訪づれるを常として居た。氏は又事を行ふや熱誠眞摯にして遂げずんば息まざるの氣概を有すると共に果斷性にも富んで居た。大正十年三月藤澤高等小學校を又同十三年三月には岩手縣立盛岡農學校を卒業し其の後は藤澤町農會技手及同町青年訓練所指導員を囑託され熱誠業務に従事して良成績を擧げ町内の中堅人物として敬愛を受けて居た。昭和二年十二月一年志願兵として盛岡工兵大隊に入隊し同六年三月工兵少尉に任官し翌七年七月關東廳巡查に採用され外務省巡查を兼務して滿洲事變に活躍し功を以て勳八等瑞寶章を賜はつた。昭和十年九月特別志願を以て現役將校として採用せられ龍山工兵聯隊附となり翌十月より約二ヶ月間陸軍工兵學校に於て所要の教育を受け歸隊した。

北支の風雲急を告げ蘆溝橋事件勃發するや昭和十二年七月加藤部隊原中隊に屬し小隊長として急遽平津地方へ出動するに至つた。當時倣岸不遜なる第二十九軍は兵力十數萬を以て平津地方を完全に保有し北支民衆を煽動して抗日意識に狂奔せしめ日支兩軍の形勢は刻一刻險惡の一途を辿つた。七月二十七日所屬中隊は黃村附近に於て高木部隊に配屬を命ぜられたが氏の小隊は中隊主力に別れ富田隊と共に某步兵部隊長の直轄として使用せられた。此の日炎熱百二三十度に達し喰ふに食なく渴するも一適の水なく附近の地形は一面に高粱又は粟畑が續きて通視を妨げ敵陣地の周圍は所々射界を清掃されて居た。氏は爾後の用途を顧慮し器材の整備及其の機能の點檢關係部隊に對する連絡等周到なる着意を以て事前の準備を

完了し情勢の推移に備へて居た。此の日我が軍は團河村及行宮附近に據る頑敵を掃蕩するに決し午後二時黃村附近より行動を起し同四時より團河村の敵を攻撃した。氏は此の間敵の銃砲弾猛烈に飛來する中をよく部下小隊を掌握して適時器材を推進して常に配屬隊長の指揮運用を容易ならしめ午後七時頃には團河村並に行宮一帶の敵陣地を占領するに至つた。此の夜我が駐屯軍司令官は敵將宗哲元に對し我が軍は獨自の行動を執るべき旨を通告すると共に南苑の總攻撃を準備した。



明くれは二十八日午前四時雨雲暗澹として滿天を掩ひ事前の靜寂は薄氣味悪く漲ぎつて居たが砲聲一發、濕氣を帯べる曉の空気を震撼し又南苑上空には黒龍の信號彈が打ち揚げられた。是南苑を包圍せる皇軍の一齊攻撃が初まつたのであつた。所屬中隊は南苑城の西南角に向へる歩兵部隊に配屬せられた。此の正面に於ける南苑の防備は城壁の西南突角に望樓ありて之に機關銃を備へ付け更に内壕外壕の二重の壕を有し壕深く積土高く攀登容易ならざる急斜面を成し多數の機關銃を配置し此の突角の防備を増強して居た。今や全線に互り砲口一齊に火を吐きて南苑城壁の要點に對して物凄き破壊射撃を

集中し歩兵は丈餘の高梁を掻きわけて歩一歩近接すれば敵亦必死の防戦に努め熾烈なる銃砲彈十字を切つて飛來した。所屬中隊は午前五時行動を起し同八時四十分敵前二百米に進出したが敵壘堅固にして我が砲兵射撃の効果も未だ十分ならず勢ひ工兵隊の決死破壊作業を必要とするに至つた。僚友伊藤工兵少尉は此の重大使命を帯び率先外壕に跳び込み外壕上の敵兵を掃蕩中惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。此の時迄中隊豫備隊として控置せられし氏の小隊は伊藤小隊の任務を續行すべき事を命ぜられた。氏は勇躍選抜兵を率ゐて破壊班長となり正午過ぎ我が右第一線部隊を超越し伊藤小隊の殘存者を併せ指揮し火焰發射器を以て壕上の敵を制壓しつゝ壕壁に通過設備を完了し率先壕上の敵陣地に爆彈を投じて突撃路を開設し續いて其の陣地に突入せんとする一刹那無敵彈飛來致命傷を受け壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊の將兵は勿論友軍歩兵は此の壯烈鬼神を哭かしむる奮闘に刺激せられ吾劣らじと怒濤の如く此の西南突角に突入して遂に之を奪取し以て南苑兵營奪取の重大端緒を拓き當日午後二時同兵營を完全に占領するに至つた。

氏は沈勇にして豪膽の人、而も上司に仕へて恭敬、部下に臨みて恩威並び行はれ常時潑刺たる意氣を以て工兵専門の學術科の研究に餘念なく其の成績も良好にして將兵一同の厚き信頼を受けて居た。今次聖戦に臨むや着意周到行動機敏にして克く中隊長を輔佐し又獨立勤務に服して配屬歩兵隊長の意圖の如く活躍して居た。而して南苑の總攻撃に當りては決死難局に當り遂に肉彈となりて全軍戰勝の端緒を開いた。寔に是皇軍工兵の精華にして青年士官の龜鑑たるものであつた。今や其の壯容聲咳に接すべくもなく痛惜哀悼極まりなしと雖も其の赫々たる武勳は皇軍戰史に異彩を放ち其の芳名は不朽に傳へて愈々芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の前途に尊き佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日工兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に破格の功四級金鷄勳章を賜はつた。(MS)



陸軍輜重兵中尉從七位勳六等功五級 加藤 孝一

豪膽機敏の小隊長寡兵山西石門村に奮戦し輜重の危機を救出す

氏は名古屋市東區安房町の人にして父を芳美母を靜と云ひ明治四十三年六月十日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして友情に富み又責任觀念強く事に當るや熱誠忠實不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和三年三月名古屋第一商業學校を卒業し在學間無缺席にて精勤賞狀を附與せられた。昭和五年十二月幹部候補生として名古屋輜重兵大隊へ入營し翌六年十一月幹部候補生終末試験に合格し翌十二月軍曹の階級に進められ滿期除隊となつた。其の後教育召集を受け輜重兵少尉に任官した。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召幸村兵站輜重兵中隊第一小隊長として克く中隊長を輔佐して部隊の編成及訓練に活躍し上下の信頼厚かつた。斯くて八月中旬北支に向け征途に就き九月五日南口附近の戦闘開始せらるゝや所屬中隊は道路泥濘而も高粱繁茂し敵の敗殘部隊は隨所に出沒蠢動する不安の情況下に氏は克く中隊長の命令指示を體し周到大膽なる指揮を以て適時第一線部隊に彈藥糧食を補給し以て其の任務を積極的に完了した。所屬中隊は爾後京漢線方面の各會戰に参加したが其の間進路は幾多の濁流泥濘地帯及山岳地帯介在し又粗惡なる給養と連日の不眠不休努力の結果は人馬の疲勞其の極に達した。斯かる艱難辛苦の中に氏は常に絶倫の志氣を以て部下と艱苦を共にし人馬を勞はり勵まし適切なる指揮を以て適時第一線部隊へ補給の任務を完了した。

斯くて所屬部隊は山西省方面に作戰する川岸部隊の左縱隊に糧秣補給の任務を帯び十月二十三日井徑を出發し側魚嶺を経て石門口に向ひ前進した。此の附近の地形は北支第一の難關と稱せられ山道は峽隘なる岩盤道或は不規則なる河床道或

は突兀たる急坂路或は身の毛もよだつ絶壁の山腹道にして一時間僅かに數丁を前進し得るに過ぎざる天險もあつた。而して此の附近に蟠踞せし敵は極めて巧妙なる陣地を構築し頑強なる抵抗を試みたのであつたが皇軍の決死的猛攻に堪えかねて西方に潰走した。併し乍ら遁げ後れし敗殘部隊は今尙附近の山間幽谷に潜伏し皇軍の後方を擾亂せんとする氣配を示して居た。されば所屬中隊には若干の護衛歩兵も附けられたが各小隊に於ても自衛隊を設けて警戒を嚴にしつゝ前進を續けた。



た。氏の小隊は駱駝百頭に糧秣を満載し十月二十六日朝側魚嶺を出發し午後一時東石門と七亘村の中間地區にさしかゝつた。此の時氏の小隊の前方を前進中なりし友軍輜重小隊より敵と遭遇せしに付逐次側魚嶺に後退すとの通報に接した。當時前述の如き天險の爲各小隊の行軍長徑は自然延長せるは勿論各小隊間の距離も延伸し僅少な護衛兵との連絡も應援も殆ど不可能の状態であつた。此の通報に接した氏は直ちに部下の自衛隊を率ゐて前方要點を占領し前方より後退し來る友軍輜重小隊を收容して自己の小隊と共に側魚嶺に無事集結するを得た。此の夜側魚嶺には新たに後方より輜重二箇小隊到着し合計四箇小隊となつたが戰闘部隊は僅少の護衛歩兵のみであつた。翌二十八日朝一行は護衛兵を先頭とし氏の駱駝小隊を最後尾として側魚嶺を出發し午後三時半七亘村の西方約千五百米の山腹道にさしかゝつた。此の時又もや前方部隊より敵兵來襲の通報を受けた。敵は我が護衛歩兵を通過せしめた後戰鬥力なき輜重を襲つたのであつた。之が爲我が護衛歩兵は全く此の狀況も知らずに尙前進中であつた。我に十數倍せる敵は早くも氏の小隊の前後にも現はれて來た。併し剛膽

なる氏は冷靜先づ自衛隊の一部を以て後方に迫る敵を驅逐せしめ自ら十五名の自衛隊を率ゐて左側方の高地を占領し小隊主力には後方安全地帯に集結を命じた。敵は機關銃を有し且兵力の優勢を恃み逐次包圍の態勢を取り左側面にも右前方にも續々兵力を増加して來た。氏は部下を激勵し一步も退かず斷乎として自らも小銃を執りて奮闘敵に多大の損害を與へつゝ苦闘實に三時間にして敵は退却し茲に小隊は僅少なる損害を以て後方安全地帯に集結し得たるのみならず河野、荒木兩部隊も亦安全なるを得以て其の輸送の目的を達するに至つた。併し此の激戦中午後五時三十分頃無念にも氏は胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げたのであつた。

氏は人格高邁にして諸人の愛敬を受け且有爲の人材として漸く其の雄腕を發揮せんとするに方り今次聖戦に参加したのであつたが其の報國の赤誠の迸る處温情自づから人馬に及び堅忍克く百難を排除して補給の重任を全うし又進退容易ならざる難關に於て大敵の來襲を受くるや慧眼克く巧に部隊の離脱を圖り或は附近に行動する輜重隊全般の爲に自ら犠牲となり奮闘力戦大敵を支へて其の危急を免がれしめた。寔に是皇軍輜重幹部の龜鑑と謂ふべきである。今や氏の如き忠誠有爲の幹部を喪ふ痛歎哀悼の情を禁じ得ずと雖も其の赫々たる武勳は皇軍戦史に光彩を放ち其の名は不朽に傳へて愈々芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日輜重兵中尉に進級し從七位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

陸軍歩兵少尉正八位勳五等功五級 位田 綱 次

滿洲事變の殊勲者今次亦小隊長として偉勳を奏し馬落坡に玉碎す

氏は兵庫縣印南郡伊保村の人にして亡父を中村孫藏母をしんと云ひ明治三十三年五月十四日に生れ後位田貫治同やす夫妻の養子となり妻きよのとの間に博敏、滿里子及美代子の一男二女を擧げた。資性所謂軍人氣質にして頗る嚴格なりしも又子煩悩であつた。業務には熱心にして責任觀念強く又己を持する極めて質素にして他人の爲には成し得る限りの援助を惜しまぬ美風があつた。大正三年三月大部小學校高等科を卒業し其の後實姉婿家先經營の綿布會社の株主となり入營時



で該社に勤務してゐた。大正九年十二月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に勉勵し下士官候補者に採用せられ同十一年十二月歩兵伍長に任官爾後各種の勤務に服し特に師團司令部附として勤務すること約五年逐次累進して昭和五年七月歩兵准尉に進級した。而して同七年四月滿洲事變に出動哈爾濱に駐屯後一面坡井沙河沙拉河子海林烏吉榮河等の各戰團に参加して殊勳を樹て且北滿各地の警備に任じ同年十二月内地に歸還豫備役に編入せられたが氏は滿洲事變の赫々たる武功に依り勳六等單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。歸郷後は同八年四月まで姫路師團司令部に通勤業務を授

助し爾後日本毛織會社加古川工場に入社して守衛を勤め傍工場在郷軍人分會の幹部として分會長を輔佐し其の業務一切を處理してゐた。支那事變起るや昭和十二年七月應召沼田部隊第三中隊に編入中隊指揮班班長兼人事係として八月十日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し九月九日所屬中隊は丁莊附近敵陣地夜襲に参加した。此の際中隊は午後九時より行動を起し當初大隊

の第二線たりしが其の後第一線部隊の丁莊突入を容易ならしむる目的を以て中隊は第一線となり東部丁莊東南角に突撃することとなるや氏は常に中隊長の側近にありて敵弾の下殊に高粱畑の泥濘を浚する中及敵陣地前のある深き胸に達する水濠を率先徒渉して前進した。然るに間もなく中隊長敵弾に負傷し氏は其の手當中左肩胛部に擦過銃創を受けた。併し氏は屈せず續いて勇敢に前進し遂に午前七時丁莊を占領するに至つた。爾後氏は假機帶所にて治療を受け再び戦線に復歸し小隊長として十七日には沙官屯十九日には當官屯の攻撃に参加奮戦した。

九月二十一日馬落坡の攻撃に際しては氏は第一小隊長として中隊長代理岩崎少尉の指揮下に本戦團に参加した。當夜午後九時一同は軍旗に最後の訣別をなして行動を起し逐次敵陣地に接近し午後十一時中隊は第一第二小隊を第一線と爲し氏の第一小隊は左第一線に展開して攻撃前進に移つた。敵は深き四米の網形及屋根形鐵條網を設け其の後方には掩蓋機關銃座を設備し鐵條網前方には幅約五米深さ一米五十乃至二米の水濠を繞らし堅固に陣地を設備し中隊正面の兵力は砲四門を有する約一箇聯隊であつた。しかも當夜は暗黒にして陣地前は泥濘を浚する高粱畑にして行動頗る困難であつた。氏は小隊を指揮し以上の如き困難を冒しつゝ正子頃敵前五百米附近に達するや敵より熾烈なる射撃を受けたるも之に屈することなく率先々頭に立ち確實に部下を掌握しつゝ逐次匍匐する如くして敵陣に近迫し午前三時頃敵前三百米附近に達し交戦すること三時間躍進又躍進して遂に水濠前十米附近まで近迫して部下を督勵し小隊全火力を發揚しつゝ突撃の機を窺つて居たが此の奮闘中無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし氏等の勇戦奮闘と尊き犠牲により敵を馬落坡正面に牽制し聯隊の張新庄奪取を容易ならしめたのであつた。

氏や曩に滿洲事變に参加して殊勳を樹て今次亦召されて戦陣に臨むや劍電彈雨の下率先々頭に立ち勇猛沈着指揮的確掌握確實しかも戦傷を冒して尙奮戦し部下をして期せずして所謂勇將の下に弱卒なからしめ克く苦境を克服して戦勝の一途

に導き遺憾とする所なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて只管其の職責に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。參戰幾何もなくして斯かる優秀幹部を喪へるは惜しみて尙餘あるも氏が兩事變に樹てたる技群の赫々たる偉勳は萬世に亙り皇軍戦史に輝き其の芳名は千載に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神と祀られて神靈尙も皇國の前途を守護し又一家の守護神ともなりて愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に進級し正八位に叙せられ次で勳五等双光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級 田 端 林 三

鐵血外長城八角臺の守地を掩ふも敢然大軍を撃退し重任を全うす(壯烈)

氏は埼玉縣比企郡竹澤村の人にして父を新吉亡母をいちと云ひ明治三十八年十二月十七日に生れ妻いちとの間に長男道路を擧げた。性沈着豪膽にして果斷又事に當るや熱誠眞摯遂げずんば已まざるの氣概を持つて居た。大正九年三月竹澤小學校高等科を卒業し其の後は熊谷市茂木紙商店員となり克く業務に精勵して諸人の信用を受け大正十五年一月麻布歩兵聯隊へ入營し機關銃中隊へ編入せられた。斯くて上等兵に進められ現役滿期に至つたが考ふる所ありて再役志願をなし歩兵伍長に任官し聯隊本部附を命ぜられた。爾來軍務に精勵して其の手腕を認められ昭和七年七月には滿洲事變の爲渡滿し天津附近の警備に任じ翌八年十月内地歸還功を以て勳七等青色桐葉章を賜はり又同九年五月には精勤年功を表彰されて勳功章を附與され同十一年五月累進して歩兵准尉に任ぜられ牛島部隊本部附として再び渡滿し匪賊討伐に参加する事實に六十數回に及び常に周到綿密なる計畫と日夜の奮勵努力に依り補給々養の業務を圓滑にし部隊の任務達成に貢献せる所甚大で

あつた。

北支の風雲急を告ぐるや氏は十川部隊福田機關銃中隊の小隊長として昭和十二年七月下旬行動を起し遠く内蒙の大砂漠を横断して多倫經由張家口方面に前進し八月二十一日外長城線の前面に到着した。日中は堪え難き炎熱であつたが夜分は早や初秋の冷氣身に染み朝は概ね八時前後まで霧に鎖さるゝが此の附近の天候であつた。張家口附近の敵陣地は半永久陣



地にして其の前哨陣地たる八角臺には望樓ありて鋭く皇軍の行動を監視して居た。所屬部隊は二十四日萬全縣より南下午後四時三十分平綏線に達し所屬酒匂大隊は右第一線となり先づ揚家堡部落を攻略し引續き石頭屯に前進し翌二十五日に於ける八角臺の攻撃を準備した。當日も朝霧霽るゝ合間を縫ふて前進すれば敵は迫撃砲及野砲を以て猛射を浴びせて来たが所屬中隊は主力を以て大隊主力と共に八角臺の正面に通ずる稜線傳ひに前進し氏は小隊を率ゐて主力進路の右方地區を八角臺の側方稜線に向ひ勇敢に前進した。大隊主力方面に於ては稜線上の數線陣地を逐次に攻略して前進を續けて居たが漸

次死傷を増加する有様であつた。氏の小隊は正午頃重要地線を占領したが我が主力部隊の猛進を見た敵は迫撃砲を以て猛烈なる側射を加ふると共に約七八百名の砲兵は我が主力部隊の側面に對し猛烈なる逆襲に轉じて来た。氏の小隊は恰も其の逆襲進路の要點を扼する關係に在つたので僅々二十名足らずの小兵力ではあるが一步も退かず最後迄死守するに決した。敵は我を少數と見て前面二百米に近迫して来た。氏はそれまで満を持し一發も發射せしめなかつたが時来れりと猛烈火蓋を切れば敵は忽ち百餘名の死傷を生じ千米も遠く潰走した。然るに新手を加へた敵兵約八九百名は又もや勇敢に近迫し我が小隊目がけて猛射を浴びせて来た。されど氏は亦距離に引き寄せ一舉に薙ぎ倒して見事に之を撃退した。併し小隊にも若干の死傷を生じ又彈藥補充の爲三名の部下を派遣したる爲守兵は僅かに十二三名となつた。氏は自ら部下の傷者を勞はりつゝも部下が「敵はく」と叫びながら陣地を紅に染めて斃れ行く有様に悲憤の涙に咽んだのであつたが斯くするうち又もや第三回の逆襲を受け氏は寡兵ながらも部下を激勵し銃身も熔けんばかりに猛射中一彈飛來氏の右胸部を貫通し氏はあつと叫んで打伏した。氣丈の氏は部下の呼ぶ聲に意識を回復し起き上りて「撃てく」と號令したが第二彈飛來右大腿部を貫通し「無念」と叫んで再び倒れた。敵は約千名に近き優勢なる兵力であつたが精銳なる我が機關銃小隊に撃ち掃くられ遂に其の企圖を放棄して退却した。時に午後四時十分頃であつた。其の後小隊の一銃は敵彈の爲故障を生じて射撃不能となりしが他の一銃を以て四度五度と執拗なる逆襲を撃退した。夜に入りて軍醫來り手當を加へしが氏は尙意識明瞭であつた。部隊長が來り「田端確かりせい」と勵ませば氏は「部下を殺して申譯ありません」と答へ又看護に當りし渡邊一等兵に「敵はどうした相原(分隊長)は大丈夫か」と尋ねた。相原上等兵は小隊長に代つて小隊を指揮中敵彈の爲既に戦死して居た。一等兵は胸迫つたが「皆元氣です敵は退却しました。小隊長殿何かおつしやる事はありませんか」と尋ねれば「ウゝ覺悟はして居る。今日は道路の生れた日だ。此の日に死ぬのも何かの運命だらう。戰場で死ぬ程名譽な事はない。俺の双眼鏡は道路が大きくなつたらやつてくれ。遺言は右のポケットに在る」と言ひ終り精魂も盡きてか靜に目を閉ぢ。天皇陛下萬歳の一語を名残とし口邊微かに笑さへ含みて神とも見ゆる安らかな顔で靜かに息を引き取つた。時に二十六日午前八時三十八分であつた。而して所屬大隊は氏の勇戦に依り當面の敵を撃破して遂に八角臺を占領するを得たのであつた。氏は人格高潔指揮亦優秀にして鐵血小隊を練成し懸軍長驅沙漠を横断し天險の山岳を踏破し而して慧眼克く要點を占領

して幾度か敵の大軍を撃退し以て大隊主力の戦闘に重大なる利益を與へた。寔に皇軍指揮官の精銳にして一般軍人の鑑たるものであつた。あゝ今や風發叱咤の其の雄姿春風慈顔の其の温容に接すべくもなく痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も其の赫々たる武勳は皇軍戦史に光彩を放ちて芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守護し又一家殊に愛子の前途に尊き加護照覽を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に任官し正八位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級 野口正太郎

#### 勇敢機敏の小隊長奮戦中外長城線の華と散る

氏は埼玉縣大里郡三尻村の人にして實父を木村繁藏實母をみさと云ひ明治三十九年四月十日に生れ昭和八年十二月野口安太郎同きん夫妻の婚養子となり妻とよとの間に一女芳枝を擧げた。資性剛毅にして進取の氣象に富み斃れて尙已まざるの概あり又常に上を敬ひ下を慈しみ且子煩悩であつた。大正十年三月出生地の南埼玉郡平野尋常高等小學校を卒業したが入學以來成績優等にして各學年共級長に選ばれた。卒業後は農業に従事し同十四年一月現役志願兵として東京麻布歩兵聯隊に入營克く軍務に精勵し優良の成績を擧げて下士官候補者に採用せられ同十五年十二月歩兵伍長に任官爾來益々敏腕を發揮し果進して曹長に進み昭和九年五月選ばれて北支那駐屯歩兵隊に派遣せられ該地の警備に任し約一年の後原隊に歸還し功に依り勳八等瑞寶章を賜はり十年十二月特務曹長に進級し次で翌十一年五月所屬聯隊は滿洲に派遣せられ警備の重任に就いた。在滿中は主として齊々哈爾に駐屯し治安維持匪賊討伐等に従事し日夜克く中隊長を輔佐し其の貢獻する所甚

大であつた。

支那事變起るや昭和十二年七月末湯淺部隊に屬し小林中隊長として急遽出動し先づ天津に至り該地附近の殘敵掃蕩並に警備に任した。天津は氏が二年前駐屯警備に任せし思ひ出の深き所なりし關係上該地方の地形や各種狀況を詳知せる氏は誘導的地位に立ちて東奔西走日夜積極的に掃蕩警備に活躍し中隊長の任務達成に貢獻する所甚大なるものがあつた。其



の後八月中旬所屬隊は急遽承德を経て遠く張北に轉進することゝなり幾多の困難を冒して逸早く該地に到着するや所屬兵團は諸種の狀況上全部の集結を待つ事なく外長城線一帯を占領せる敵を攻撃する事となつた。此の攻撃に先だち八月十八日氏は湯淺部隊長より長城北方約四杆の火紅溝、狼火溝附近の敵情及地形の偵察を命ぜられた。此の附近一帯の地形は起伏錯綜したる自然の要害を形成し敵は巧に之を利用して縦深の配備を爲し各所に散在する要點には特に防禦設備を増強し自動火器を配置して所謂火點式の防禦地帯となし其の攻略は極めて困難を豫期せらるゝ状態であつた。氏は巧に地形地物を利用して部下を區署し大膽にも敵陣近く潜行し一瞬の慧眼を以て敵陣の細部及地形の詳細に就て觀破し有利なる報告を提出し爾後攻撃計畫の策定及攻撃實施に多大の効果あらしめた。

二十日所屬中隊は敵陣中の「ニ」及「ハ」火點を攻撃した。氏の小隊は中隊の右第一線となり「ニ」火點を目標として攻撃前進し歩々抵抗する敵の警戒部隊を撃退しつゝ敵前五六百米に達した。此の時右斜方向より盛んに敵重機關銃の斜射を浴び

せられ中隊の前進は意の如くならざるに至つた。氏は敵彈雨飛の下に於て沈着且勇敢に部下を激勵し一意前進に努むると共に一方「へ」火點制壓中の配屬機關銃小隊は我を斜射しつゝある敵機關銃に目標を變換し猛烈なる射彈を送りて遂に之を沈黙せしめた。氏は直ちに此の機を利用し熾烈なる正面火を冒して一進一止敵に近迫し小隊火器の全威力を發揮して敵を震駭せしめ自ら突撃の乗すべき機を作爲し午後七時三十分頃勇猛果敢なる突撃を決行し一舉「ニ」火點を占領した。然るに中隊の主攻正面の「へ」火點の敵は頑として抵抗を続け殊に其の重火器は猛威を逞ふしつゝあつた。茲に於て中隊長は第三小隊を正面に増加し氏の小隊をして「へ」火點の左側に迫る如く攻撃せしめ中隊の全火力は配屬機關銃と共に此の火點に集中せらるゝことゝなつた。(ニ)火點を占領した氏は決然小隊を提げて新任務に就き敵の猛火を冒して午後八時頃には(へ)火點の左側三十米に近迫し小隊の全火力を最高度に發揚し正面の中隊主力と相俟て一齊に(へ)火點に突入し奮戦格闘數十名の敵を撃滅し遂に該火點を占據したのであつた。此の時に於ける氏の奮闘は實に目覺ましく軍刀を振り翳して當るを幸ひ瞬く間に數名の敵を斬殺し其の獅子奮迅の奮闘は鬼神を避けしむるものあり部下一同の感激した所であつた。此の戦闘に於て氏の小隊が早くも敵の(ニ)火點を占領した事は總て中隊の(へ)火點攻略となり(ニ)(へ)兩火點の攻略は實に長城線敵陣地の一角に初めて間隙を生ぜしめたるものにして爾後全隊の攻撃進捗に及ぼしたる効果は甚大と謂うべきである。(へ)火點を占領した中隊は息をもつがず潰走の敵に殲滅的大打撃を加へ尙附近の殘敵を掃蕩中數次に互る敵の反撃を其の都度撃退したのであつた。斯くて夕闇迫る頃雨は愈々激しく降り來りしが氏は午後九時頃前方百米餘の一軒屋にありて抵抗を続けある敵を撃滅すべく前進し一舉に該家屋内に突入するや無念敵の埋設地雷は轟然として一時に爆發し氏は顔面其の他に爆創を受けて倒れ同時氏の部下も亦多數死傷した。氏は重傷でありながら傍に倒れたる部下を顧みて「お前の傷は淺いぞしつかりせよ」と激勵したが氏自らは遂に人事不省に陥つた。氏等は早速衛生部員の手當を受け逐次後送せられ承

德陸軍病院に收容の上有ゆる治療を盡したが其の甲斐もなく八月二十六日午前六時惜しくも護國の華と散つた。

氏は平素先任准尉として多年の経験と老練豊富の技能は常に優秀の成績を挙げ又克く下士官以下の儀表となり中隊長の片腕として信頼せられ大いに其の將來を期待されて居たのであつた。而して今次聖戰に参加するや小隊長として指揮適切機を見る敏にして而も戰闘激烈凄惨の場合に於ける毅然たる態度と突撃時に於ける勇戦奮闘は部下一同の感激して賞讃措かざる所であつた。此の如きは全く一身を君國に捧げ覽れて尙已まざる盡忠至誠の顯現にして軍人の龜鑑とするに足るものである。所屬中隊長より遺族宛書信の一節にも「君こそ眞の帝國軍人の龜鑑なりとの賞辭を惜しまぬものに御座候」とある。噫聖戰の初期斯の如き忠誠勇武の士を喪う。寔に痛恨哀悼の情禁じ得ざる所である。併し士の戰場に臨むや素より生還を期せず氏が外長城線攻撃に玉碎して樹てたる赫々の武勳は千載に互り皇軍戰史に輝き其の芳名は後世に驅はるべく不滅の英靈は護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又一家の前途殊に愛子の將來に尊き加護照覽を垂るゝことであらう。氏は傷死の日歩兵少尉に進級し正八位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

## 陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級 山岡賢一

### 豪膽俊敏なる小隊長下馬嶺の山岳戰に奮闘して職に殞る

氏は廣島縣神石郡小野村の人にして父を五市母をサワノと云ひ明治三十五年十一月二日に生れ妻清子との間に美子、幹道及千瑞子の三愛子を擧げた。性温厚篤實にして思慮周密常に修養に努め父母に仕へて孝養を盡し又妻子を善導して堅實なる家庭を作り一般世人に對しても情誼に厚く村民一同の愛敬を受けて居た。大正六年三月優良なる成績を以て郷里の高

等小學校を卒業し同十二年一月徴兵として廣島歩兵聯隊へ入營し諸事誠實勤勉にして學術科の成績は常に群を抜き特に銃劍術は極めて優秀で下士官候補者に採用せられ翌十三年十二月隊内の第一位を以て歩兵伍長に任官し爾後中隊附下士官聯隊本部書記參謀本部書記に歴任し到る所俊秀の手腕を發揚し昭和七年七月歩兵准尉に累進して原隊に復歸した。其の後支那駐屯軍歩兵聯隊附となり警備の重任に服して居た。



蘆溝橋事件勃發なるや七月八日所屬古川中隊は急遽北京に派遣され警備の任に就いた。氏の小隊は先づ帝國大使館及在留那人の保護等重要警備に服し續いて西直門阜成門等の要點を確保し且友邦保安隊を監視指導し同月十七日より西直門驛に於て平緩鐵道の警備並に其の沿線の治安維持に日夜奮勵を續けて居た。

八月二十五日友軍騎兵隊が下馬岑附近に於て敵の重圍に陥り危殆に瀕すとの情報に接し所屬大隊は之が救援の命を受け翌二十六日未明汽車輸送に依り北京を出發し清水調驛に到り下車し爾後徒步行軍に依り下馬岑方向に急進した。下馬岑は北京の西方約十四五里永定河々谷に沿ふ小部落にして北は南口八達嶺に通ずる道路を扼し西方遠く長城を望見し得る要害を形成し南口方面に作戰する我が軍の左翼を脅威し得べき關係位置にあつた。大隊の進路は險峻なる山道で途中は飲食物を得る能はず極めて難行軍であつたが氏は克く部下を愛護激勵し二十七日には所屬中隊長の指揮下に中隊に配屬せられたる機關銃小隊と協力して我が騎兵隊所在地の北方約一軒の韋子水附近の高地に於て頑敵を撃破し更に敵情地形を偵察しつつ勇戦奮闘附近の殘敵を驅

逐し以て騎兵隊救援の目的を達し且板垣部隊の左翼を安全ならしめた。翌廿八日下馬岑の東方約二吉米に在る雁翅村附近の敵陣地攻撃に當りては迅速果敢なる行動に依り中隊主力の戦闘に寄與せる所甚大であつた。敵は神速なる我が猛攻に堪えかねて遂に韋子雁翅村の線以東の線より退却し同線以西に於て立石臺（下馬岑の北方約二軒）を中心とする正面約五軒奥行約三軒の地域に於て數線の天險陣地を占領し頑強に固守して居た。大隊長は更に積極的に任務を遂行するの必要を認め翌二十九日を期し立石臺の敵陣地を攻撃するに決した。併し正面攻撃のみにては奏效容易ならざるを思ひ一部を以て迂回隊となし敵陣地の左側背より攻撃せしむべく氏の小隊に此の重任を與へた。氏は同日午後二時勇躍雁翅村を出發し途中敵の監視部隊を驅逐しつつ險難を突破し同夜敵陣地の左翼に肉迫した。翌三十日未明山雨を冒して終日激戦を交へ數個の敵陣地を奪取し夜に入つた。偶々状況の變化に依り大隊主力は氏の小隊の方面に轉進するに至つたが途中より更に状況一變し大隊主力は即刻北京へ歸還すべき電報命令に接し氏の所屬中隊の主力を残して歸還の途に就いた。今や氏の小隊は孤立敵中に在りて飢渴を忍びつつ堅忍持久新たに到着すべき他部隊の來着を待たねばならなかつた。されど積極敢爲の氏は翌三十一日寡兵を以て攻撃に次ぐに攻撃を以てし敵陣地深く進入し立石臺の西側陣地に肉迫し而も極めて僅少なる損害を以て最大の戦果を收め得たるは全く氏の卓抜なる慧眼と適切機敏なる戦闘指揮の賜であつた。新たに到着せる他部隊は氏の武功を讃へて此の高地を山岡山と命名した。然るに惜しいかな此の日午後四時二十分前面敵陣地を攻撃し其の翼側稜線を率先敵陣地に向ひ突撃中敵機關銃の猛射を受け左胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。小隊は其の後松浦軍曹の指揮に依り後續部隊に貴重なる戦闘資料を提供して七日夜北平の所屬大隊に復歸した。

氏は天險地帯の戦闘に参加し極めて困難なる特別任務に服し慧眼克く戦機を看破し豪膽機敏寡を以て堅壘を突破し以て騎兵隊救援の目的を達成し更に敵膽を奪ひ皇軍の志氣を鼓舞する所甚大にして寔に皇軍指揮官の龜鑑と謂ふべきである。

今や風發叱咤の壯容に接すべくもなく痛惜哀悼禁じ難しと雖も其の赫々たる武勳は皇軍戰史に光彩を放ちて芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國竝に一家特に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戰死の日歩兵少尉に進級し正八位に叙し次で勳六等單光旭日章竝に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵少尉正八位勳七等功六級 山内 春雄

#### 至誠一貫の士北滿警備に活躍し三江省討匪戰の華と散る

氏は兵庫縣多紀郡草山村の人にして亡父を鶴藏母をそのと云ひ明治四十年一月十一日に生れ妻ぬひとの間に孝子、厚子の二愛子を擧げた。性温厚篤實にして孝心深く父亡き後は特に一人の母を勞はり娘の如くやさしく仕へ又朋友知己一般に對しても誠實と親切とを以て交際し事に當るや熱誠眞摯遂げずんば息まざるの氣概を持つて居た。大正十年三日草山村本郷小學校高等科を卒業し其の後二ヶ年間冬期は藤の酒造家に又夏期は製茶店に雇はれ其の給料の全部を父に提供し縦へ壹錢たりとも自己の自由に使用せず輕佻浮薄の世俗に超然として黙々業務に精勵して居た。大正十四年一月十八歳を以て現役志願兵として篠山歩兵聯隊へ入營し下士官候補者となり翌十五年十二月歩兵伍長に任官し軍務に精勵して良成績を擧げ昭和十一年二月歩兵准尉に累進した。

昭和十二年四月松井部隊第三中隊附として勇躍北滿警備の途に就いた。斯くて所屬部隊は五月上旬濱江省梨樹嶺附近の警備に就きしが氏は人事係准尉として克く中隊長を輔佐し敏活適確に業務を處理し警備業務に遺憾なからしむると共に常

に率先垂範下士官以下を善導して中隊の中堅となり又中隊内の一箇小隊が白石嶺子に分駐するや之が補給連絡に關し屢々自身分駐所に往復して事務を丹滑ならしめ次で中隊は六月下旬より三江省興隆鎮警備の爲移動したが依然熱心勉勵倦む事を知らず殊に同地に駐屯せる部隊本部より在二道河子の第一中隊へ糧秣輸送を命ぜらるゝや交通不便且不安なる情況下なるにも拘はらず氏は周到なる着意を以て迅速確實に其の任務を完了し益々衆望を擔ふに至つた。



七月下旬所屬太田中隊は濱田中隊と協力して三江省方正縣内の三道通及四道河子附近に蟠踞せる匪賊を覆滅すべき命令を受け七月二十一日より行動を起した。當時天候極めて不良にして降雨連日に及び部隊の行動甚だ困難を來たしたが氏は第三小隊長として指揮掌握的確にして克く部下を勞はり逐次敵の巢窟地域に近迫した。敵は三道通西方の急峻なる山系を占領し頑強に守備して居た。中隊は二十三日午前二時とある河を渡つて敵情を偵察した。然るに匪賊の點滅する懐中電燈に依り概ね其の位置判明せるを以て午前六時より攻撃を開始した。敵匪は抗日第五軍の主力と同第八軍の一部の合流匪に

して附近の住民をも之に参加せしめ急坂を利用して頑強に抵抗し我が中隊の攻撃も意の如く進捗しなかつた。茲に於て中隊長は中隊主力を以て敵陣地の要點に火力を集中すると共に當時中隊豫備隊たりし山内小隊をして敵陣地の左翼を包圍せしめ左側背より席巻すべき事を命じた。氏は勇躍小隊を率ゐて巧に地形を利用し敵火を避けつゝ迅速に敵の左翼を包圍した。敵は必死と氏の小隊に向て射撃し其の前進を拒止したが氏は適切なる部署に依り敵を制壓しつゝ近迫し敵に猛射を



浴びせたる後軍刀一閃喊聲高く突撃に移れば續く決死の小隊全員は肉弾となりて敵陣地に突入した。敵は我が猛攻に堪えかねて遂に西南方に四散敗走した。併し惜しいかな氏は突入の一步手前に於て敵兇弾の爲右胸部に貫通銃創を受け「頼むぞ」の一語を残して壯烈なる戦死を遂げた。本戦闘に於て敵は王連長以下四十四名の屍體と負傷者十三名斃馬三頭を遺棄して居た。斯かる戦果を得たるは氏の勇戦奮闘に俟つ所頗る大にして所屬中隊長以下は深き哀愁に沈みつゝ其の功績を泪ながら感謝した。

氏は一生を通じて至誠に生き七生報國を誓つて祖國を出發した。而して氏等の警備地域は廣漠にして交通路極めて不良人家稀にして物資に乏しく時は正に盛夏の酷熱にして飲料水缺乏し其の勞苦や容易ならざるものであつた。斯かる狀況下に氏は敏腕克く諸給養の圓滑を圖り又部隊を指揮して陣頭に立つや慧眼克く敵情地形を明察し適切老練なる指揮と沈着果斷なる行動に依り敵を壓倒覆滅し以て中隊戦勝に確乎不抜の礎石を投じた。寔に之皇軍幹部の龜鑑たるものと謂ふべきである。皇軍主力が支那大陸に活躍するの時氏は人目もひかぬ北滿討匪に玉碎せるは痛憤禁じ難きものあるべしと雖も今次北滿警滿の重任たるや支那大陸の作戦と密接不可分の關係にあるは勿論蘇滿國境の情勢が一觸即發の危機を藏せる當時の環境は之同一作戦と見るを得べく氏の功績たるや天晴れ皇軍戦史に牢記せられて芳名を後世に傳へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰かれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵少尉に進級し正八位に叙せられ次で勳七等青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

陸軍騎兵少尉正八位勳七等功六級 上谷 定

豪膽機敏なる小隊長羅店鎮北方地區に勇戦し主力部隊の危機を救ふ

氏は徳島縣美馬郡穴吹町の人にして父を吉田孫市亡母をサヨ養父を市助養母をルイと云ひ明治三十七年四月三日に生れ妻ヨシ子との間に文字を擧げたが惜しくも夭折した。性高潔にして思慮深く質實剛健を持し長上を敬ひ同輩に友情を盡し又幼者に親切にして諸事誠實飽く迄も責任を重んずる美風を有し衆の模範として其の將來を囑目されて居た。大正七年三月穴吹小學校高等科を卒業後直ちに東京商工學校へ入校し同十年三月同校を卒業其の後は金物商店の店員として業務に精勵して居たが大正十三年一月現役志願兵として善通寺騎兵聯隊へ入營し同年八月騎兵學校教導隊へ分遣せられ約一年の後原隊へ復歸し同十四年十二月騎兵伍長に任官し爾來優秀なる成績を擧げ昭和十年六月騎兵准尉に累進した。其の間騎兵學校附として約三ヶ年又陸軍士官學校附として約七ヶ年に亘り勤務して其の敏腕を發揮し昭和十年六月以來は原隊に復歸し機關銃隊附として勤務して居た。

支那事變起るや田邊部隊に屬し部隊瓦斯掛將校として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は昭和十二年八月下旬上海戰場へ到着し九月五日羅店鎮北方約一里半の戰場に於て戦闘を開始するに至つた。當時所屬部隊は寶山縣劉河鎮と羅店鎮との中間地區の扁家橋附近に於て所屬兵團の右翼を警戒中であつた。九月五日午後一時頃迫撃砲を有する約一千の敵部隊は扁家橋の北方部落たる高臺宅の線に進出し我が軍の右翼を脅威するに至りしを以て所屬部隊はこれを撃攘する目的を以て直ちに主力を展開し北面して力攻中であつた。午後三時頃に至るや敵兵約五百名は西方より前進し來り扁家橋の東端附近に進出し所屬部隊の側背を急襲せんとする態勢となつた。此の時氏は臨時應急編成の小隊を指揮して逸早く餘家角(扁家橋

東方に在る部落の西側に既設せる陣地を占領して適切疾風の火力を發揚し以て新來の敵に多大の損害を與へ其の萎靡するに乘り獨斷攻勢に轉じた。此の時扁家橋方面の敵は其の重機關銃を以て十字の猛射を浴びせて來たが豪膽不敵の氏は部下を激勵しつゝ率先奮進したが扁家橋の東端附近の獨立家屋に據る約卅名の敵は輕機關銃を以て頑強に我が前進を阻止して居た。氏は小癩な敵と最先頭に立つて同家屋に突入し忽ち數名の敵を叩き斬れば敵兵は顔色を失ひ一目散に潰走した。



氏は更に戦果を西北方に擴張すべく奮闘中午後四時十分頃憎や一彈飛來胸部に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。小隊は其の後憤然扁家橋の要點を奮取し又所屬部隊は氏の神速機敏なる戰闘指揮と勇猛果敢なる行動とに依り西方より來襲せる敵の企圖を見事に破碎して側方の危険より免かれ一意北方の敵を力攻し同日午後六時卅分附近一帯の敵を擊攘し部隊本來の任務を全うするを得た。

氏は人格高潔指揮技能優秀にして所屬部隊の將兵一同より厚き信頼を受けて居た。參戰僅かに旬日を出でずして早くも玉碎せるは定めし痛恨悲憤堪え難きものがあつたであらう。然れども士の戰場に臨むや固より生還を期せず而も士は百戰功なく瓦全を耻づ。氏や上海扁家橋の一戰に玉碎せしと雖も氏が奮戦力闘以て主力部隊の危機を救出せる赫々たる武勳は天晴れ皇軍戰史に輝き其の芳名は後世に驅はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日騎兵少尉に進級し正八位に叙し次で勳七等青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵准尉勳七等功六級 田中武次

重傷を負ふも尙傷者の收容を顧念し大場鎮郊外の華と散る

氏は愛知縣碧海郡知立町の人にして父を藍吉亡母をかすと云ひ明治三十五年五月十九日に生れ妻貞惠との間には未だ愛子を恵まれなかつた。性淡泊にして孝心深く又兄弟思ひの人にして幼より乃木將軍を崇拜し常に一身を犠牲にしても公共の爲盡すを樂みとし責任を重んじ職務に勉勵し友情に厚く爲に諸人の敬愛を受けて居た。大正五年三月郷里の高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳ひ入營時に及んだ。大正八年一月現役志願兵として豊橋歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ下士官を志願して採用され歩兵伍長に任官し累進して歩兵曹長となり昭和六年十二月満期除隊となつた。其の間大正九年には西比利亞事件に昭和三年には濟南事變に出動し熱心精勵其の重任を果し功を以て勳八等に叙せられた。歸郷後は豊橋市岩田町信用組合専務理事として地方産業の發展に盡力し同組合功勞者の一人として指を屈せられて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月中旬應召片桐部隊松田衛生隊に屬し勇躍社途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬上海戰場に到着直ちに揚行鎮附近の戰闘に参加した。氏は彈雨を冒して命令受領に宿營設備に其の他繁多なる業務を處理して隊長を輔佐し續いて九月十三日より劉家行及顧家宅附近の戰闘を経て蘆溝橋クリーク附近の戰闘に参加し其の間彈雨の下に命令會報の受領を始めとし被服給與其の他の庶務に献身的の活躍を續け以て中隊の任務遂行に寄與せる所頗る大であつた。

十月十八日大場鎮附近の總攻撃開始せらるゝや所屬部隊は倉永部隊の戰闘正面に於ける傷者の收容を擔當し氏は其の第二

小隊長代理を命ぜられ王巷東側に綱帶所を開設し午前六時二十分より作業を開始した。當時倉永部隊の第一大隊はクリー  
 タの南側にある田堵宅附近に第二大隊は同部落の東方無名部落附近に展開し拂曉より攻撃前進中であつた。敵の陣地は果  
 てしもなく堅壘を基布し相互關聯して十字の銃砲火を集中し得る如く設備せられ我が第一線の前進を認むるや俄然猛射を  
 浴びせ來り死傷續出するに至つた。氏は部下小隊を督勵して第一線に進出し迅速に傷者を收容し午後一時頃迄に一と先づ



作業を終つたが第一線には尙續いて傷者發生しあるを知るや氏は再  
 び第一線に赴かんとせるに王巷及其の前方の進路上は敵砲彈の集中  
 甚だしくして上官よりも一時出發を見合はすべき事を注意せられ  
 た。併し氏は第一線負傷兵の身を思へば遲疑すべきにあらずと決然  
 部下小隊を率ゐて率先前進を起した。敵の砲彈は前後左右に落下炸  
 裂し危険甚だしかつたが氏は毅然として動ぜず部下に疎開隊形を執  
 らしめ砲彈下を躍進させた。今や氏は房宅の北方約二百米附近にさ  
 しかゝりしが其の時轟然として飛來せる一砲彈は氏の直前三米に落  
 下炸裂し氏は左方頭部右肘關節部左右下肢に砲彈破片創を受けて轉  
 倒した。傍に在りし擔架兵が直ちに應急手當を施せば氣丈の氏は「他に死傷者はないか」と繰り返へし「俺に構はず早く  
 第一線へ行け」と督勵し自身は後退を拒んで居た。其の後野戰病院へ收容され手厚き醫療を受けたが其の甲斐もなく十月  
 二十五日午前十時容態革まり遂に護國の華と散つた。  
 氏は幼少より修養を心がけ軍隊生活に依り愈々其の徳性を大成し七生報國の外餘念もなかつた。今次聖戰に参加するや

慘烈を極めたる上海戦線に活躍し特に敵陣地の樞軸を成せる大場鎮附近攻撃部隊の傷者收容は實に難中の難とする所。氏は  
 勇躍其の難局に當りて敵彈雨飛の中に多數の將兵を收容して貴重なる生命を救助した。而も重傷を負ふも尙任務を顧念  
 して息まず眞に是滅私報國の士にして初めて能くし得べき處にして天晴れ皇軍幹部の龜鑑と謂ふべきである。今や斯かる  
 誠忠勇武の士を喪ふ痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も其の赫々たる武勳は皇軍衛生戰史に輝き芳名は永く後世に誦はれ不滅の  
 英靈は護國の神と祀られて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。  
 氏は戦死の日歩兵准尉に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

陸軍歩兵准尉勳六等功六級 小林 莊 介

慧眼有爲の小隊長黃村攻撃に偉功を奏して玉碎す

氏は群馬縣利根郡東村の人にして父を光三郎母をはると云ひ明治四十二年二月十六日に生れ未だ獨身であつた。資性内  
 剛外柔にして氣概に富み親に仕へて至孝且情誼に厚く諸人の愛敬を受けて居た。大正十年三月東村尋常小學校を卒業引續  
 き利根農業學校に入り同十三年三月同校を卒業し更に一年間同村實業補習學校に就學した。昭和五年一月徴兵として高崎  
 歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し成績優秀選ばれて下士官候補者となり同年十一月仙臺教導學校に入校し翌年十月卒業歸  
 隊の上歩兵伍長に任官した。而して同七年二月滿洲事變の爲第十一中隊分隊長として上海方面に派遣せられ間もなく北滿  
 に轉進し警備並に匪賊討伐に従事し殊に馬占山軍の撃滅に當りては田中大隊に屬して活躍奮闘し功に依り勳七等青色桐葉  
 章を賜はつた。次で八年三月より約六ヶ月無線通信の教習を受け續いて師團司令部に於て通信術教育に従事し九年五月原

隊に復歸の上凱旋し聯隊本部附となり。果進して十一年十二月曹長に進み第十一中隊附に轉じた。氏は下士官として學術科の成績優秀であつたが殊に射撃及劍道に長じて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月森田部隊糸日谷中隊に編入せられ指揮班長として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後主として命令の受領及傳達に任じ日夜克く中隊長を輔佐し其の重任を遂行した。殊に九月十四日所屬隊は彈雨の下に永定



河の濁流を敵前渡河し直ちに右岸の敵陣を攻略し夜に入る迄追撃を續行したが氏は其の際幾多の苦難と危険を物ともせず勇敢に活躍して中隊長の指揮掌握を容易ならしめ翌十五日拒馬河畔東茨村附近の攻撃に際し第三小隊長河合准尉負傷するや氏は代つて同小隊長を命ぜられ上級職に就いた。此の榮譽を得たる氏は更に決死奉公の念を新にし其の指揮振り是一段と元氣旺盛決意の窺はるゝものあり爲に弔戦に奮起しある部下をして大いに力強さを感じしめた。斯くて十六日望海莊附近の攻撃には第一線に奮戦し續いて十七日東管頭附近の戦闘には再び中隊の左第一線小隊として午後三時三十分頃より夜半に至る迄奮戦力闘を續けたのであつたが夜に入りて雷雨來るや之を利用し敵前至近の距離に近迫した。然るに敵は益々猛射を加へ迫撃砲彈は頻々として近く落下炸裂し戦闘は頓に激戦となつた。中隊長は飽く迄猛攻突撃を決意し氏は中隊長の意圖を體し小隊の全火力を最高度に發揚して勇敢にも敵前約五十米より突撃を敢行し一舉敵陣の一角を奪取し遂に中隊主力の夜襲突撃を成功せしめた。續いて十八日より二十日に至る京漢線西側地區高里店及姥村附近の追撃には或は尖兵長

として或は第一線小隊長として終始勇敢機敏に活躍し其の重任を遂行した。二十一日所屬隊は大冊河北岸地區に進出し保定を主要根據地とする敵最後の抵抗線たる黃村附近の堅陣を攻撃すべく諸般の準備に着手した。此の時氏は選抜せられて將校斥候長となり部下七名を率ひ大冊河及敵陣地細部の偵察を命ぜられた。氏は巧に部下を指揮行動し水深腰に及ぶ大冊河の景況を具さに偵察し又對岸の敵前十數米にまで潛入し陣地の程度配備殊に自動火器の位置等を詳細に偵察し機を失せず報告した。此の報告は最も機宜に適し中隊長爾後の攻撃計畫樹立の好資料となつたのであつた。黃村附近の敵陣地は掩蓋機關銃座を要所に點在せしめ又數線の壕を掘りて障礙を増大する等頗る堅固なるものであつた。所屬大隊は二十二日拂曉前より渡河を開始し雨下する敵火を冒して對岸に達するや息つく暇もなく續いて敵陣地に向ひ攻撃前進した。所屬中隊は最初より第一線であつたが氏の小隊は中隊豫備隊として前進し攻撃間第一線に増加を命ぜられ敵の右翼據點たる前代流部落を包圍すべく前進した。然るに敵の掩蓋銃眼よりする機銃の猛射及近く炸裂する迫撃砲彈は物凄く爲に我が死傷相次で生じたが氏は泰然自若として前進を激動し逐次敵を制壓しつゝ躍進又躍進して敵前數十米に近迫した。敵は更に一段と熾烈なる火力を浴びせ來り次で約百名の敵は氏の小隊正面に逆襲して來た。氏は此の時なりと小隊の全火力を最高度に發揚し敵に大損害を與へ次で混亂せる敵中に突撃を決意し奮然として先頭に立ち突撃するや惜しくも腹部に貫通銃創を受けた。氏は重傷立つ能はざるを自覺し苦痛の中に「八木伍長小隊を指揮せよ」と叫び其の儘壯烈なる戦死を遂げた。併し小隊は勇敢に突撃して逆襲部隊を潰亂に陥れた。次で所屬隊は遂に黃村の堅陣を奪取し二十四日には保定城頭高く日章旗を翻すに至つたのであつた。

氏は曩に滿洲事變に尊き實戰の體驗を積みしが今次聖戰に従ふや沈着剛膽其の指揮掌握は的確にして中隊の戦勝に貢獻する所偉大なるものがあつた。特に大冊河畔に於ける斥候長としての活躍と黃村攻撃に於ける小隊長としての慧眼奮闘は

正に殊勳に該當するものである。斯かる慧敏勇敢の幹部を聖戦の初期に喪ひしことは洵に痛惜の極みである。然りと雖も氏の赫々たる功績は熾として皇軍戦史に輝き其の芳名は後世に驅はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として其の多幸を加護照覽せらるゝことであらう。

氏は戦死の日歩兵准尉に進級し次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

### 陸軍衛生准尉勳六等功六級 坂本喜兵衛

#### 忠勇慧敏の衛生下士官第一線に活躍し遂に大册河畔に玉碎す

氏は茨城縣水戸市新大工町の人にして亡父を三之助母をとくと云ひ明治三十九年四月八日に生れ妻直江との間に長男喜明を擧げた。性温和にして同情心に富み思慮周到事に當るや責任を重んじ遂げずんば息まざるの氣概を有し諸人の愛敬を受けて居た。大正十年三月水戸市高等小學校を卒業し其の後は縣廳或は高等學校に雇はれ乍ら獨學を續けて居た。大正十五年十二月徴兵として水戸歩兵聯隊へ入營し看護兵として教育を受け翌二年六月滿洲駐劄部隊要員として渡滿翌三年七月内地歸還の上衛生部下士官を志願し同年十二月三等看護長に任官した。昭和七年二月滿洲事變の爲出征し各地に轉戦して武勳を奏し同九年五月内地へ歸還し功を以て勳七等青色桐葉章を賜はり果進して衛生曹長に進級した。支那事變起るや昭和十二年八月石黒部隊に屬し第一大隊本部附として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支へ到着し同月十四日永定河畔の戦鬪に参加したが氏は第一線中隊の直後を猛烈なる敵の彈雨を冒して濁流を徒渉前進し河中に於て二名の傷者を收容し更に渡河後敵陣地前に於て狙撃せられたる狩谷少尉の收容を命ぜらるゝや時恰も兩側より

集中する彈雨を物ともせず敢然狩谷少尉を搬送收容し再び危険を冒して渡河し傷者十數名に初療を施して大隊に追急した。此の際大隊は北相各莊附近の敵を攻撃中なりしが氏は直ちに第一線に進出し第二中隊正面の傷者十二名に初療を施して之を收容し以て致命的傷者の多數を救助した。



九月十五日所屬大隊は拒馬河北岸地區に集結して居た。此の時配屬工兵小隊に負傷者を生ずるや氏は直ちに敵の狙撃下に之を後方森林内に收容して初療を加へ救助した。次で同夜第一線中隊と共に拒馬河を渡河したが忽ち左翼隊に傷者發生するや氏は夜間敵彈下を奔走して機を失せず之等傷者に初療を施し且其の後送を完了した。續いて同夜午前二時第三中隊が渡河を實施するや機敏に同方面に赴きしに同中隊方面は午前二時四十分頃より非常なる激戦となつてゐた。此の際氏は嵐の如き敵の十字火を浴びつゝ第一線を東奔西走して傷者を搜索し二十九名の多數傷者に迅速初療を施し更に敵が右翼方面に逆襲し來るや傷者の銃を執り敢然として戦線に加し群がり襲ひ來る敵を猛射して多大の損害を與へ敵は遂に退却するに至つた。

るに至つた。

九月二十二日夜所屬大隊は大册河を渡河し調山北方の敵陣地に對し夜襲を敢行したが氏は此の際大隊本部と共に敵陣地前に到達した。此の際第二中隊正面に於ては掩蓋機關銃より猛射を受け目據るべき地物もなく傷者續出するに至つた。氏は敵陣地前を横行して同中隊正面に駆けつけて傷者に初療を行ひ續いて左翼正面に於て銃創及手榴彈破片創の傷者多發せ

るを知るや速かに同方面に移動し第一編帯を實施して十數名の兵員を救助し毫も身の危険を顧みる所なかつた。然るに敵線に近づくに従ひ敵の投ずる手榴弾は宛ら敵の如く不幸其の一弾は氏の近くに炸裂し氏は左胸部に其の爆創を受けて打倒れた。然れども自己の治療を求むる事なく多發せる傷者救急に對し中隊衛生兵を勵まし指示を與へつゝ壯烈なる戦死を遂げた。

氏は犠牲的精神に富み技術亦優秀にして一隊將兵の信頼最も厚かつた。今次聖戦に参加するや行軍に駐軍に克く隊附軍醫の命令意圖を體し進んで難局に當りて衛生業務を輔佐し又戦闘開始となるや克く戦況を豫察して機敏に傷者多發の方面に行動し其の間身の危険も剣電彈雨も眼中になく唯々職責の存する所に勇往邁進し以て多數兵員の生命を救助した。寔に是皇軍衛生幹部の龜鑑と謂ふべきである。今や斯かる忠誠勇武の良幹部を喪ふ眞に哀悼痛惜の情を禁じ得ざるも氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍衛生戦史に光彩を放ちて其の芳名は後世に傳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰かれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日衛生准尉に進級し次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

## 下士官之部

### 陸軍歩兵曹長勳七等功六級 中山 定

#### 名班長。外長城線攻撃に小隊長として奮戦し惜しくも集團地雷に斃る

氏は埼玉縣北埼玉郡元和村の人にして父を善作母をサキ子と云ひ大正五年十月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性濃厚頭腦明敏にして責任觀念強く殊に親に孝行にして弟妹に優しく軍隊に入りて後も部下に對し懇切で上下の信望厚く名班長と謂はれて居た。昭和六年三月元和高等小學校を卒業したが各學年共成績優秀であつた。其の後農業に従事し傍同八年四月より元和青年訓練所に通ひ又村青年團評議員に推され團發展の爲盡瘁してゐた。昭和九年一月滿十七歳にて現役志願兵として麻布歩兵聯隊に入隊し爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同年十二月仙臺教導學校に入校翌十年十一月同校を卒業十二月伍長に任官し同十一年五月所屬部隊と共に滿洲に派遣齊々哈爾濱に駐屯同年十二月軍曹に進級した。此の間駐屯地附近の警備に任ずると同時に部下の教育訓練に従事し且同十一年八月には林甸二龍山附近同十二年一月には林甸縣下の討匪に参加して克く困難を排し危険を顧みず其の任を全うした。氏は又銃劍術及射撃に秀で夫れ／＼賞状を授けられ且輕機關銃第一種射撃徽章を附與せられた。

支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第三小隊連絡掛下士官として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。斯くて所屬中隊は到着後八月中旬に至る間天津附近の掃蕩敵情搜索並に諸種の警戒勤務に任じ其の間氏は不眠不休小隊長を輔佐して熱心積極的に其の任を完ふした。次で所屬部隊は長驅内蒙古張北に轉進し八月二十日張北南方長城線附近に進出せる敵を

撃攘して京綏線を遮断せんとするや所屬中隊は午前八時長城線の敵に對し行動を起し午後二時主陣地線上(へ)のトーチカに據れる敵に對し第一第二小隊を第一線とし第三小隊を豫備隊として攻撃前進を開始した。氏は第三小隊連絡下士官として雨下する敵弾下に克く豫備隊長と中隊長間の連絡を確保し(へ)トーチカ北方五六百メートルの臺上に於て小隊長渡邊准尉迫撃砲弾により負傷するや氏は小隊長代理として豫備隊を指揮し中隊長の意圖の如く前進し遂に中隊主力が午後七時(へ)トーチカを占領するや速かに豫備隊を提げて該地點に進出し中隊長爾後の命令を待った。然るに敵は尙長城南側第二線トーチカに據りて小銃機關銃を亂射し頑強に抵抗せるを以て中隊長は更に第二第三小隊を第一線とし引續き之を攻撃した。氏は今や待望の第一線となり夕刻より大雨に全身ズブ濡れの儘克く部下を掌握して夕闇暗き谷を越へ逐次敵に肉薄し午後八時稍過ぎ敵前卅米の稜線に進出し熾烈なる敵火を冒して外壕及長城の障礙を踏破し自ら陣頭に立ちて一斉に突入し得意の銃劍術を以て當るを幸ひ突き捲り其の數名を刺殺し其の目覺しき奮闘により遂に數十名の敵を撃退し此の陣地を奪取した。



然るに敵は其の後數次に互り奪回を企圖して逆襲し來りしが沈着剛膽適切なる指揮により其の都度之を撃退し次で小隊は更に前方一軒家の敵を掃蕩することとなり第二小隊を先頭に殘敵を驅逐しつゝ該家屋に突入遂に之を占領したが夫と同時に無念集團地雷爆發し部下十一名と共に全身に爆傷を蒙り起つ能はざるに至つた。時に午後九時にして氏は早速手當を受け收容せられて張北野戰病院を経て承德陸軍病院に入院衛生部員の手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく八月二十四日午後



二時遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。

氏や平素の名班長であり其の戦陣に臨むや又良連絡掛であり良小隊長であつた。彈雨の下積極勇敢中小隊長意圖の如く連絡を確保し其の小隊長代理となるや闇夜峻峻を克服し慘烈なる戦況の下毅然として部下を指揮し所命の任務を遂行して遺憾なかつた。是畢竟旺盛なる責任觀念盡忠至誠の發露と謂ふべきである。天氏に一層の伎倆を發揮すべき時を惜さず参戦日ならずして内蒙の華と散りしは痛恨盡きざるも生死不定は戦場の常にして而も士は百戦功なき瓦全を耻づ。氏が外長城の一戦に玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に互り皇軍戦史に輝き其の芳名は万世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 村上光徳

圓河村攻撃間俄然敵と遭遇するも沈着剛膽玉碎して之を撃退す

氏は香川縣綾歌郡川津村の人にして實父を泰助實母(亡)をアキノ養父を鐵之助養母を美嘉と云ひ大正三年五月日に生れ妻千恵子との間に未だ子はなかつた。資性温厚にして獨立不羈の志強く事に熱心にして不屈不撓の氣概を持つて居た。氏は又孝心深く同情心に富み實母の祥月命日にはいつも貧しき人に施しを爲して亡母の冥福を祈りし如き今も逸話として残つてゐる。昭和二年三月川津小學校尋常科を卒業其の在校六年間操行及成績優秀にして年々賞状を附與せられ毎學年級長又は副級長に推されてゐた。引續き丸龜中學校に入り同六年神港中學校に轉校し同七年三月同校卒業同年九月より神戸博進

社支店に入社し昭和八年十二月平壤歩兵聯隊に入營熱心勉勵して下士官候補者に採用せられ同九年十二月豊橋陸軍教導學校に入り翌年十二月卒業歸隊し歩兵伍長に任せられ十一年歩兵軍曹に進級した。氏は射撃術に長し屢々特別射撃に優勝して賞状を授けられた。尙内務班長として部下の指導頗る懇切にして寛嚴宜しきを得上下の信望厚かつた。

昭和十二年七月支那事變起るや鯉登部隊第九中隊に屬し第二小隊第一分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊



は北支に到着し七月二十七日團河村の戦鬪に際しては所屬中隊は部隊の豫備隊となり午後一時十分より行動を起し午後二時三十分より戦鬪開始せられ第一線が敵前五百米附近に達せる頃敵の銃砲弾は第二線豫備隊の位置にも頻りに飛來し死傷者を生ずる状態であつた。氏は押へ難き勇心を壓へつゝ第一線に跟随し午後三時三十分中隊長より右側方の警戒並に右翼隊との連絡を命ぜらるゝや勇躍部下分隊長を率ひて任に就き右側方に移動しつゝ常に敵情に留意し途中中隊長に有利なる報告を爲し更に右側警戒の爲適當の地點を索めつゝ前進を續けた。然るに敵は氏の分隊方面に向つて盛に銃砲弾を浴びせて

來たが氏は部下の先頭に立ちて一進一止しつゝ猛烈なる銃砲弾を冒して勇進し午後五時五十分敵の一部は俄然至近の距離に現はれ氏の分隊に猛射を注いで來た。しかし氏は聊かも動ぜず克く部下を掌握し咄嗟の際に拘はらず沈着的確なる指揮により之と應戦し敵に猛射を加へた。併し敵は我を劣勢と見て攻撃前進して來た。氏は中隊右側警戒の任務上敵の兵力は殆ど我に倍せるも斷乎之を撃接するに決し近く敵を引寄せ一齊に銃身も熔けよと猛射を浴びせた。敵は忽ち前進を躊躇し

混亂したと見るや氏は猛然突撃を令し全員突撃に移つたが無念氏は途中敵彈頭部を貫通し其の場に倒れた。部下は直ちに介抱したが氏は「お前達はしつかりやれ」の一語を遺して名譽の戦死を遂げた。併し正面の敵は我が突撃に算を亂して退却し分隊は中隊の右側警戒の任を果したのであつた。

氏の戦陣に臨むや沈着剛膽眼中敵彈なく常に泰然陣頭に立ちて部下を率ひ其の緒戦に於て俄然敵と遭遇するも沈着的確なる指揮により分隊の戦力を發揮して遺憾なかつた。是畢竟一身を君國に捧げ分隊長たる重責に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。天氏に時を借さず参戦日ならずして北支の華と散りしは痛恨盡きざるも生死不定は戦場の常にして而も士は百戦功なく瓦全を耻づ。氏僅かに一戦せしに過ぎざるも開戦勇頭奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘りて皇軍戦史を飾り芳名は千古に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

## 陸軍歩兵曹長勳七等功六級 山西喜一

### 指揮班長德州城に一番乗し重傷に屈せず血染の日章旗を翻へす

氏は兵庫縣養父郡關宮村の人にして父を安藏母をこと。養父を清藏養母をよしと云ひ明治四十年三月二十日に生れ妻きくとの間には未だ愛子を恵まれなかつた。性明朗剛毅にして豪も勞力を惜しまず克く家業に精勵し又器用にして家人の留守に龜や風呂場なども一日に仕上げて家人を驚かした事などもあつた。尙幼者を愛撫し多くの子供より慕はれ自らは草木



を植えて楽しむ等やさしき情操を兼ねて居た。大正十年三月兵庫縣福岡高等小學校を卒業し其の後は生家に在りて農業に従事し昭和三年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し下士官候補者に採用されて熊本陸軍教導學校に入校せしめられ翌四年十一月同校を卒業し次で歩兵伍長に任官し五年十二月歩兵軍曹に進級すると共に家事の都合に依りて除隊し其の退營に方りては善行證書を附與された。



支那事變起るや昭和十二年八月初旬應召長野部隊藤井中隊の指揮班員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南下した。九月十日よりの馬廠本陣地に對する總攻撃に方りては所屬中隊は右第一線大隊内に在りて馬廠河西側地域の諸要點を撃破して戰果擴張に大なる貢獻をなし其の後收退の敵を追撃して九月二十一日滄州主陣地の北方地區に進出し同日夕より二十四日午前にかけては右第一線大隊内に在りて運河地區の血戦に参加し壯烈悲惨なる情況下に赫々たる武勳を奏した。氏は其の間中隊指揮班長を輔佐し或る時は泥濘汎濫の地帯を

東奔西走して關係諸部隊に重要命令を傳達し或る時は篠つく雨の如き猛射を身に浴び乍ら所命の連絡を果たす等日夜の奮闘努力は眞に泪ぐましきものがあつた。

越えて所屬部隊は黃河北岸地區の掃蕩戰に参加したが、前記の激戰に於て所屬中隊長並に曹長相次で護國の華と散りし爲第一小隊長山口少尉が中隊を指揮し氏は亦指揮班長となり德州城に向ひ前進し十月四日より德州城の攻撃に参加した。

德州城は其の周圍に高さ三丈の城壁をめぐらし壁の上部と下層部には銃座を設けて頑強に守備して居た。此の日朝來砲兵隊の城壁破壊射撃が行はれたが未だ所望の成功を見ず又工兵の破壊班は爆破作業を行つたが敵は依然として屈せず益々我が第一線諸隊を猛射して居た。流石に勇猛なる我が歩兵隊の突撃も其の突撃成功は困難ならんかと懸念されて居た。されど七生報國に勇む中隊全員は無言のうちに関き決意を示し午前十一時より行動を初めた。損害を顧慮し疎開隊形で城壁に肉薄したが敵の銃砲火は熾烈を極め動もすれば中隊長代理と後方小隊との連絡は杜絶えんとして居た。斯くと見てとりし氏は身の危険を顧みず適時彈雨の中に連絡を確保して中隊長代理の指揮掌握を確實ならしめた。氏は中隊長代理が確實に城壁の一角を占領せば城壁上に日章旗を掲ぐべき任務を與へられて居た。今や中隊長代理を先頭に其の直後に伍長二名續いて氏の順序を以て城壁を登り初めた。勿論敵は手榴彈や小銃等を以て之を撃つたが天佑を得て遂に城壁の一角を占領するを得た。氏は城壁上に登り終るや否や敵の投げつけた手榴彈は身邊に炸裂して大腿部に致命的の裂傷を負ひ鮮血を以て城壁を彩つた。責任觀念の旺盛なる氏は重傷に屈せず巖然として立ち上がり翻翻たる日章旗を壘上に樹て之を保持して居た。憎くや其の際又一彈飛來氏は胸部中央に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。時しも夕陽地平線に没し明星しはた

く午後六時過ぎで風は蕭々として血生臭き新戰場を吹き渡つて居た。斯くて所屬中隊は氏等の尊き犠牲に依り德州城の一喬乘をなし次で城内の掃蕩戰に入り翌五日午前十時には完全に德州城を占領するを得た。

氏は志操堅確にして職責の存する所水火をも辭せざる氣魄を持つて居た。今次聖戰に参加するや選ばれて中隊指揮班員となり劍電彈雨の中に其の傲腕を振ひ又不眠不休飢渴の中に堅忍持久班員を激勵し以て所屬中隊の戰勝獲得に至大なる貢獻を與へた。寔に是指揮班員の鑑と謂ふべきであつた。斯かる有爲忠誠の士を喪ふ痛雷の情を禁じ得ずと雖も氏の赫々たる武勳は皇軍戰史に輝きて芳名は後世に轟はるべく不滅の英靈は護國の神と仰かれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加

護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵曹長勳七等功六級 齋藤公雄

#### 滿洲事變殊勲者。再び外長城線に偉功を樹て遂に陽高城の華と散る

氏は岩手縣東磐井打壁村の人にして父を政治母をキヌエと云ひ明治四十三年三月十八日に生れ妻トシヨとの間に一女ハシメを擧げた。資性實直眞摯にして責任觀念強く不屈不撓の氣概を有し業務に頗る熱心であつた。大正十四年三月折壁高等小學校を卒業し昭和六年一月徴兵として弘前歩兵聯隊に入營同年十一月滿洲事變に出動し其の間特に昭和八年三月十七日早川支隊が羅文峪附近長城線の敵を攻撃するや氏は通信手として部下四名と共に聯隊本部間の連絡に任じ最も勇敢積極的に活躍し又大隊本部前進中正面及兩側高地より猛烈なる迫撃砲彈の十字火を受け大隊本部危殆に瀕するや之と奮戦すること二時間遂に之を撃退し爾後斷崖絶壁しかも暮色迫れる頃萬難を排して通信を確保し其の斷線に當りては彈丸雨飛の間鏖戦たる山頂を踏破して之が補修を完ふし翌十八日は猛火を冒して第一線大隊まで延線し其の被覆線不足を告ぐるや敵に暴露して馬背の如き山頂を彈雨下に作業する等戰鬪慘烈の極所に立ちて剛膽沈着百方手段を盡して自己の任務を遂行し通信手の本領を遺憾なく發揚して大隊長の戰鬪指導を容易ならしめ其の拔群の武功により勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はり同八年十二月伍長に任官の上滿期除隊した。而して翌九年十二月再び現役志願を爲し採用せられて弘前歩兵聯隊に入り其の後歩兵軍曹に進級し同十一年四月麻布歩兵聯隊に轉屬五月所屬部隊と共に滿洲に派遣齊々哈爾に

駐屯警備に任じてゐた。

支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第一小隊連絡掛として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は北支に到着し先づ天津地方次で内蒙古張北附近の警備に任じたが此の間氏は克く小隊長を輔佐し特に巧なる支那語を以て一層任務達成を容易ならしめた。八月二十日所屬隊は外長城線の敵に向つて攻撃を開始した。此の時氏の所屬中隊は第一線となり午後二時より敵のトーチカに向つて攻撃を開始した。此の時



氏は第一線小隊にありて攻撃前進し敵前五六百米に達するや敵火頗る熾烈を極めし之を意に介せず勇敢機敏に活躍して中小隊長間の連絡を確保し午後七時中隊は愈々該火點に突撃を敢行した。此の時氏は小隊長と共に率先々頭に立ちて敵前の障礙を排除して勇躍敵陣地に突入忽ち敵數入を殲し奮戦の後之を占領した。續いて翌二十一日は部下十數名を指揮し協力砲兵小隊の援護を命ぜられ其の任に當つたが敵の一部は我が右側背に迂回進撃し來り氏は部下を率ひて之を邀撃し遂に之を撃退した。其の夜大隊は夜襲を決行する事となり

其の際氏は少數の兵力を指揮し一方より敵を牽制すべき至難の任務を受けたが氏は万難を排し所命の任を達成し大隊をして偉大なる戦果を收めしめた。次で二十三日所屬隊は張家口に向つて敵を追撃したが途中第六中隊が優勢なる戦の包圍を受け彈藥も既に射盡し苦戦に陥りし際氏は小隊(十數名)を指揮し之が救援を命ぜらるゝや迅速に該方面に進出し幾多の戦傷者を生し自らも左掌に受傷せるも屈せず勇猛果敢敵の重圍を破りて第六中隊に合し携行せる彈藥を補給して大に其の

志氣を作興し當日夜大隊主力の追及するまで戦闘を繼續することを得せしめた。

十月五日所屬中隊は張家口より殘敵を追ふて八日午前十一時三十分陽高城門東方三百米の地點に達した。此の時氏は中隊長より敵情地形の偵察を命ぜらるゝや剛膽機敏適切なる行動により城門に近迫し東門より南方三百米附近に約五十米に亘る城壁を泥土にて修覆せる脆弱なる部分あるを發見し直ちに歸來し中隊長に此の部分破壊して突入するを可とする旨意見具申した。中隊長は其の意見を容れ此の地點に對する突撃準備を進捗せしめつゝ更に自ら敵情地形を偵察せんと第一小隊長及氏を伴ひ午後四時東門前僅に三十米附近に在る家屋に迫り着き氏等其の土壁に直徑二寸程の小孔を穿ち其處より内部を覗き敵情を偵察中敵の狙撃せる一弾は不幸氏の視孔に命中し右眼より頭部を貫通し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は午後七時氏の偵察に基く東門南方三百米の地點より城内に突入し一番乗に奏功することを得たのであつた。

氏や義に滿洲事變に殊動を樹て今次再び戦陣に立つや連絡係としては積極勇敢に活躍して小中隊長の指揮を容易にし更に小隊長としては指揮的確敵襲の撃退重圍突破等奮戦目覺しく又斥候として重要な報告を齎し城壁奪取の端を拓く等毎戦偉功を奏し確かに滿洲事變の殊動者たるを領かしむるものがあつた。實に此の如きは一身を鴻毛の輕きに致し一意任務に邁進せる旺盛なる責任觀念と燃ゆるが如き盡忠至誠の發露と謂ふべきである。征戦中途あたら忠勇の士を喪へるは痛惜盡きざるも滿洲事變以來奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は万世不朽武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の幸先を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵曹長勳七等功六級 笹川子之太郎

勇敢なる分隊長峻峻なる南口西方高地を奪取して玉碎す

氏は福島縣石城郡泉村の人にして父を宇之介母をタツと云ひ大正元年十二月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性剛毅慧敏人格高潔にして居常盡忠の志厚く軍隊に入りて後も職務に忠實責任觀念旺盛にして上下の信頼厚く將來將校候補者として囑目せられてゐた。昭和七年三月縣立警城中學校卒業同八年一月現役志願兵として若松歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同年十二月仙臺教導學校に入校翌九年十一月同校卒業十二月伍長に任官し翌十年二月滿洲獨立歩兵聯隊に轉屬熱河省古北口に駐屯同地附近の警備に服し同年三月には可營三大小隊附近。十月及十一月には朝陽北方地區。十一年十一月には熱河省東南部地方の討伐に参加し克く其の任を完うし功により勳七等に叙せられ瑞寶章を賜はり其の間十年十二月歩兵軍曹に進級した。

支那事變起るや千田部隊第八中隊に屬し第二小隊第一分隊長として昭和十二年七月十一日勇躍出發北支に出動し七月二十八日清河鎮の攻撃に参加した。此の日所屬隊は午前八時より行動を起せしが附近一帶高粱丈餘に繁茂せる爲敵前至近の距離まで近接して攻撃を準備し午後二時より戦闘を開始した。此の時氏は第一線小隊火線分隊長として並木以東の敵に對し射撃を開始するや敵は熱地なるを以て巧に高粱畑中に自動火器を配備し我に十字火を浴びせ來るに反し我は間斷なく不明の陣地より猛射を受け爲に我が攻撃は頗る困難となり而も並木附近より來る敵弾は甚だ猛烈を極めし其の位置明かならず茲に於て氏は一般地形を觀察して敵自動火器の位置を判斷し之を撲滅すべく獨斷擲彈筒分隊の位置に潛行して自ら擲彈筒を執り射撃し尙一層有効なる射撃を加へんが爲め其の位置を推進し高粱畑前端に進出して射撃せんとするや右肩に擦

過銃創を受けた。併し氏は更に屈せず之を秘して引續き十數發の射撃を爲し遂に該敵機關銃を見事沈黙せしめ大に中隊の前進をして容易ならしめた。此の日薄暮に至るや敵は健氣にも逆襲して来たが中隊は克く之を撃退した。次で中隊長は當夜敵陣地の状況を偵察せんとするや氏は志願して斥候となり剛膽にも敵陣地の左翼後方に潛入し敵情を偵察した。然るに敵の大部は既に退却せるを知り機を失せず之を中隊長に報告し中隊は直ちに追撃を爲す事を得た。而して翌二十九日朱房に進出後も亦斥候となり圓明園正白旗附近の敵情を搜索して貴重な報告を齎らし中隊の行動を有利ならしめた。



八月十二日より南口鎮の攻撃開始せらるゝや所屬中隊は部隊の豫備隊たりしが氏の屬する第二小隊は十三日大隊主力の右方高地に増加攻撃を命ぜられ第一線に進出して當面高地上の敵を攻撃し翌十四日拂曉には南口鎮隘路東方望樓を奪取し續いて其の後方高地上の敵をも撃退した。然るに敵は泥坑南方六百米に在る峻峻なる高地上一帯に堅固に陣地を占領して頑強に抵抗せる爲爾後一氣呵成に隘路を突破して八達嶺に進出することは不可能であつた。之が爲め逐次隘路南側高地の奪取に着手し第七中隊町田分隊先づ南口西北方最高峰陣地に對し獨立突撃を敢行せるに屏風の如き岩石地なりしが爲死傷續出し僅かに其の一角を奪取せるに過ぎなかつたので氏の所屬小隊は更に之を力攻するをやめ該高地背後に向つて攻撃を開始した。然るに此の高地亦峻峻にして而も敵彈頗る猛烈を極め攻撃甚だ困難なりしも氏は率先小隊の先頭に立ちて猛火を冒し急峻なる斜面を攀登し敵陣地に肉薄し死力を盡して攻撃を續行した。しかし敵は天險を恃みて頑強に

抵抗し熾んに手榴彈を投擲して我を惱まし我亦手榴彈を以て應酬し茲に壯烈なる激戦を展開するに至つた。しかし氏は益々勇奮部下を激勵して突撃の機熟すと見るや率先々頭に立ちて敵陣に突入し遂に敵陣地を奪取することを得たるも其の際後方陣地より射撃を受け惜しくも遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏や人格高潔手腕俊秀前途有爲の幹部として囑目せられて居たが其の戦陣に立つや積極勇敢斥候としては有利の報告を齎らし分隊長としては掌握確實指揮的確或は機宜の獨斷敵を制壓し或は率先峻峻を冒して突入、常に中隊戦勝の端を拓いて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ只管幹部たる重責に邁進せる旺盛なる攻撃精神の發露にして是畢竟氏が日頃より志せる盡忠至誠の顯現に外ならずと謂ふべきである。参戦幾何もなくして北支の華と散りしは痛恨盡きざるも奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘りて皇軍戦史に輝き其の芳名は万世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍歩兵曹長勳七等功六級 岸 下利 男

分隊長敵の逆襲を撃退して左側の危険を除き惜しくも南苑の華と散る

氏は鹿兒島縣喻那郡財部町の人にして父を次郎母をシナと云ひ大正三年十月五日に生れ未だ獨身であつた。資性重厚温順にして孝心頗る深かつた。昭和四年三月財部小學校高等科を卒業し引續き財部町公民學校入校同五年三月同校を卒業したが小學校公民學校共に操行成績優等にして賞狀賞牌を附與せられた。氏は向學心に燃へ更に獨學身を立てんと其の後は

財部町役場に奉職し家計を補助しつゝ孜々として勉學を續けて居た。氏は特に剣道を嗜み居村青年の首席を占め郡競技會に於ても優勝した程であつた。昭和八年一月現役志願兵として鹿兒島歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し學術の成績優秀にして同年十二月には上等兵に進級し又射擊軍術銃劍術に秀でて就中射擊に就ては聯隊長より賞状を附與せられた。氏は下士官候補者に採用せられ同九年十一月平壤歩兵聯隊に編入十二月伍長に任官し翌十年十二月軍曹に進級した。



支那事變起るや鯉登部隊第九中隊に屬し第三小隊第一分隊長として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は北支に到着するや七月二十五日夜遅く鄆坊警備の五ノ井隊が一旅團の敵と交戦中との情報に接し二十六日午前四時列車により天津出發急遽之が救援に赴き午前七時鄆坊驛に下車直ちに展開して此の敵に對し攻撃を開始した。氏は此の時小隊の火線分隊長として敵の猛烈なる迫撃砲彈下を勇敢に攻撃前進し間もなく果敢なる突撃により敵を其の兵營より撃退し鄆坊西側に進出した。此の時氏の分隊は中隊長より兵營の掃蕩並に工兵隊の同兵營爆破掩護を命ぜらるゝや部下分隊を率ひて其の任に就き克く所命の任務を完ふした。續いて翌二十七日團河村附近の攻撃開始せらるゝや中隊は部隊の豫備隊として自ら戦はざるに敵火に曝されつゝ押へ難き勇心を壓へて前進し時期の到來を待つた。

二十八日に至るや中隊は待望の第一線となり午前五時行動を起し同八時三十分戦闘を開始した。氏の分隊は大隊の最左翼第一線として攻撃前進した。丈餘の高梁を押し分けつゝ無風且炎熱灼くが如き天候を冒して猛進恰も無人の境を行くが

如く次々へと敵營を占領し午後二時頃には遂に南苑兵營まで敵を追詰むることを得た。然るに敵は兵營周圍の高き土壁に據り且外壕を設け我が飛行機の爆撃野砲の砲撃にも怯まず頑強に抵抗した。氏は最左翼分隊長として攻撃前進間特に左翼方面の敵情に留意し屢々有利なる報告を呈して小隊長の戦闘指揮を容易ならしめ常に率先々頭に立ちて一進一止逐次敵に近迫中突如敵の一部は我が左翼に逆襲して來た。氏は聊かも動することなく克く部下を掌握し沈着適切なる指揮により之に猛射を加へて難なく之を撃退し以て我が左側翼の危険を排除し爾後引續き敵に近迫し午前十時敵前十米にまで肉薄し將に突撃に移らんとする頃敵の迫撃砲彈身邊に近く炸裂して其の破片創を受けた。併し剛氣の氏は之に屈せず自ら手榴彈を投擲して先づ二三の敵を噓し部下を叱咤激勵しつゝ愈々突入せんとするや又も胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏や擲學の秀才しかも至孝の人にして其の軍隊に入るや果進して下士官となり今次戦陣に臨むや彈雨の下率先勇敢常に陣頭に立ちて部下を率ひ殊に敵の逆襲を受くるや咄嗟の際にも拘はらず掌握確實指揮的確分隊の戦力を發揮し左軍左側の危険を排除した事は偉大なる功績である。實にかくの如きは忠孝一如一身を君國に捧げ盡るゝまで分隊長たる重責に邁進せんとする盡忠至誠の發露と謂ふべきである。征戦幾何もなくして北支の華と散りしは痛恨盡きざるも一戦玉碎名を残すは百戦功なき瓦全に優る。氏が開戦劈頭奮戦して以て樹てたる拔群の武功は千載に互り皇軍戦史に輝き其の芳名は万世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途を守護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍砲兵曹長勳七等功五級 白濱 完

急迫なる状況下に豪膽適切なる指揮を以て部隊の危急を救ふ(殊勲甲)

氏は佐賀縣杵島郡錦江村の人にして父を龜太郎母をクマと云ひ明治四十四年一月十五日に生れ未だ獨身であつた。性剛毅闊達にして不屈不撓の氣概を有し又寡黙にして情誼に厚く出身小學校への音信を缺きし事なかりしが如きは其の一例である。大正十二年三月錦江小學校を卒業し其の後長崎高等簿記學校を卒業し朝鮮在住の實兄方に同居し裁判所雇書記として奉職中現役志願をなし昭和五年一月龍山野砲兵聯隊へ入營し翌六年九月滿洲事變の爲奉天警備に就き其の後新民廳洮南鄭家屯長春錦州打虎山溝帮子等の討匪並に警備の重任を果たし功を以て勳七等青色桐葉章を賜はつた。氏は其の間下士官候補者に採用せられ六年十二月砲兵伍長に任官し翌七年十二月砲兵軍曹に進級した。馬術は聯隊切つての名騎手と云はれ數回に亘り馬術優等徽章を授けられた。滿洲事變以來舊友に對して自分は何時戰場で戦死するかも知れぬ故終世妻帯せぬと漏らして居た。

北支の風雲急を告ぐるや昭和十二年七月中旬細屋部隊第五中隊に編入せられ中隊指揮班員として勇躍北支警備の重任に就いた。當時平津地方には十數萬の支那軍駐屯し學生團便衣隊等を使喚して抗日を叫び物情騒然として情勢日々に險惡を加へ殊に宗哲元麾下の數萬は南苑を本據として傲岸不遜を極め四圍を睥睨して居た。隱忍を重ねて待機中であつた皇軍は遂に宗哲元麾下の全第二十九軍に對して徹底的の膺懲を加へるに決し氏の所屬部隊も七月二十八日午前七時五十分南苑兵營の西正面の地區に陣地占領を完了した。此の日空一面に雨雲低く垂れ事前の靜寂も薄氣味惡く四圍に漲つて居た。やがて砲聲一發濕氣を帯べる空氣を震はせて南苑上空に黒龍信號の揚るが見えた。是南苑を包圍せる皇軍の一齊攻撃の合圖で

あつた。全線に亘つて砲口火を噴き歩兵は丈餘の高梁畑を掻きわけて前進を初めた。敵亦之に應戦し小銃機關銃の亂射亂撃は宛ら篠つく雨の如く迫撃砲彈の落下炸裂は大地を震はせて爆煙と共に土砂高梁を中天に舞揚げて居た。南苑上空には我が空軍の精銳が巨大なる爆彈を投下して兵營は早くも大火災を起した。眞に是近代立體戰の戰慄が展開されたのであつた。今や南苑兵營の西南角に向へる我が第一線歩兵は萬難を排して敵前約二百米に進出した。然るに敵は巨大なる外壕を



待み土壘の銃眼陣地に據りて機關銃を猛射し爲に我が軍も損害續出する有様であつた。此の狀況を知つた所屬中隊は友軍歩兵の突撃に協力せんと午前十時稍々過ぎ敢然敵前二百米に陣地を推進せんと第二第三第四第一分隊の順序に新陣地に向つて前進を起した。敵彈下高梁畑の前進は甚だ困難であつたが中隊長は取敢へず先頭の第二分隊を指揮して逸早く銃眼射撃を開始した。續いて第三分隊は第二分隊の右方に放列を布置したが狀況頗る急を要し所屬吉富大隊長の命に依り第三分隊は立石中尉の指揮を以て別目標に對し射撃を開始した。氏は此の際砲側の準備彈藥の不十分なるを察知し速かに五、六番砲手を指揮して彈藥補充を圓滑にし以て機宜に適する火砲の威力を發揚せしめた。然るに間もなく立石中尉負傷せる爲中隊長は位置を移動して兩分隊を併せ指揮したが戰場喧擾にして中隊長の號令徹底せざるを認めたる氏は獨斷第二分隊に至り射撃指揮を執つた。折しも此の分隊では一、二、三、四番砲手悉く負傷し分隊長植木上等兵は二番砲手を兼務して奮闘中であつた。氏は分隊長と三番砲手を兼務し正確なる射撃を以て銃眼に據る敵を撲滅したが分隊員も逐次減耗し僅かに

分隊長と六番砲手のみにて射撃を繼續するに至つた。間もなく友軍歩兵は氏等の死闘に依り突撃復行に成功するを得た。然るに正午過ぎ左側方より敵の逆襲を受くるや氏は中隊長の命に依り第二分隊を指揮し猛烈なる零距離射撃を行ひ多大の損害を與へて之を撃退し中隊の危機を免がれしむるを得た。措しいかな此の際右側方より飛來せる敵弾の爲遂に致命傷を受け砲側に於て壯烈なる戦死を遂げた。其の後南苑西南角に於ける戦闘は氏等の奮闘と尊き犠牲に依り頑敵に徹底的打撃を與へて敵陣地を占領し赫々たる戦勝を獲得するに至つた。

氏は志操堅確にして思慮周密の人であつた。出征に於り家人に通信して「日頃の腕前を見せる時が來ました。貯金通帳着物書籍一切は朝鮮の妹宛に送つておきました。戦死したら分配して下さい」と決意の程を示して居た。愈々戦場に臨むや既往歴戦の體驗に基き克く所屬上官を輔佐し豪膽不撓皇軍砲兵の本領を發揮し又沈着慧敏敵襲を撃退し所屬中隊を危機より救出せるは寔に皇軍幹部の翹傑たるものであつた。今や風發叱咤の壯容に接すべくもなく痛恨哀悼禁じ得ずと雖も其の功績たるや天晴れ皇軍砲兵戦史に異彩を放ち其の芳名は永く後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戦死の日砲兵曹長に進級し次で破格にも功五級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 原 松 男

#### 連絡掛下士官彈雨の下勇敢活躍遂に馬廠攻撃の華と散る

氏は岡山縣御津郡平津村の人にして父を辰治母を政野と云ひ大正二年五月八日に生れ妻直子との間に一子武朗を擧げ

た。資性活潑事に臨み沈着勇敢諸事積極的にして責任觀念旺盛の人であつた。大正十五年三月平津尋常小學校を卒業引續き岡山關西中學校に入り昭和六年三月同校を卒業した。氏は柔道に長じ在校中早くも二段であつたが昭和七年三段に昇進した。同七年八月より岡山驛員に就職し同八年十二月徴兵として岡山歩兵聯隊に入營幹部候補生に合格し又在隊間渡滿々洲事變に参加し其の功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はり同九年十一月歩兵伍長に任官の上滿期除隊し其の後岡山驛員に復職勤務してゐた。



員に復職勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召赤柴部隊に編入遼山中隊早瀬小隊の連絡掛として同月十日勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着し八月下旬揚柳青及當城附近の殘敵を掃蕩し續いて靜海縣附近の攻撃に参加したが氏は日夜困苦を排し危険を冒して連絡の任を果し殊に八月二十二日西邊庄の攻撃に際しては所屬中隊が午後五時七里堡を出發するや泥濘膝を没し敵彈雨飛する中を物ともせず奮勵努力して夜間に於ける中小隊間及小分隊間の連絡を確保し翌二十三日午前五時四十分より所屬小隊が中隊の左第一線となりて攻撃するや敵の銃砲彈猛烈なりしも沈着克く敵情を監視して敵の機關銃及迫撃砲の位置を確かめ之を小隊長に報告して擲彈筒及輕機關銃を指導して機を失せず之を制壓せしめ又各分隊を小隊長意圖の如く誘導しかくして一進一止遂に敵前二、三十米に近迫し愈々突撃命令下るや小隊長に従ひ率先敵陣に突入し午前八時三十分中隊をして遂に西邊庄を奪取することを得せしめた。次で八月二十九日より王官屯雙樓桃家庄馬辛庄陳庄及後屯等の攻撃に参加し終始勇敢に活躍し克く連絡の任

を完ふした。

九月十日所屬部隊が馬廠攻撃に當るや中隊は決死中隊となり午後三時五十分砲兵支援射撃終了と共に氏は小隊長其他と共に四番發動艇にて陸官屯東方運河右岸に一齐に上陸した。爾後氏は敵の銃砲彈の集中下を走り小隊長意圖の如く各分隊を行動せしめ又猛火の中に終始敵情を監視し敵の重要な側防機關銃を發見しては小隊長に報告し其の命令を擲彈筒及輕機關銃分隊に傳へて之を制壓せしむる等大いに小隊の突撃準備に活躍奮闘しありしが偶々飛來した敵の一彈は氏の下腹部を貫通し續いて右大腿部に迫撃砲彈命中し遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏や多年に亘る柔道の鍛練に心身自ら定まる所あり其の戦陣に臨むや彈雨の下沈着身の危険を顧みず連絡の任務に活躍し又屢々重要な敵情を確かめ小隊長の戦陣指導を容易にし小隊の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて斃るゝまで其の任務に邁進せんとする旺盛なる責任觀念の發露にして畢竟盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。參戰幾何もなくして馬廠河畔の華と散りしは痛惜に堪へざるも奮闘活躍して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史を飾り其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇國の前途を守護すると共に一家の守護神ともなり愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 大内 軍 夫

中隊指揮班連絡長有ゆる困難を克服して其の任を完うし遂に四黨口に散る

氏は兵庫縣加古郡高砂町の人にして父を喜太郎母をてると云ひ明治四十三年五月十三日に生れ妻子との間に未だ子はなかつた。資性正直眞面目にして寡黙殊に不屈不撓の氣概を有し責任觀念強く衆の愛敬を受けてゐた。大正十四年三月神戸市湊川小學校高等科を卒業引續き兵庫縣立工業學校建築科へ入校し昭和三年三月同校卒業直ちに神戸市大塚工務店に務め昭和五年十二月幹部候補生として姫路歩兵聯隊に入營同年十一月歩兵伍長に任官の上滿期除隊し再び前記工務店に勤務してゐた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊第四中隊に編入中隊指揮班員として同月十日勇躍征途に就いた。北支到着後所屬部隊は二十四日天津南方約十里三間房の敵を攻撃すべく天津を出發南下した。然るに途中道路泥濘所々水流道路を洗ひ諸兵殊に車輛部隊の行軍は頗る困難を極めしを以て所屬中隊は二十四日は大行李の掩護に二十五日は砲兵中隊の支援に任じ二十六日午前十一時過目的地に達した。次で翌二十七日は午前二時四十分出發山本部隊長指揮下に小庄西方約二里の四黨口に向つて前進を起した。附近一帯は丈餘の高梁畑なるのみならず敵は馬廠川の堤防を缺潰せる爲大氾濫となり道路は水中に没ししかも此の日曇天咫尺を辨ぜざる闇夜なりしが所々深さ胸に達する水中を數時間に亘り難行軍を續け午前八時頃漸く四黨口に達した。單身行軍するさへ容易ならざる此の状況に於て當日中小隊間の連絡班長たりし氏はあらゆる困難を克服し奮闘努力中小隊間の連絡に全力を傾倒し以て終始中隊長の掌握を確實ならしめ支障なく目的地に到達することを得せしめた。而して大隊が四黨口に集結を終る



や直ちに馬廐川堤防の敵陣地を攻撃するに決し四黨口南端に展開して午前九時三十分より攻撃を開始した。中隊は大隊の第一線となり泥濘を冒し水濘を越へ高粱畑を押し分けつゝ攻撃には頗る不利なる地形なるにも拘はらず一進一止敵に近迫し遂に敵陣地前三百米に達した。敵は馬廐川堤防に頗る堅固に陣地を構築し之に各種火器を配備し我が近迫に乗じ俄然熾烈なる十字火を浴びせ來り忽ち我が死傷續出するの狀態となりしが氏は彈雨と地形の困難とに屈せず一意動もすれば斷絶せんとする中小隊間の連絡に努め中隊長の戦闘指揮を容易ならしめつゝ躍進を重ね遂に敵前百米附近に達し此の線を確保しつゝありし時恰も午後三時頃大隊長より第四中隊は四黨口に前進し該地を確保すべしとの命令に接した。此の頃敵火は一層猛烈を極め起つ者必ず撃たるゝ狀況なりしに拘はらず氏は率先挺身身を失せず勇敢に活躍して迅速確實に中隊長命令を第一線各小隊長に傳達し滞りなく重き使命を完ふして歸來せしが午後四時無念胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の征旅に就き選ばれて中隊指揮班連絡長となるや不屈不撓萬難を排して奮闘努力以て連絡上至難なる暗夜の悪路を克服して夜間に於ける中隊長の掌握を確實ならしめ殊に敵前至近の所に於て敵彈最も激烈の下に率先勇敢克く其の重任を完ふし中隊長の指揮掌握を容易にし中隊戦力を十分に發揮せしめて遺憾なかつた。蓋しかくの如きは一身を君國に捧げて其の任務に斃れんとする盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏や參戰間もなく馬廐川の華と散りしは惜しみて尙餘りあるも生死不定は戰場の常にして一誠殉忠は期の長短を以て厚薄を論ずべきではない。寧ろ士は百戰功なく瓦全を耻ぢ一戰玉碎して名を残すに如かず。氏が馬廐の一戦に樹てたる拔群の武功と職責完遂の示範とは萬世不朽赫々として皇軍戦史に輝き其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又一家一族の將來を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 梶 生 二

優秀なる分隊長敵火を牽制して小隊の突撃を容易にし趙連庄の華と散る

氏は兵庫縣加古郡荒井村の人にして父を龍吉母をセンと云ひ大正三年八月二十七日に生れ未だ獨身であつた。資性活潑友情厚く衆の愛敬を受けてゐた。而して其の職に當るや責任觀念旺盛其の部下を率先躬行大事に臨みては剛毅勇敢であつた。昭和四年三月荒井小學校高等科を卒業其の後二年間農業に従事し傍農工補習學校に入り後期二年を修了して同六年四月野田醬油株式會社關西工場工員として勤務し同時に同工場青年訓練所に入所し同九年十一月其の課程を修了した。昭和九年十二月徴兵として近衛歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し學術の成績優秀にして翌十年十二月上等兵に進級し十一年四月には伍長勤務を命ぜられ六月善行證書及下士官適任證書を附與せられて輝かしく除隊した。尙氏は銃劍術に秀で在隊間劍術第一種徽章を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召沼田部隊野條中隊に編入八月五日歩兵伍長に任官第一小隊第二分隊長として同月十日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後八月十六日小站に於て所屬隊が午前一時頃約四百の敵の來襲を受けし際氏は勇敢機敏克く分隊を指揮して奮戦し又八月二十一日潮宗橋の戦闘に於ては右第一線小隊内に在りて彈雨の下率先々頭に立ちて分隊を指揮奮戦し小隊の戦闘に寄與する所大なるものがあつた。

八月二十七日所屬隊は趙連庄の敵を攻撃する事となり野條中隊は第一線となつて正午より攻撃前進を開始した。敵は堅固に陣地を設備し掩蓋銃座に據りて猛威を逞ふし加之迫撃砲彈を亂射し來りしが中隊は雨下する敵彈下を一進一止敵を制壓しつゝ逐次敵に近迫し遂に敵前二百米にまで達することを得た。然るに敵の抵抗頗る頑強なりしが爲其の日は突撃する

に至らず此の線に散兵壕を掘開して占有地を確保し近く敵と相對峙して徹宵翌日の攻撃を準備した。翌二十八日再び攻撃を開始し猛烈なる我が砲兵掩護射撃に附隨して散兵壕の線より攻撃前進を起すや敵火は益々猛烈を極めしも氏は之を物ともせず率先々頭に立ちて分隊を率ひ躍進又躍進遂次敵に肉迫せしが敵前至近の距離に達するや運河北岸及小流西岸よりする敵火は一層猛威を逞ふし小隊の前進は意の如くならず頗る困難に立至つた。かくと見たる氏は敵の猛射を意とせず剛膽



にも身を乗り出して巧に遮蔽せられたる視え難き敵陣地の状況を沈着仔細に視察し現に我が突撃發起を惱ましつゝある敵の位置を確認し的確なる射撃指揮を以て之に有効なる射弾を浴びせ其の射撃効力を最高度に發揮せしめて突撃を準備しつゝありしが其の際無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし氏の適切勇敢なる指揮と行動とにより大いに敵火を牽制し中隊は間もなく敵陣地に突入して之を奪取することを得たのであつた。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS) 氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS) 氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS) 氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 竹内 義  
中隊長戦車の優秀砲手毎戦偉勳を樹て、惜しくも忻縣城外に散る

氏は長野縣水上内郡茅井村の人にして父を雅樂亮母をせつと云ひ大正四年九月二十一日に生れ未だ獨身であつた。資性温順誠實にして事に臨み剛膽沈着上下の信頼厚かつた。昭和五年三月村立小學校高等科を卒業引續き青年學校に入り同年十一月御親閱に際しては選ばれて代表として参加し同十年には旗手を命ぜられ同十一年には模範生として村青年學校後援會長より表彰せられた。昭和十一年一月徴兵として習志野戦車聯隊に入營同年五月支那駐屯戦車隊に轉屬天津に駐屯して警備の任に服してゐた。氏は入營以來軍務に精勵諸般の成績優秀にして同年十二月上等兵に進級し翌十二年五月伍長勳務を命ぜられ十月下士官候補者となり今次征戰中實に戦死の二日前十一月一日伍長に任官した。氏は特に戦車上の射撃に長じ其の伎倆優秀なるの故を以て隊長より賞状を附與せられた。氏の入營するや母に對して何時戰場の露と消ゆるも悲まざるやう暗に固き決意を披瀝し又渡支に際し父より日章旗を送り寄せらるゝや是非とも立派に御旗の下で死にたいと返信し一死報公の覺悟凛乎たるものがあつた。

昭和十二年七月七日蘆溝橋事件突發し逐日形勢惡化するや天津駐屯の氏は福田戦車部隊中島中隊に屬し中隊長搭乗戦車みかさ號の車長兼砲手として出動し七月二十六日夜廣安門の戦闘を始め二十八日には南苑及西五里店の戦闘に参加した。當時氏の戦車は部隊の先頭を前進し馬村附近に於ては既設陣地に據る敵機關銃數個を破壊して敵の心膽を寒からしむると

共に南苑附近の退路を遮断し西五里店附近に於ては蘆溝橋停車場高庄小屯部落に據る敵に對し克く有利なる目標を捕捉して之を射撃し敵を永定河右岸に撃退した。次て八月十二日には午前七時十分より戰鬥に加入し率先南口馬家庄を占領同日午後六時より南口鎮西方高地に在りて我に危害を與へつゝある敵を撲滅或は制壓して歩兵の攻撃を容易ならしめ十四日午後居庸關に向ひ前進するや途中抵抗する敵を踏破して歩兵の前進を誘導し就中午後六時玉米泉北端附近に進出するや居庸關より猛烈なる射撃を受けしも之に屈することなく其の正確なる射撃により敵の砲兵機關銃等を制壓撲滅し翌十五日は「ガリク」山の敵に背射を行ひ歩兵の該高地占領を容易ならしめ十八日は騰山精勤章山の敵に對し有効なる側射斜射を行ひ歩兵をして該高地を奪取せしめかくして二十三日居庸關占領まで晝夜の別なく銃砲火を蒙り又毎夜の如く夜襲を受けしも頑として玉米泉を守備して歩兵の交通路を確保し居庸關の占領を容易ならしめた。叙上の如く積極敢爲なる職責の遂行と正確にして機宜に適する射撃の効果とは兵團の山岳突破に貢獻せし所甚大であつた。



十一月三日未明所屬隊は小河上を出發忻縣に向ひ途中所在の敵敗殘兵を撃破しつゝ前進し午前十時半忻縣北側城壁に據れる敵を攻撃し之を沈黙せしめて南門に向ふや此の附近は壕、凹道、突堤、階段等地形錯雜し戰車の行動容易ならず動もすれば行動不能に陥る狀況であつた。操縦手は注意に注意して前進したがみかさ號は遂に一戰車壕に墜落した。當時敵は城壁上より熾に我に向つて射撃して居たが氏は率先勇敢に車外に躍り出で悠々敵を尻目に戰車を誘導して居たが忽ち敵彈

を受けた。併し氏は之に屈せず流るゝ鮮血を押へつゝ尙も誘導を繼續し遂に該戰車を壕外に進出せしむるや直ちに戰車に搭乗せんと砲塔に飛び乗りたる利那無念又もや頭部に敵彈を受け戰車みかさ號を血に染めて遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし氏の尊き犠牲的行動によりみかさ號を障害より免れしめしのみならず爾餘の戰車をして途中何等の故障もなく南門を攻撃せしめ敵を潰走せしむるに至つた。

氏の郷に在るや青年の模範と謂はれ出でゝ軍隊に入るや一死奉公の志固く戰車獨特の射撃に全魂を傾倒し其の伎倆は實に中隊隨一であつた。果して其の戰陣に立つや選ばれて中隊長戰車の砲手となり毎戰率先偉功を奏し近代機械化部隊の威力を發揮して敵を席巻し遺憾なかつた。殊に忻縣城攻撃に於ける剛膽沈勇の行動に至りては鬼神も舌を捲くの感あらしめた。實にかくの如きは燃ゆるが如き盡忠至誠の發露と謂ふべく征戰半ばにしてあたら忠勇の士を喪へるは痛惜盡きざるも奮戦力闘以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は万世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 寺口一義 斥候及分隊長として奮戦偉功を奏し滄州李家寨に玉碎す

氏は兵庫縣美藪郡志染村の人にして亡父を市松母をまさと云ひ大正二年八月十一日に生れ妻きみとの間に一子禮子がある。資性質實剛健磊落にして人情厚く義侠心に富み村内一般より信愛せられて居た。其の軍隊に在るや又部下の信頼厚く

事に處し責任觀念強く且思慮周密機敏であつた。昭和二年三月志染小學校高等科を卒業し爾來農業に従事し昭和八年十二月徵兵として姫路歩兵聯隊に入營熱心軍務に精勵して學術の成績優秀特に武技に秀で中隊長及大隊長より射撃賞狀各一回聯隊長より銃劍術賞狀一回を附與せられた。入營年の十二月滿洲に派遣せられ警備討伐等に任じ功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はり翌九年五月内地に歸還し十年十月歩兵科下士官適任證書及善行證書を附與せられて輝かしく除隊した。



支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊第六中隊に編入第三小隊第三分隊長として同月十日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後九月二日より十二日に亘る間津浦沿線各地に轉戦し毎回彈雨の下率先分隊を率ひ常に的確なる指揮により分隊の戦力を發揮し小隊の戦闘を有利ならしめた。殊に馬廠附近の戦闘間九月九日南海將校斥候に屬し倪莊子附近の敵情並に水濠の偵察に任ずるや當日午後十一時出發せしに暗夜地形は素より方位の判定すら困難なるに加へ敵は夜間にも拘はらず各方面より亂射し來り斥候が敵に近づくに従ひ其の十字火は益々熾烈となり前進頗る困難となつた。しかし氏は猛火も夜暗も更に屈せず勇躍挺身して剛膽にも敵前僅に五十米に横はれる水濠に達し仔細に其の幅、水深、兩岸攀登の能否、更には其の前方敵陣地の状況等苟くも夜襲に關係ある事項は悉く之を偵察して斥候長に有利の資料を提供し奮闘努力すること八時間午前七時に至り漸く其の重任を完うして歸還した。其の後に於ける大隊の夜襲計畫は實に此の偵察の結果により立案せられ遂に見事奏功するに至つたのであつた。

九月十三日より愈々滄州附近の攻撃開始せられ所屬安永大隊は二十日滄州陣地直前の要點李家婁の陣地奪取を命ぜられた。此の日大隊は午前七時より行動を起し逐次敵陣地に近接して正午頃展開直ちに攻撃前進を開始した。敵は幅六七米の水濠を繞らし堅固に設備せる陣地に據り我が攻撃前進と同時に小銃機關銃迫撃砲等各種火器を以て猛射を浴せ來りしが此の時大隊の第一線たりし所屬中隊は一進一止しつゝ逐次敵に近迫した。此の間氏は克く部下を掌握し的確なる射撃指揮により敵を制壓しつゝ率先々頭に立ちて躍進又躍進勇敢に前進せしが敵に近づくに従ひ敵火は益々熾烈を極め死傷續出するに至りしも之に屈せず益々肉薄し午後七時頃突撃の機熟するや水濠に丸太梯子を架けて渡り猛烈果敢に突入り遂に敵陣を奪取した。此の陣地は敵の本陣地直前三四百米に在りて敵の爲には頗る重要な陣地なりし爲氏は陣地奪取後其の恢復攻撃を顧慮し敵本陣地よりする猛烈なる銃砲彈の下に於て直ちに部下を掌握激勵し速かに敵の設備せる掩體を改修して之に備へ敵情を視察中果せる哉敵は間もなく我が左翼方面に逆襲して來た。氏は機を失せず隣接分隊と協力して的確なる射撃指揮により之に猛烈且有効なる射撃を加へ多大の損害を與へて其の逆襲を阻止しつゝ奮闘中無念敵の一砲彈は氏の身邊近く落下炸裂し氏は兩手及背部に其の破片創を受け其の場に倒れた。氏は傍の部下に「大丈夫だ」と叫びしも重傷にして出血多量の爲自ら其の死期迫るを知り「もう駄目だ後を頼む」と云ひ 陛下の萬歳を口にしつゝ間もなく午後七時五十分壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏の戦陣に臨むや斥候としては剛膽周密克く其の重任を果し分隊長としては率先部下を率ひ掌握確實、指揮迅速、周到なる處置及戰機の看破等悉く戰勝の因を爲して遺憾なかつた。實にかくの如きは死を鴻毛の輕きに致し全力を傾倒して分隊長たる重責に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏や參戰幾何もなく護國の華と散りしと雖も其の樹てたる拔群の武功は萬世不朽皇軍戰史に輝き其の英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると同時に遺族

殊に愛兒の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級 關 武 一

#### 指揮班員として張新庄夜襲に寡兵克敵の逆襲企圖を挫折す

氏は兵庫縣飾磨郡置鹽村の人にして父を伴太郎母をこみすと云ひ明治四十五年三月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温良にして至孝而も沈着剛毅進取の氣象に富み責任觀念強く郷黨の模範青年と謂はれて居た。大正十五年三月古知小學校高等科を卒業し昭和七年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營同年四月滿洲事變に出動哈爾濱濱河海林等の警備に任じ其の間奉天東部、三姓方面、榆樹方面及東支東部線等の討伐に参加し同七年九月上等兵に進級した。而して翌十月岩附近の戦闘に於て戦傷を負ひ入院せしも一ヶ月半にして快癒し爾後八面通樹嶺の警備に任じ昭和九年四月内地に歸還し翌五月下士官適任證書並に善行證書を附與せられ輝かしく滿期除隊し更に功により勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召沼田部隊森本隊に編入中隊指揮班員として八月十日勇躍征途に就いた。北支戦線到着後八月下旬には潮宗橋趙連庄小王莊九月には丁莊青縣興濟鎮李家寨馬落坡等の各戦闘に参加し克く困苦危険を冒して奮闘活躍して中隊長を輔佐し其の指揮掌握を容易ならしめた。殊に八月二十七日以降は選ばれて中隊給養掛となり物資缺乏の環境に介在して有ゆる困難を克服し寢食を忘れ粉骨碎身以て中隊の給養を圓滑ならしめた。

九月二十三日沼田部隊が張新庄に對し夜襲を決行するや一同之を最後と軍旗に訣別したる後午後十時豆店を出發敵陣地

に向ひ行動を起し午前零時三十分頃夜襲隊形を整へ氏の所屬中隊は第二線突破部隊として接敵前進を開始した。敵は其の陣地を數線に構へ其の第一線陣地は又數線より成る散兵壕地帯を構成し其の前方には幅五米深さ三米水深一米の水濠を其の後方には深さ四米の有刺鐵條網を繞らし又第三線陣地は連續せるトーチカを設備し其の前方には更に幅五米深さ一米の水濠を繞らし極めて堅固に構築してあつた。當夜は月あれども空は曇りて周圍は暗くしかも我が軍前進を起すや敵は篠つ



く雨の如く猛射し來り早くも中隊内數名の死傷を生ずるに至つたが氏は之を物ともせず中小隊間の連絡に努め中隊長の指揮掌握を確實ならしめつゝ勇敢に前進し遂に敵に肉薄し第一線部隊に續いて午前一時三十分第一線陣地に進出し尙も前進して第二線の壕に達するや此の時各約一個大隊の敵兵東西より中隊に向ひ逆襲し來つた。中隊指揮班幹部たりし氏は中隊長の命により他の指揮班員を指揮し壕を傳ふて前進し來れる敵約四百五十名に對し猛烈なる射撃を浴びせて之を縱射し幸ひ敵は縱隊々形なりし爲之に多大の損害を與ふることを得殊に夜暗の爲敵は狼狽し遂に其の逆襲企圖を放棄して退却するに至つた。中隊長は此の機會に躊躇する事なく敵の第二陣地に突入すべく區處し氏等指揮班員は何れも手榴彈を手にし氏は傍の西脇上等兵と協議の上十名餘りの指揮班員一團となり敵の掩蓋機關銃座に突入せんとして立ち上るや西脇上等兵先づ敵彈に斃れ間髪を入れず氏も亦頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。此の夜襲に氏の中隊は多數の死傷者を生じたが氏等の奮闘と尊き犠牲に依り遂に堅固なる張新庄陣地を奪取したのであつた。

氏や郷に在りては至孝出で、戰陣に臨むや曩には滿州事變に勇戰武勳を樹て今次亦戰陣に立つや指揮班の中堅として將た又給養掛として不屈不撓積極活躍克く中隊長を輔佐し其の指揮を容易にし其の戦力を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に張新庄の陣内に於て寡兵衆敵に向ふや大敵たりとも懼れず沈着剛膽克く敵の出鼻を挫きて其の企圖を放棄退却するに至らしめし如き赫々の戦果は嘆賞に値すべく之實に一死盡忠至誠の發露に外ならずと云ふべきである。氏や聖戰中途にして滄州の華と散りしは惜しみて尙餘りあるも其の披群の武功は萬世不朽皇軍戰史に輝き其の英魂亦不滅に生きて神靈尙も皇國及一家の前途を守護して已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍砲兵軍曹勳七等功六級 齋藤孝平

#### 險難なる山西舊關の戦闘に彈藥補充を完うして職に殲る

氏は福島縣伊達郡小國村の人にして父を源四郎母をヤイと云ひ大正四年十月八日に生れ未だ獨身であつた。性温良素朴にして義務心厚く又事を行ふや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。昭和五年三月掛田高等小學校を卒業し其の後家庭に在りて家業に従事する傍小國第一實業公民學校へ通學し同年三月同校を卒業した。翌十一年一月徵兵として高田山砲兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して精勳章を附與せられ又下士官候補者として豊橋陸軍教導學校へ分遣せられ熱心學術科に勉勵し良成績を擧げて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬原隊へ復歸し直ちに貴島部隊國分中隊に編入せられ聯隊段列第一小隊第二分隊長と

して勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬北支に到着京漢線に沿ひ晝夜兼行の強行軍を續け人馬の疲勞其の極に達したが氏は堅忍不撓常に人馬を勞はり指揮亦的確にして率先難局に當り難路を突破して十月初旬漸く石家莊附近の戦線に到着するを得た。當時石家莊附近に於ける彼我の態勢は滹陀河を挿んで相對して居たが同河は河幅約三百米水深約七八尺に達し渡渉困難であり加之敵は二十數萬の兵力を以て蜿蜒三十里に亘る長蛇の陣を占領して居たので何人も石家莊陣地



がたやすく陥落するものとは考へなかつた。殊に支那軍の精銳を誇る中央軍は山西方面から娘子關舊關附近の天險地帯に進出し石家莊の西側地區を脅威し得る關係に在つたので戦況推移の豫測を許さぬ状態にあつた。然るに我が軍は石家莊の西北方高地帯たる平山縣方面より猛攻撃に移り急速なる戦果を收むるに至つたが所屬部隊は此の方面の戦線に参加を命ぜられ得意の山岳戦に其の戦闘力を發揮し友軍歩兵の戦闘を容易ならしめた。此の間氏は克く小隊長の命令に基き敵の猛射を意とせず巧に地形を利用し機敏に各隊に彈藥を補充して所屬各砲兵隊の戦闘力發揚に遺憾なからしめた。

所屬部隊は其の後附近の戦果擴張に協力し更に山西方面の天險陣地に對する攻撃に参加するに至つた。十月二十日所屬砲兵部隊は舊關北方の堅壘に對し攻撃準備中であつた。此の時氏は某大隊に彈藥補充の命を受け井陘附近を出發し險峻なる山道を越え敵の彈雨を冒して補充の任務を完うし歸路に就いたが午後三時三十分敵の猛烈なる側射を受け無念にも胸部に貫通銃創を受け其の場に打倒れ早速野戦病院に收容せられ手厚き治療看護を受けたが十一月五日惜しくも護國の華と散

つた。

氏は陣中より兩親に宛て「戦禍に憐む支那人民の憐れさをつくづく感ぜられますと共に帝國臣民の幸福と有難さを痛切にわからして貰ひました、父上様を始め皆様益々銃後の護りを堅くして頂き度う御座います、私もお國の爲一身を賭し御奉公申上ぐる覚悟です」と通信し又受傷後の手紙には「井陘の西方約五里の山地戦で右胸部貫通の銃創を受け保定病院へ入院致しました、神經を切断されましたか全身を動かす事は困難ですが大分良くなりました、一日も早く癒つて第一線に出たいと祈つて居ります、萬一の事がありましたら同郡出身の吉田上等兵に頼んで置きましたから聞き合はして下さい」とあつた。實に氏の面目と決意は此の信書にも窺はるゝ如く參戰以來勇往邁進君國を思ふの外に餘念もなかつたのである。今や斯かる忠勇義烈の士を費ふ痛惜の情轉た禁ずる能はずと雖も氏の尊き功績は皇軍戰史を飾りて其の芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日砲兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍工兵軍曹勳七等功六級 市川 森

優秀なる無線通信下士官正太線南方天險地帯に奮戦して玉碎す

氏は埼玉縣浦和市上木崎の人にして父を八百藏亡母をいらと云ひ明治四十一年四月十五日に生れ妻とめとの間に養女とよ子がある。性剛毅淡泊にして責任觀念強く事に當るや熱誠眞摯不屈不撓の氣概を持つて居た。氏は又謹嚴にして酒を好まず人と争はず宏量人に接し又早くより分家し慈愛温情克く一家和平の中樞となつて居た。大正十二年三月浦和高等小學

校を卒業し直ちに電氣學校へ入學し同十四年十月同校本科を卒業し其の後は東京電氣株式會社浦和出張所工事課へ入社し克く業務に精勵して其の手腕を認められ上下一般の信望を受けて居た。昭和四年一月徵兵として中野電信聯隊へ入營して優秀なる成績を挙げ翌五年十一月には善行證書並に下士官適任證書を附與せられ輝かしく歸隊除隊した。歸郷後は再び前記の會社に入り越ヶ谷派出所工事課主任として良成績を擧げて居た。昭和七年九月演習召集に應召し成績優秀にして特に

工兵伍長に進められた。



支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召野澤部隊八隊小隊に編入機工長の榮職を命課せられ勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬北支へ到着九月二十一より涿州保定會戰に参加するに至つた。氏は涿縣の戰鬪司令所に到着し直ちに無線電信所を開設したが最も重要時期に無線通信の通信機能良好ならず一同憂慮の眉をひそめて居た。氏は故障の發見處置に心血を注ぎ遂に之を回復し爾後各部隊の通信連絡圓滑となり氏は發動發電機の運轉に任じ以て我軍通信の命脈として至大なる役割を完了した。

涿州保定の會戰に勝利を得たる我が軍は機を失せず追撃前進に移つたが氏の所屬小隊も九月二十七日谷部隊と共に行動を起し幾多の河川を徒渉し或は膝を没する泥濘を冒し馬匹を勞はり助け部下要員を激勵して難行軍を続け屢々戰鬪司令所と共に友軍砲兵陣地の近くに進出し敵砲彈の雨飛する下に或は敵機の空襲下に毅然として軍機電報の送受信に或は發電機の運轉に優秀なる技術を以て無線電信隊の卓越せる通信能力を發揚した。

十月下旬所屬小隊は元氏に於て各種動物に依る駄載編成に改編されたが氏は克く之が編成に盡力し同月二十八日元氏出發昔陽支隊に配屬せられ其の前衛の後尾に續行した。此の支隊は正太線の南方地區の元氏—贊皇—内長城—昔陽道を前進し進路上の兵匪を掃蕩し正太線方面の敵の側背を脅威し以て正太線沿道を前進する主力方面の作戦を容易ならしむべき任務を課せられた居た。前進するに従ひ山岳は愈々險はしく海拔幾千尺の巒峯は雲表に聳へて進路に横はり一山を超えては千仞の谷に下り身の毛もよだつ斷崖は右に左に起伏彎曲千變極りなき天險を踏破し隨所に正確機敏なる通信連絡を全うし十一月二日には前衛の後尾に續行したが午後二時頃前衛司令官は黄岩底部落の北方約一里に當る西界都に於て黄岩底の西北高地に有力なる敵あるを知り直ちに攻撃前進に決した。所屬小隊は支隊命令に基き西界都を出發し地物を利用し彈雨を冒しつゝ黄岩底部落到り圍壁内に遮蔽して居た。午後四時頃當面の敵は漸次退却の兆あるにも拘はらず氏等の村落には刻一刻熾烈なる銃砲彈飛來し小隊は相次で死傷者を生ずるに至つた。小隊長は彈痕其の他の徴候に依り敵情を判斷するに射彈の大部は小隊の左側背にある高地上の敵より猛射し來るを知つた。此の敵は正午頃我が前衛に驅逐せられしもので密かに此の高地に潜伏し時機の到るを待つて居たのであつた。小隊長は憤然として先づ通信器材の保護を確實ならしめ敢然此の敵に應戦した。然るに敵は優勢を恃み益々迫撃砲弾を猛射すると共に小隊にも逆襲し來り此に慘憺たる苦戦となつたが全員能く團結奮闘し遂に數百名の敵に大損害を與へて之を撃退するを得午後六時過ぎ贊皇城に入城するを得た。氏は本戦闘に於て克く兵員を指揮し最も勇敢に奮闘したが無念迫撃砲の全彈を受け戦友數名と共に壯烈なる戦死を遂げた。

氏は故國を離るゝの日妻に書を寄せて「我が決意益々固し、萬一の事があつてもあわてるな、武人の妻たるを忘れるな、自愛せよ、とよ子の教育を頼む」と認めてあつた。蓋し氏が面目と念願とを要約せるものと謂ふべく愈々戦線に起つや所屬小隊の重鎮として克く其の俊敏を發揮し百折不撓軍の命脈たる重要通信を確保し赫々たる武動を奏した。然るに人畜未

踏の天險地帯に不測の敵と交戦奮闘し遂に玉碎せるは痛恨哀悼禁じ得ざる所である。されど氏の勳功は天晴れ皇軍戦史に輝きて其の芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日工兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍工兵軍曹勳七等功六級 野村 重吉

#### 彈雨を冒して蘇州河畔に挺進し敵情監視中遂に職に殉る

氏は京都府熊野郡下佐濃村の人にして父を惣右衛門母をよしと云ひ大正六年十一月二十六日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして志操堅確孝心特に深く又同情心に富み信仰心厚かつた。曾て兵庫縣青倉山へ參詣の折未知の同行老婦人が眼病に悩むを見て汽車自動車を初めとし萬端の世話をなしたる如き又青年訓練所の生徒として京都へ修學旅行を行ひしが友人の一名は身に纏へる古オーバーを耻ぢ途中に遺棄し新らしきものを求めんとせる際氏は勿體なしとて若干の代價を以て之を譲り受け久しく之を着用して平然たりしが如き幼にして既に一般青年と異なる所があつた。昭和七年三月高等小學校卒業後は家庭に在りて家業を手傳ふ傍村立の青年訓練所へ通學し熱心勉勵入營時に及んだ。昭和十年十二月現役志願兵として京都工兵隊留守隊へ入營し熱心軍務に精勵して良成績を挙げ翌十一年十一月工兵上等兵に進級し十二年七月陸軍工兵學校へ分遣を命ぜられた。

支那事變起るや昭和十二年九月原隊に復歸し其の後吉野部隊北村中隊に編入せられ勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊



は九月下旬上海戦場に到着し直ちに陳家宅附近に於ける軍道の構築作業に従事するに至つた。當時戦場は江南特有の霖雨降り続き道路泥濘膝を没し諸兵種の行動は言語に絶する困難を極めて居た。氏は分隊長として克く部下を指揮し率先範を垂れ一意作業の完成に邁進し所屬中隊の任務遂行に甚大なる貢献を興へた。所屬中隊は十月三日より更に顧家宅（大場鎮の北方約六吉米）附近の軍道構築、同部落南側の架橋作業及軍砲兵の爲陣地進入路の構築を命ぜられたが特に架橋作業の



初期には敵銃砲弾の飛來猛烈にして氏等の身邊は常に危険界に曝されたが氏は毅然として部下を督勵し自ら難局に當りて迅速確實に作業の進捗を圖り以て中隊の任務遂行に貢献せる所至大であつた。

十月二十六日敵陣地の樞軸たりし大場鎮の陥落するや敵の大部は總崩れとなり南方蘇州河方向に潰走した。皇軍は直ちに猛追撃に移りしが此の際所屬中隊は大場鎮の西南方約五軒に在る楊家橋附近に於ける軍道の構築並に蘇州河畔魏家宅（楊家橋南方約六吉米）附近に架橋すべき新任務を受け二十七日より作業に着手した。當時戦場は混沌として所屬中隊の所在地附近は晝夜間断なき敵の銃砲弾に曝されて居たが氏は克く部下を督勵し熱心奮闘架橋材料の蒐集に工事の指揮に銳意作業の進捗を圖り翌月四日には蘇州河畔北新江鎮附近の敵情偵察の爲部下七名を率ゐる所屬小隊長と共に楊家橋―魏家宅道を南進し魏家宅附近に差しかゝるや敵は迫撃砲を以て此の地域を猛射し其の射弾は氏等の前後左右に物凄く落下炸裂して居た。やがて蘇州河に近づくに従ひ小銃機關銃弾も益々烈しく飛來したが豪膽不敵の氏は躍進又躍進魏家宅の東側に在りし既設散兵壕に飛込んで敵情を視察し以

て小隊長の偵察を輔佐した。こゝは敵前僅かに八十米にして友軍歩兵さへ未だ到着して居なかつた。依て所屬中隊長は氏等の危険を案じて午前十一時半頃自ら氏等の位置に來り後退の命令を下したが之と相違して氏は敵情監視中敵の狙撃する所となり惜しくも頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の豪膽不撓の行動に依り所屬中隊は爾後に於ける架橋作業の計畫に貴重なる資料を得延いて蘇州河敵前渡河戦團成功の一素因を成すに至つた。

氏は幼時より修養を積み軍隊教育に依つて涵養し得たる崇高なる職責観念は愈々其の天稟の徳性を玉成し上下の信頼特に厚きを加へて居た。今次聖戦に参加するや百難に遭遇するも堅忍持久克く之を排除し慘烈なる銃砲弾を浴ぶること驟雨の如く又百雷落下の状況下にも毅然として部下の志氣を鼓舞し以て一意任務に邁進し克く皇軍工兵の眞價を發揚した。寔に是皇軍幹部の鑑たるものであつた。今や此の有爲忠誠の士を喪ふ眞に痛惜を禁じ得ざるも氏が累次の功績たるや天晴れ皇軍戦史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は出征後十月二日を以て工兵伍長に任官したが戦死の日更に工兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍衛生軍曹勳七等功六級 坂本吉胤

難局に傷者を救護し遂に天津南方小王莊の苦戦に散華す

氏は兵庫縣佐用郡中安村の人にして父を丈吉亡母をたけのと云ひ大正五年一月二十七日に生れ未だ獨身であつた。性温

良率直にして孝心深く克く家業を手傳ひ情誼に厚く諸人の愛敬を受けて居た。昭和五年三月中安小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて農業に精勵する傍中宗小學校補習科に通學し同八年三月同校を卒業續いて同村青年訓練所に入所し約二ヶ年間の課程を終了し同十年一月現役志願兵として姫路歩兵聯隊へ入營し看護兵としての教育を受け同年七月には衛生下士官候補者に採用せられて所要の教育を受け昭和十一年十二月三等看護長に任官した。氏は常に忠實熱誠良成績を擧げ屢々精勵章を授けられ又所屬中隊長より表彰状をも附與せられた。



支那事變起るや沼田部隊安永大隊本部附として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着し天津南方運河地區の掃蕩戰に参加するに至つた。八月二十一日所屬大隊は潮宗橋附近の敵陣地攻撃の目的を以て早朝行動を起し午前十時半頃より戰鬪を開始したが敵の陣地前には運河横はり其の北岸地區一帯は高粱畑にして而も連日稀なる豪雨に浸水地帯と化し泥濘膝を没し我が軍の行動は極めて困難であつた。敵は堅固なる既設陣地に據りて頑強に抵抗し我が第一線には遺憾ながら續々死傷者を生ずるに至つた。氏は大隊本部の位置に於て傷者の處置看護に任じて居たが第一線傷者の收容困難と見るや進んで第一線に到り猛烈なる敵の彈雨を冒して傷者の搜索收容に任じ適確迅速に傷者の收容救急業務を遂行するを得た。

超えて八月二十七日所屬大隊は小王莊附近の敵陣地を攻撃する目的を以て午前七時行動を起し氏は大隊本部と共に前進し午前十一時頃小王莊北方約五百米の地點に到着した。此の時敵は既に運河の堤防を決潰し陣地前一帶の畑地を沼澤地と

化せしめて我が軍の行動を不可能ならしめたる爲敵方に通ずる凸道を前進するの外はなかつた。此の凸道は路幅僅に五米内外にして剩へ所々路上に阻絶濠を設けて水を通じ愈々其の障礙の度を増強して居た。我が第一線たる第八中隊は一部は舟に依り主力は本道上に散兵壕を設けて敵を制壓しつゝ勇敢に前進を續けた。併し正面の陣地及側方家屋を占領せる頑敵の猛射する十字火の爲見る／＼死傷者續出するに至つた。而も附近には衛生部員もあざりし状況なりしを以て氏は戰友の忠言をも容れず敵の猛射を意とせず單身挺進して傷兵に應急手當を施し續いて次の傷兵を抱き起して負傷部を處置せんとする一刹那右前方より飛來せる敵彈の爲氏は右肩部より左側腹部にかけ貫通銃創を受けた。責任觀念燃ゆるが如き氏は苦痛を忍びて尙此の傷兵を看護せんとしたが出血甚だしく遂に其の場に尊き人柱となつた。眼前に此の有様を眺めた將兵は心からなる感謝を捧げ暗涙に咽びつゝ氏の冥福を祈つたとの事である。

氏は平素より崇高なる責任觀念に燃え其の兵員一同に對する温情の迷る所晝夜を論ぜず毫も勞苦を惜しまず傷病兵を勞はり爲に一隊將兵の信頼は特に厚かつた。今次聖戰に参加するや行動の自由を許さざる浸水地帯に而も文字通り敵彈雨飛の状況下に生死を超越し第一線に出でゝ活躍し幾多傷者の危急を救護して遂に兇彈に玉碎した。蓋し熱烈なる盡忠報國の士にして初めて能くし得る所眞に皇軍衛生下士官の龜鑑と謂ふべきである。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖も其の赫々たる武勳は皇軍衛生戰史に光彩を放ちて芳名を不朽に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途特に北支戰線に活躍中の長兄茂准尉の武運に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日衛生軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 伊藤茂太郎

#### 輕機彈藥手每戰奮闘其の職責を完うし惜しくも大名攻撃に散華す

氏は茨城縣久慈郡黒澤村の人にして母をキクと云ひ大正三年十一月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性渾厚にして謹直業務には頗る熱心勤勉であつた。昭和三年三月黒澤村町付小學校高等科一年を修了し昭和八年一月現役志願兵として水戸歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優良選ばれて歩兵學校教導聯隊に分遣せられ上等兵に進級し次で滿洲に派遣せられ北滿の警備に任じ其の動功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はり同十年十月滿期除隊した。其の後は警視廳消防署に勤務し其の精勤振は一般の模範と謂はれて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黒部隊第四中隊に編入第二小隊第六分隊輕機關銃第三彈藥手として同月二十七日勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は北支に到着するや永定河拒馬河の戰闘を経て九月二十一日大冊河西方高地の敵を夜襲した。此の時所屬隊は第一線となり堅固に設備せる陣地よりする敵の猛射を冒して勇敢に敵陣に突入し午前四時三十分其の陣地の中央突角を占領し敵に多大の損害を與へて之を撃退し其の後十月十一日には早朝石家莊を出發し京漢線路に沿ひ元氏に向ひ敵を猛追撃し途中午後三時頃敵の大軍に不期遭遇し午後四時頃展開して攻撃前進を起すや各所に激戰展開せらるゝに至り氏も亦第一線火線分隊内にありて奮戰し群がる敵兵の中に銃剣を揮つて數回の突撃を敢行し其の都度敵に甚大の損害を與へて之を撃退しつゝ猛追撃を敢行した。

十一月十日大名附近の戰闘に際しては所屬中隊は部隊豫備として攻撃前進せしが午前十一時頃第一大隊の右に増加して敵の退路を遮斷すべき命を受け勇躍敵の左側背に向ひ行動し午後一時頃より戰闘を開始した。此の際氏は輕機彈藥手とし

て篠つく雨の如き敵の猛火の下に活躍して終始銃側の彈藥を補充し其の射撃に滞滯なからしめ且常に身の危険を顧みず敵情に留意して屢々有利なる報告を分隊長に致し分隊をして適時的確なる射撃目標を捕捉して射撃せしむる等積極的に活躍しかくして一進一止勇敢に攻撃前進して敵に近迫中無念腹部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。しかし氏の勇敢なる行動と尊き犠牲とにより中隊は敵側背の包圍を完成し敵に多大の損害を與へて之を撃退することを得た。



並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 伊藤 万市

名射手敵將校を射殺し奮戦遂に漳河々畔に玉碎す

氏は長野縣上伊那郡西箕輪村の人にして父を喜市母をすずよと云ひ大正四年十月二十六日に生れ未だ獨身であつた。性温厚寡黙にして至誠且犠牲的精神に富み不言實行上下の信望厚く衆人の愛敬を受けて居た。昭和五年三月西箕輪小學校高等科を卒業し爾後父を助けて農業に従事し傍青年訓練所に通ひ昭和十年三月其の課程を終了し翌十一年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營日夜軍務に精勵努力し其の成績優秀にして同年十二月上等兵に進み特に銃劍術及射撃に長じ優等徽章を授與せらるゝ事二回翌十二年七月善行證書を附與せられて歸休除隊した。

支那事變起るや除隊早々の氏は翌八月應召遠山部隊に編入關中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。所屬隊は北支に到着するや直ちに豪雨泥濘飢渴の難行軍を續けて永定河畔に進出し九月十四日同河南岸一帯に堅固に陣地を占領しありし敵を攻撃した。此の時氏の大隊は當初豫備隊であつたが攻撃の進捗に伴ひ軍旗を捧じて永定河を渡河し第一線に進出して勇猛果敢に敵陣に突撃し遂に其の陣地を奪取した。續いて敵を追撃し十六日には琉璃河畔頭鎮の敵陣地を一蹴し二十一日夜には大世河の敵前渡河を敢行して對岸黃村附近の堅壘を力攻し激戦の後之を撃破した。此の間氏は有ゆる危険困難を冒し連日連夜勇戦奮闘して克く其の任を果し小隊の任務達成に大なる貢獻を爲した。

黃村附近の敵を撃破せる所屬部隊は息つく暇もなく敵を追撃して保定方向に前進したが二十三日所屬中隊は尖兵中隊となり追撃中富昌屯附近に於て退却せし敵一部の抵抗を受けるや中隊は直ちに展開して攻撃した。此の時氏は疲勞困憊に拘らず第一線火線分隊に在りて迅速機敏に行動し有效なる猛射を浴びせて敵の機關銃を撲滅した。斯くて中隊は引續き敵を

急追し殘敵を掃蕩しつゝ保定に向つた。保定は二十四日我が軍の有に歸し所屬隊は該地に兵力を集結し爾後の攻撃を準備した。

所屬部隊は九月二十九日より約一週間に亘り漳沱河畔の敵陣地に對し攻撃を準備した。此の間氏は偵察斥候となり危険を冒して敵陣地に接近し勇敢機敏に行動して敵情地形を偵察し有益なる情報を擧げた。次て十月八日より愈々渡河攻撃を開始せらるゝや氏は第一線にありて率先渡河を決行し勇猛果敢に攻撃前進し小銃手として克く其の任を全うし所屬部隊の戦勝に寄與せし所大なるものがあつた。斯くて所屬隊は石家莊、元氏及順德を経て漳河畔に敵を壓迫し十月二十日同河南岸地區西保障の敵陣地攻撃の爲前進した。此の日先遣の田鎮大隊は勇敢に對岸の西保障附近に挺進したが優勢なる敵の逆襲を受けて苦戦に陥り所屬大隊は之が増援を命ぜられ同夜半水深胸に達する漳河を渡河し敵の抵抗を打破しつゝ其の附近の最も重要地點たる西保障東南方高地に向ひ急進し遂に之を奪取した。此の時氏の所屬中隊は右第一線たりしが該高地を奪



取するや爾後に於ける攻撃の據點たらしむべく同高地の陣地構築に着手した。敵は此の頃より奪回攻撃を企て拂曉には山砲迫撃砲機關銃を以て集中火を浴びせて來た。氏の所屬小隊は當初中隊の豫備隊として工事に従事したる後待機しありしが敵の近接に伴ひ第一線に増加された。第一線進出を今や遅しと待ちありし氏は勇躍して所命の線に進出し毎發必中の良射手として得意の狙撃により先づ敵の指揮官と覺しき將校を噓して敵の心膽を寒からしめ續いて次ぎ次ぎに敵を射殺し優

秀なる伎倆を發揮しつゝあつた。併し敵は優勢を恃んで益々近接し戦闘愈々激烈を加へたが中隊は克く堅忍して敵を至近の巨離に引き寄せ全火力を集中して一舉に大打撃を與へ敵を震駭動搖せしめ將に突撃に轉ぜんとするや敵の一手榴弾は轟然として氏の身邊近く落下炸裂し氏は腹部に爆創を受け幽かに 天皇陛下の万歳を奉唱しつゝ壯烈なる戦死を遂げた。敵は尙翌二十二日朝に至るまで執拗にも攻撃四回に及んだが氏等の尊き犠牲と中隊長以下の一致團結不屈不撓の大奮戦に依り其の都度大損害を受けて撃退せられ遂に其の企圖を放棄するに至つた。

氏の聖戦に参加するや突破戦線實に百數十里戦ふこと七回其の間有ゆる困苦缺乏を克服し幾度か敵前渡河を敢行し毎戦勇猛果敢に敵の彈雨を冒して力戦奮闘し又特に銃劍術及射撃の名手として戦場の花形との賞讃を受け所屬小隊の任務達成に貢献する所甚大であつた。實に此の如きは一死皇國の爲斃るゝ逸戦はんとする盡忠至誠の顯現にして軍人の龜鑑と謂ふべきである。斯かる忠誠勇武の士を聖戦中途に喪へるは痛恨哀悼の極みである。然れども氏の樹てたる累次の勳々たる武功は燦として皇軍戦史に輝き其の芳名は千古に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂ることであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(TM)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 市邊 庄 治

#### 武技優秀の輕機射手平定攻撃に奮戦力闘して柏木井溝に散る

氏は大阪府北河内郡殿山町の人にして亡父を鶴松母をツルと云ひ大正二年二月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性

温順誠實にして業務に熱心終始一貫表裏なく諸事積極的にして責任觀念旺盛の人であつた。又居村諸會合には必ず出席し社會公共の爲盡し郷閭の模範であつた。昭和二年三月牧野高等小學校を卒業同八年十二月徴兵として平壤歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術成績優秀にして上等兵に進級し特に武技に長じ射撃に於ては中隊長より三回師團長より一回銃劍術に於ては大隊長より三回聯隊長より二回の賞状を附與せられ同十年六月善行證書を授けられて歸休除隊し其の後は家業に従事し同十二年三月より大阪市住友電線製造所に入社勤務してゐた。



支那事變起るや昭和十二年八月應召森本部隊第四中隊に編入第一小隊第二分隊輕機關銃射手として同月十九日勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は北支に到着し九月五日より同月十四日まで良郷附近の戦闘に同月十五日より二十七日まで涿州保定の會戰就中賣店鎮の戦闘に同月二十八日より十月十二日まで石家莊及滄陽河附近の會戰就中靈壽附近の戦闘に参加し此の間或は輕機射手として奮戦し或は一週間以上に亘る飢餓を冒しての連續強行軍に自ら輕機を擔ふて疲勞の色も見せず又屢々斥候に選ばれて活躍する等常に積極的に行動して克く其の本分を完うした。

十月十日我が軍が石家莊を攻略するや所屬部隊は山西省山岳地帯に作戦する事となり正太鐵道に沿ひ西進し其の際最も難關たる娘子關の後方退路を遮斷すべき任務を以て飢餓と峻峻を冒して大行山脈の山地を前進し十月二十六日娘子關西南方地區に於て完全に敵の退路を遮斷した。同時柏木井溝附近の高地を占領せる敵は娘子關附近より退却せる敵と相合し窮

鼠却つて猫を咬む状態となり、遂に一大激戦を展開するに至つた。同日午後零時三十分所屬中隊は柏木井溝一軒家高地の占領を命ぜられ直ちに攻撃前進に移り、峻峻を登り逐次敵に近接した。然るに敵の占領せる同高地は此の附近に於ける最要地なりしが爲敵は頑強に抵抗し雨か霰の如く我に猛射を浴びせ來つた。此の時氏は第一線小隊の火線分隊内にありて猛火の下沈着正確其の優秀なる射撃技能を發揮し逐次敵に多大の損害を與へつゝ勇敢に躍進又躍進し午後二時三十分敵前約百米附近にまで近迫して銃身も溶けんばかりに敵を猛射し、ついに小隊突撃せんとするや其の火力を最高度に發揚して小隊の該高地に向つてする突撃を容易ならしめた。而して小隊が高地に突入するや敵は正面のみならず兩側面より十字火を浴びせ來り爲に中隊長を始め死傷續出せしが遂に之を占領した。然るに間もなく敵は此の高地を奪還せんとし衆を恃んで逆襲して來た。此の時小隊の最右翼にありし氏は速かに之を發見し危険を冒して之を射撃するに有利なる地點に進出し、慘烈なる戦況の下剛膽沈着群がり來る敵に猛射を浴びせて多大の損害を與へ遂に敵は多數死體を遺棄して退却し中隊は同高地を完全に占領することを得たが氏は其の射撃中午後四時半腹部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。而して中隊は氏等の奮戦と尊き犠牲とにより午後五時には更に金龍山の一角をも確保することを得た。

氏は在隊間武技特に優秀にして心身修養鍛練の結果は武徳自ら備はる所があつた。今次召されて戦陣に臨むや彈雨の下剛膽沈着其の優秀なる伎倆を發揮し而も慘烈なる戦況に屈せず機宜の獨斷と目覺しき奮闘とにより衆敵を撃退し中隊をして高地確保の端を得せしめた。實にかくの如きは一身を君國に捧げて輕機射手たる重責に邁進し斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。聖戦中途にして山西の華と散りしは痛惜に堪えざるも奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き芳名は万世に武人の華と謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷲勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 市川毛三夫

#### 大册河黄村の血戦に決死彈藥補充を行ひ部隊の危機を救ふ

氏は長野縣南佐久保郡前山村の人にして亡父を利一郎母をそめじと云ひ明治四十三年二月八日に生れまだ獨身であつた。性温厚にして情誼に厚く一面剛毅果斷の性格を兼ね具へ事に當るや熱誠眞摯遂げずんば已まざるの氣概を持つて居た。大正拾年三月郷里の尋常小學校を卒業後農蠶學校に入學し大正十二年三月同校を卒業し其の後は家庭に在りて家業に従事する傍青年訓練所に入所し昭和五年三月其の課程を修了し翌六年六月臺灣歩兵第二聯隊へ入營し熱心軍務に精勵して兵精勳章を附與せられ翌七年十一月善行證書を授けられ歸休除隊となつた。歸郷後は陸軍造兵廠名古屋工廠庶務課に勤務し誠實熱心業務に服し上司及同僚間の信頼を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召遠山部隊長澤機關銃中隊に編入せられ彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月上旬北支に到着し同月十四日永定河畔に敵前渡河を敢行して南岸一帯の大軍を撃攘し更に南泊附近の敵陣地を一蹴して猛追撃に移り十七日夜敵は豪雨を働いて逆襲に轉じて來たが氏は克く分隊長の指揮下に勇敢機敏に射手と協力して猛射を浴びせ敵に多大の損害を與へ物の見事に之を潰亂敗走せしめ其の後平漢線の西側地區を一日平均實に十里の快速度を以て一舉大册河畔に敵を壓迫した。大册河は河幅約百米水深一米以上にして敵岸に近づくに従ひ深さを増し一米六十にも達する處ありて而も敵岸近く水雷を敷設し堤防には機關銃小銃部隊を配置し部隊の間隙には地雷を埋設し更に其

の後方地帯には奥深く数線の堅壘を前後左右に葦布し廻らすに鐵條網水濠を以て各陣地は相互關連して銃砲彈の十字火を指向し得る如く完全なる防備を整へ北支に於ける最後の抵抗線として必死の防戦を企圖して居た。所屬部隊は敵陣地の一箇鎗たる黄村附近の敵陣地を奪取すべき命を受け所屬小隊は齋藤中隊の戰闘に協力を命ぜられ二十一日夜十二時より友軍機關銃の掩護射撃下に敵前渡河を開始する事になつた。此の夜中秋の月照り渡りて晝を欺き已むなく晝間攻撃に準じ疎開



隊形を以て前進するに決したが氏等は勇躍濁流に飛び込めば待ち構へて居た敵は銃口に火を噴かせつゝ疾風の十字火を浴びせ來り又迫撃砲彈の炸裂する水柱は千等の身邊に林立して彌が上にも凄慘なる光景を呈した。併し豪膽不敵の氏は毫も之に怯まず濁流に首迄洗はれながら猛然として對岸に取りつき射手に協力して正面より逆襲し來れる部隊に猛射を浴びせて之を撃退し續いて掩蓋機關銃に火力を集中して之を沈黙せしめ茲に確乎たる據點を確保せしめた。然れども兵力の優勢を恃む敵は更に新手を替へつゝ執拗にも幾度か逆襲して來た。氏等は正確迅速なる射撃に依り悉く之を撃退しつゝ攻撃陣地を進めたが優勢且頑強に抵抗する敵兵の爲氏の配屬中隊は其の包圍を受け熾烈なる十字の銃砲火を浴びて分隊長橋詰伍長は重傷を負ひ銃手相次で倒れ苦戦に陥つた。此の苦境に當り彈藥缺乏せるを知れる氏は敵彈雨飛の中に奮然彈藥補充に任じ一箱を銃側に運び更に補充に赴かんとする際一彈飛來右足に貫通銃創を受け又左足に破片創を受け其の場に打倒れた。所屬部隊は氏等の尊き犠牲に依り其の後周圍の敵を粉碎し二十二日午前九時頃には黄村附近一帯の堅壘を奪取するを

得た。氏は其の後收容の上後送され大阪陸軍病院に入院し手篤き治療看護を受けたが九月二十六日傷狀革まり當時の配屬中隊長齋藤大尉分隊長橋詰伍長其の他戰友の後を追ひ護國の華と散つた。

氏は純真寡黙沈勇の人今次聖戰に参加するや健脚部隊として驍名を馳せたる遠山部隊に屬し幾多の辛酸を克服して疾風迅雷大冊河畔に殺到し堅壘楯比の難局に身を投じ克く皇軍機關銃の卓越せる威力を發揚して部隊の危機を救ふこと數度而も決死彈藥補充に任じて玉碎するに至つた。寔に是皇軍精兵の龜鑑と云ふべきである。今や斯る忠勇義烈の士を喪ふ痛惜禁ずる能はずと雖も氏の功績は皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 池上交一

優秀剛膽の分隊長屢々偉功を樹て柏木井溝の山岳戰に散る

氏は岡山縣津山市西今町の人にして父を源治母をしかと云ひ明治四十四年二月二十三日に生れ妻貞子との間に正、文治の二子を擧げた。資性濃厚實直しかも剛膽にして孝心深く家業には極めて熱心創意に努むる等郷閭青年の模範と讃へられ町内青年團團長に推され團の向上發展に盡瘁してゐた。大正十二年三月津山尋常小學校を卒業引續き津山商業學校に入り昭和三年三月同校を卒業し其の後は家業たる菓子製造業に従事してゐた。而して小學校に於ては優等並に精勤賞を受け商業學校には一番にて入校し各學年成績優秀にて級長又は副級長に推されてゐた。昭和七年六月徵兵として龍山歩兵聯隊

に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして翌八年四月上等兵に進級し六月には伍長勤務を命ぜられ同年十一月善行證書及下士官適任證書を附與せられて輝かしく歸休除隊した。其の後は家業の傍在郷軍人會津山西分會の會計を擔當し分會の爲貢獻せる所多かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森本部隊藤永中隊に編入第三小隊第三分隊長として同月十九日勇躍征途に就いた。

北支戦線到着後九月五日より十四日までは良郷附近の戦闘に同月十五日より二十七日までは涿州保定の會戰就中賣店鎮の戦闘に同月二十八日より十月十二日まで石家莊滄陽河附近の會戰就中靈壽附近の戦闘に何れも參加したが氏は分隊長として率先垂範部下に對し頗る親切にして部下又信服し爲に分隊の團結鞏固加ふるに指揮的確にして之等各戦闘には克く分隊の威力を發揮し又靈壽の戦闘に於ては切に希望して斥候と成り危険の地に活躍して有利の報告を齎す等克く其の任を完ふした。



十月下旬所屬部隊は山西省平定の攻略を命ぜられ殊に難關たる娘子關の後方退路を遮斷すべき任務を以て飢餓と峻峻を冒して大行山脈の山地を前進し十月二十六日娘子關西南方地區に於て完全に敵の退路を遮斷した。然るに柏木井溝附近の高地を占領せる敵は娘子關より退却せる敵と相合し窮鼠却て猫を咬むの状態となり茲に一大激戦を展開するに至つた。同日午後零時三十分所屬中隊は柏木井溝一軒家高地の占領を命ぜられ直ちに攻撃前進に移り峻峻を登り逐次敵に接近した。敵の占領せる同高地は此の附近に於ける最要地なりしが爲敵は頑強

に抵抗し雨か霰の如く我に猛射を浴びせ來り爲に第一線は死傷續出するに至つた。此の時中隊の豫備たりし所屬小隊は第一線に増加を命ぜられ第一線兩小隊の中間に進出し氏は其の分隊長として猛火の下率先々頭に立ちて部下を率ひ前進又前進して午後二時三十分敵前約百米附近に近迫した。嚙て突撃の機熟し突撃命令下るや氏は克く部下を掌握し分隊の陣頭に立ちて敵陣地に突入し敵は手榴弾を投擲し青龍刀を揮つて抵抗せるも勇敢に接戦格闘の後同地の敵を撃退することを得た。然るに高地上に進出するや敵は正面のみならず兩側面より猛烈に十字火を浴びせ來り之が爲我が死傷續出するに至り藤永中隊長戦死し小隊長亦傷つきて起つ能はざるに至つた。かゝる惨烈の間に氏は沈着克く部下を叱咤激勵し列兵の一部を割きて敵の側防火器を制壓せしめ中隊爾後の前進を容易ならしむべく努めつゝありしが敵は我が損害多大と見るや一旦占領せられたる陣地を奪還すべく衆を待みて廟の後方より逆襲し來つた。かくと見たる氏は猛烈なる敵火を冒して群がる敵中に突入し縦横無盡に突き捲り遂に敵を撃退せしが其の際敵の一弾左胸部を貫通し其の場に倒るゝに至り嚙て收容せられ保定兵站病院に入院し衛生部員の手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく十二月五日遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。而して本戦闘に於て中隊長以下戦死四小隊長以下負傷二十七名を出したるも氏等の奮戦により同日午後五時には金龍山の一角を確保することを得たのであつた。

氏の戦陣に立つや死生を顧みず進んで難局に當り斥候長として將た又分隊長として率先々頭に立ちて部下を率ひ彈雨の下剛膽勇敢而も指揮的確掌握確實にして分隊の戦力を十分に發揮して遺憾なかつた。實にかくの如きは一身を君國に捧げ幹部たる重責に邁進し斃れて後已まんとせる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。聖戦中途にして山西の華と散りしは痛惜に堪へざるも奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は萬世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に愛兒の前途に尊き加護佑助を垂れ其の遺志繼承を照覽して已



まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 池垣高市

#### 滄州會戰中難局に奮闘し遂に姚官屯血戰の華と散る

氏は兵庫縣安栗郡山崎町の人にして父を作太郎母を光と云ひ大正元年十一月二十一日に生れ未だ獨身であつた。性温良着實にして孝心深く常に責任を重んじ不屈不撓の努力家であつた。大正十五年三月高等小學校を卒業し其の後は清水製材所大阪支店に勤務し入營時に及んだ。昭和八年一月現役志願兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し同年二月滿洲事變臨時派遣部隊に屬して渡滿し水曲柳崗及小城子附近に移駐して拉賓線の掩護並に附近の警備に任じ同年十月下旬内地へ歸還し功を以て勳八等に叙せられた。氏は在營間克く軍務に精勵し兵精勳章を二回、擲彈筒射撃優等賞状を一回銃劍術優等賞状を三回附與せられ又滿期除隊時には善行證書を授けられ輝かしく歸隊した。歸郷後は再び入營前の會社に就職し大に其の手腕を認められ大阪支店長として拔擢を受け配下職工よりも厚き信頼を受けて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月月上旬應召長野部隊篠原中隊に編入せられ第三小隊小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支に到着、降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南進し九月九日より十日にかけ先づ馬廠本陣地の西北鎖鑰と稱せられたる小王莊流河鎮の一堅壘の奪取に所屬中隊は第一線の中堅中隊として活躍し次で其の西方要點丁莊の堅壘を席卷して驍名を轟はれた。氏は其の間泥濘汎濫地帯を物ともせず不眠不休の疲労に耐へ敵の彈雨を介意せず沈着

豪膽克く正確なる射撃を以て敵を制壓し所屬中隊の任務遂行に甚大なる貢獻を與へた。

所屬部隊は敗退せる敵を急追し同月二十日滄州陣地の一角たる高官屯を占領し以て人合庄以南の敵主陣地に對する攻撃を準備した。滄州附近の敵陣地は津浦線方面に於ける最後の抵抗線として二年有半の歲月と多數の人員材料を使用し外國將校の指導下に近代的防禦陣地として難攻不落の堅壘と豪語して居た。即ち其の主陣地は人合庄北側の水濠を前線とし後



端は概ね東花園姚官屯部落の各南端を連ぬる線に亘る約三千米の奥深き陣地で其の第一線陣地は人合庄附近に第二線陣地は東花園北側より姚官屯西側地區に配置せられ其の間三線の大水濠を設け更に鐵條網交通壕は蜘蛛の巣の如く張廻はされトーチカ及掩蓋陣地は宛ら櫛の齒の如く並べてあつた。所屬大隊は中央第一線となり氏の中隊は第八中隊と共に大隊の第一線中隊として二十一日午後六時行動を起し夕間に紛れて人合庄北側の水濠に近づき午後八時より水濠の通過を敢行した。それと察した對岸の敵兵は嵐の如き猛射を浴びせて來たが氏は分隊長と共に素早く對岸に取りつきて確乎たる足場を

作り附近要點の敵を射殺し人合庄部落への突撃を準備した。午後九時頃突撃號令が響き渡るや氏は率先分隊長に隨ひ眞一文字に部落前線の敵壘に突入し得意の銃劍術を以て突きまくつたが部落内の頑敵は死物狂の抵抗をなし徹宵掃蕩戰を續けた。小癩にも敵は三方より十字の銃砲火に膚接し午後十二時及午前一時の二回に亘り潮の如く殺到し部落の奪回を企てた。此の際味方は大隊長以下多數將兵の死傷者を出したが氏は堅忍不撓克く奮闘を續け二十二日朝遂に附近の頑敵を撃破して

部落南端を確保した。此の日は實に約二千米を突破して第二陣地の第一水濠の北側地區まで前進したが二十三日は朝來猛射撃を受け攻撃前進意の如くならず午後六時頃より攻撃再攻に決した。大隊は既に第一線陣地の激戦で多數の將兵を喪ひ前面の敵狀を眺むれば第一第二水濠の距離僅かに二十米第二水濠の後方十米には一面に鐵條網横はり其の後方附近には各種の重機關銃及迫撃砲が或は掩蓋下に或はトーチカ内に青白い火を噴きつゝ我が前進を阻止して居た。午後九時頃左右に連なる兩大隊は夫れ／＼攻撃奏功し敵は氏の大隊正面の既設陣地に遁入し彌が上にも所屬大隊に猛射を注いで來た。所屬大隊長は茲に悲壯の決意をなし午前四時を期し突撃すべき事を命令した。折柄陰曆十七日の月冴え渡り決死の將兵等を照らして居た。氏等は最後の猛射を要點に集中して敵を壓倒し瞬間水濠鐵條網を乗り越えて敵陣地の一角を占領した。氏は負傷せる我が分隊長を輔けつゝ更に次の要點を奪取すべく手榴彈の投擲に膚接し虎豹の如く突入する一刹那頭部に敵手榴彈の爆創を受け壯烈なる戦死を遂げた。斯くて所屬大隊は午前五時敵の全陣地を突破し同九時完全に掃蕩を終り君ケ代の喇叭吹奏裡に壘上高く日章旗を翻へした。所屬中隊は本戦團にて中隊長以下約百名内外の死傷者を出したが生存者は天を拜し地に跪ぎ我が上官战友の尊き遺骸に取りすがりて萬感胸に迫りすゝり泣いて居たとの事である。

氏は誠實にして前途有爲の士今次聖戦に参加するや一切の私事に超越し義を山岳の重きに置き難局中の難局に直面して神色自若自己の職分を全うして赫々たる戦勝の礎石となつた。眞に是皇軍精兵の鑑であつた。今や斯かる忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜を禁じ得ずと雖も不朽の功績は皇軍戦史に輝きて其の芳名は後世に轟はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 石神寅男

#### 京漢沿線各戦團に奮戦偉功を樹て遂に元氏攻撃に郝村に散華す

氏は茨城縣行方郡麻生町の人にして父を丑藏母をうめと云ひ大正三年一月七日に生れ妻キチとの間に未だ子はなかつた。資性温厚にして實直不屈不撓の精神に富み事に臨み積極勇敢であつた。又業務には熱心勤勉にして近隣の風評良好であつた。昭和三年三月麻生小學校高等科を卒業し同七年一月現役志願兵として水戸歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして上等兵に進級し同八年十月には所屬隊と共に滿洲に派遣せられ克山北山鎮附近の警備討伐に任じ翌九年五月内地に歸着滿期除隊し其の功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黒部隊第六中隊に編入第一小隊第二分隊小銃兵として同月二十七日勇躍征途に就いた。斯くて所屬隊は北支に到着し九月十四日永定河附近の戦團に参加した。此の時氏は大隊の左第一線中隊の火線分隊内にありて敵彈の下永定河の濁流を渡河し逐次勇進しつゝ有効適切なる射撃を加へ敵陣地に近迫して勇猛果敢に敵陣に突入し中隊の陣地占領を容易ならしめ爾後追撃に當りては疲勞に屈せず困難なる地形を克服して拒馬河畔に進出した。而して翌十五日所屬中隊は大隊豫備として暗夜敵陣下を強行渡河して拒馬河右岸に進出し十六日大隊の右第一線となりて前日來極力我が渡河を妨害し頑強に抵抗を持続せる北相附近の敵に對し攻撃を開始した。此の際氏は第一線に在つて勇敢に一進一止敵陣地に向ひ勇進し敵に近迫して愈々突撃に移るや勇敢に敵陣に突入して奮戦し引續き急追撃に移るや飢餓と惡路を克服して逐次敵を席卷し大冊河畔に進出した。次で同月二十二日該河附近の戦團に於て所屬隊が石頭村附近の敵陣地を攻撃するや氏は砲煙彈雨の間克く沈着剛膽絶えず有效なる射撃を爲しつゝ敵前三、四十米の距離に近迫し午後零時二十分

小隊突撃に移るや分隊長と共に敵の掩蓋機關銃の右側方より突入して之を占領した。其の後九月末より十月上旬に亘る保定より涿沱河に到る追撃間所屬中隊は岩倉支隊に配屬せられ工兵の作業に協力し師團の追撃路を開拓し次で十月十日には涿沱河の渡河戦闘に参加した。

十月十一日石黒部隊は早朝石家莊を出發し京漢線路に沿ひ元氏に向ひ敵を急追し午後三時過ぎ敵の大部隊と遭遇し同四

時其の攻撃を開始するや氏は中隊の右第一線小隊の火線分隊内において攻撃前進し克く分隊長を輔佐して積極勇敢に前進し殊に郝村北方に於ける第三回目の薄暮攻撃に當りては分隊長と共に率先々頭に立ち敵の火點左翼に突入して該火點を確實に占領し更に追撃前進に移るや敵の後方陣地よりする射撃愈々熾烈となれるも不屈不撓分隊長に従ひ猛進しありしが途中惜しくも敵の一彈胸部を貫通し午後六時遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。



氏の戦陣に臨むや彈雨の下毎戦沈着每發必中の射撃を以て敵を制歴し或は率先前進勇敢に突入して敵の堅陣を奪取し或は不屈不撓飢渴に耐へ惡路を冒して猛追し終始小銃兵たる本領を發揮し以て所屬隊戦勝に大なる貢献を爲した。實にかくの如きは一死報國の念に燃へ斃れて後已まんとせる旺盛なる攻撃精神の發露と謂ふべきである。聖戦中途此の勇士をして北支の華と散らしめしは洵に痛惜に堪えざるも氏が奮戦力闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史を飾り其の芳名は武人の華として千古に誦はれ不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると共に遺族の多幸を加護して己まぬ

であらう。

氏は戦元の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H S)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 井原 數馬

#### 勇敢舟を奪ひて小隊を渡河せしめ勇戦奮闘松花江の華と散る

氏は廣島縣豊田郡田萬里村の人にして實父(亡)を八幡勘四郎實母(亡)をゼンと云ひ大正四年一月七日に生れ其の後井原家を繼ぎ妻ミサエとの間に未だ子はなかつた。資性温厚篤實職務に忠實にして責任觀念頗る旺盛進んで難局に當るの美風があつた。昭和四年三月河内高等小學校を卒業し其の後は農業に従事してゐた。昭和十一年三月徴兵として滿洲山城鎮獨立守備歩兵大隊に入營同年四月哈爾濱獨立守備歩兵大隊に轉屬したが入營以來軍務に精勵諸般の成績優秀にして同年九月には精勳章を附與せられ翌十二年三月上等兵に進級し八月には伍長勤務を命ぜられた。此の間日夜駐屯地附近警備の重任に服すると共に昭和十一年度に於ては瀋江省五常縣會龍山忙牛河畔及拉林河左岸及巴彥縣下の討伐に従事し殊に十月七日には林家店南方中州の戦闘に勇戦奮闘克く所命の任務を完うして中隊の治安肅正工作を容易ならしめた。

昭和十二年度後期討伐の際は見城部隊細井隊に屬し第一小隊第一分隊長代理として十月十五日勇躍出動し巴彥呼蘭兩縣境附近の治安肅正工作中二十五日午後二時稍過ぎ所屬小隊は大榆樹西方松花江中洲の楊樹林中に匪團の蠢動し居るを發見し直ちに之を攻撃せんとせしが河水深く徒涉不可能であつた。然るに恰も對岸に小舟一隻繫留しあるを發見し小隊長は此の小舟を利用し渡河して敵を攻撃するに決した。此の時氏は小舟奪取の命を受け游泳に巧なる部下三名を率ひ直ちに裸體

となり勇敢にも寒氣骨に徹する河中に躍り込み松花江を泳ぎて對岸に到りしが此の舟には船なかりし爲己むなく曳綱を持ち泳ぎつゝ舟を曳き大なる努力により見事曳航し來り直ちに先づ小隊長及第二分隊の大部を渡河せしむることを得た。然るに午後二時三十分頃敵匪約七十名は我が小隊の渡河全からざるに乗じて反撃し來り茲に彼我激戦を展開するに至つた。當時裸體の氏は此の激しき銃聲を聞くや一刻の猶豫もならじと充分武裝を整ふる暇もなく急ぎ戦線に加はつて分隊を指揮



し沈着部下を掌握し自らも銃を執りて猛射を加へ當面の敵をして其の企圖を挫折して敗退せしむるに至つた。而して退却せる敵は逐次楊樹林中に遮蔽するや氏は率先勇敢に追躡前進し小隊の最右翼最前方に於て敵との距離僅か二、三十米に迫り敵に猛射を浴びせ逐次損害を與へつゝありしが敵は楊樹林中の既設散兵壕に據り頑強に抵抗し氏は之と對戦中無念敵の一弾は左肩胛部に命中し其の射弾は左肺を貫きて右肺に停まり其の場に倒れた。氏は直ちに部下に介抱せられ收容の上我が江防艦隊に依り哈爾濱に後送せられ手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく二十八日該地陸軍病院に於て遂に名譽の戦死を遂ぐるに至つた。氏は受傷後絶命するまで一言も私事を語らず。其の敵弾に倒るゝや 天皇陛下の萬歳を奉唱し又「小隊長殿井原は残念です二十發しか弾丸は射てませんでした。もつと匪賊をやつつけたかったです」と述べ又同行せる韓警察署長が氏の銃を執りて射撃するや「小隊長殿井原の銃がありません」と叫び又輕機銃の殘弾少しと聞くや「井原の弾丸を射つて呉れ」と言ひ其の後ハルビン陸軍病院に於て死期迫るや氣息奄々たる裡に「出動後僅か十日で斃れるのは残念だ早

く瘞つて討伐に行きたい」と述べ言々句々聞くものをして襟を正さしむるものがあつた。しかし小隊は氏等の奮戦と尊き犠牲により激戦三時間の後多年松花江中流に蟠踞して猛威を逞ふしありし匪首の根據地を撃滅し爲に彼等は永年の巢窟を放棄し其の妻子を同伴して遠く松花江左岸巴彥東方蒙古山方向に遁走するに至り呼蘭縣東南部に於ける治安の痛を除去する事を得たのであつた。

因に戦死後血染の軍衣の衣裏中に妻より氏に送れる書面が現はれた。それには支那事變の擴大と共に村内出征者よりも名譽の戦死者續出せる旨を述べ軍國の妻として夫君の奮闘を祈り激勵せるもので一同は健氣な妻の激勵と氏の立派な最期に再び軍衣の袖を絞つたのであつた。

柳も北滿の警備たるや南中北支の戦線に比し世人の注目を牽くこと少きも其の實外は滿蘇國境一觸即發の危機に備へ内は同胞大陸發展に不可欠の治安肅正を要し其の重任と苦心とは蓋し想像の外であつた。然るに氏の入營するや此の環境下日夜緊張對蘇必勝對匪必滅の猛訓練に精進し明日の戦闘準備に遺憾なかりしのみならず其の一度討匪に赴くや或は勇敢塞流に身を躍らし或は武裝を整ふる暇もなく戦線に進んで奮戦し常に挺身部下を指揮する等其の一舉一動悉く小隊戦勝の因を爲したものであつた。しかも死期迫るも一言私事に亘らず唯々敵を討たんとする一念のみであつた。實にかくの如きは旺盛なる攻撃精神燃ゆるが如き盡忠至誠の發露と謂ふべきである。偶々討匪の戦に散りしは痛惜に堪へざるも其の奮戦玉砕して滿洲の治安に貢獻したる披群の武功は千載に亘り滿洲建國史を飾るのみならず長くも侍從武官御差遣の際隊長より其の戦況と共に氏の戦死を報告せられし事は洵に死して尙餘榮ありと謂ふべきである。今や不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇猷を扶翼し奉ると共に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

陸軍歩兵伍長勳七等功七級 林 逸 平

勇敢機敏の輕機關銃手要點奪取を成功せしめ琉璃河畔に玉碎す

氏は長野縣諏訪郡川岸村の人にして亡父を杉太母をたにと云ひ大正二年七月三十日に生れ未だ獨身であつた。資性温順誠實にして而も進取的氣概に富み幼にして父を喪ひ爾來母親の手一つに育てられ所謂親一人子一人にて頗る親孝行であつた。昭和三年三月郷里の川岸小學校高等科を卒業し爾來家業たる製絲業を手傳ひ精勵大いに努力し同九年十二月徴兵として旭川歩兵聯隊に入營し間もなく滿洲に派遣せられ熱心軍務に精勵しつゝ各地の警備匪賊討伐に任じ其の間上等兵に進められた。氏は入隊以來優秀なると親一人子一人の關係上特に昭和十年十月一年歸休として善行證書を附與せられて除隊し次で滿洲派遣中の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遼山部隊に編入せられ關中隊の輕機關銃手として勇躍征途に就き北支に到着するや連日降雨泥濘飢渴の難行軍を續けて永定河畔に進出し九月十四日所屬部隊は同河を敵前渡河して對岸の敵を攻撃し其の一角を奪取した。續いて所屬大隊は速かに敵の背後に出で其の退路を遮斷すべき重要な任務を受け將兵一同の志氣は益々振起し愈々必勝の信念に燃へ夜暗に乗じて敵陣の間隙を索め途中少敵を一蹴しつゝ琉璃河畔にまで深く進入した。而して此の方面塙頭鎮附近の既設陣地には敵兵あることを偵知し大隊長は直ちに此の敵を攻撃すべく所要の命令を下達した。時に十六日午前十一時五十分であつた。而して大隊は直ちに展開し攻撃準備中敵は小癩にも我を劣勢と侮りてか突如攻撃に轉じて來た。所屬中隊は大隊の右第一線となり戰鬪の支撐たるべき要地狼家庄に向つて攻撃前進し同部落の内外に於て壯烈なる爭奪戰が起つた。氏の分隊は第一線右小隊の火線分隊となり雨飛する敵彈を冒して狼家庄西側の村端に射撃陣地を

占領し至近の巨砲より迅速機敏に猛射を開始した。此の時に於ける氏の沈着せる射撃は最も正確にして次ぎ／＼に敵を殲ぎ倒し其の効果は甚大であつた。次て要地爭奪の白兵戰は壯烈を極めたが遂に敵を塙頭鎮方向に潰走せしめ中隊は直ちに狼家庄の前端に進出し塙頭鎮の敵に向ひ攻撃を續行した。然るに同部落の西北角に敵の重機關銃現出し我に掃射を加へ中隊の前進は時と共に困難を増加するの狀況となつた。是より先氏の所屬輕機分隊は戰況の推移を判斷し最も敏速に村端に進出して塙頭鎮村縁の敵に正確なる猛射を浴びせ敵線を次ぎ／＼に制壓しつゝあつた。

中隊は之等全火力を最高度に發揚して銳意前進に移り輕機分隊も亦一躍進せんとする利那敵の一彈は無念氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂げた。併し中隊は氏等の尊き犠牲と勇戰奮闘に依り戰鬪を有利に進展せしめ當面の敵を撃破し潰走せしむるに至つた。

氏は今次の聖戰に参加するや滿洲事變の體驗に自信を高め常に率先垂範分隊の中堅となり幾多の辛酸を克服して志氣益々旺盛敵彈雨注の下も更に意とせず沈着機敏而も細心勇敢に輕機關銃の全威力を發揚し銃手の本分を全うして遺憾なかつた。是畢竟一死君國に報せんとする盡忠至誠の顯現にして正に軍人の精華と謂ふべきである。斯かる忠烈有爲の士を喪へるは痛恨哀悼の情を禁し得ずと雖も氏の赫々たる武勳は千載に亘り皇軍戰史を飾り芳名は千古に傳へられ不滅の忠魂は護國の神となり神靈尙も皇國を守護し老母の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。



氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙せられ青色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(T.M.)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 原田 義 徳

#### 沈着勇敢の小銃兵奮戦克く歩兵の本領を發揮して南口鎮に散る

氏は熊本縣葦北郡津奈木村の人にして父を義一母をトメと云ひ大正六年三月十日に生れ未だ獨身であつた。資性温順誠實にして敬神崇祖の念厚く諸事熱心動作敏活大事に臨みては頗る勇敢であつた。昭和七年三月津奈木高等小學校を卒業其の後農業に従事し同八年四月朝鮮窒素肥料株式會社徒弟會に入所し翌九年三月其の課程を修了して爾後同會社の職員として勤務してゐた。昭和十年三月現役志願兵として滿洲承德獨立歩兵隊に入營爾來軍務に精勵諸般の成績優秀にして上等兵に進級し又其の間各地の討伐に参加し且警備の重任に服してゐた。

支那事變起るや千田部隊長尾隊に屬し第一小隊第三分隊小銃兵として昭和十二年七月十一日國境線を越え勇躍征途に就いた。而して北支に到着七月廿七日より清河鎮北苑西苑の戰闘に参加し同卅日には小南庄附近の戰闘及追撃に積極勇敢に奮戦活躍して克く其の任を完うした。八月十二日所屬部隊は南口鎮の敵攻撃の爲午前三時より行動を起し夜暗に乗じ敵陣地に近接し午前六時五十分頃敵前千五百米の地點に進出し同七時氏は第一線小隊の火線分隊内にありて虎峪村南方俗稱二ツ山高地の左高地に向ひ攻撃前進を起した。此の時敵彈頗る猛烈恰も篠衝く雨の如くであつたが氏は之に屈することなく分隊長指揮下に率先躍進又躍進して勇進を續け又停止の際は每發必中の射撃に専念して逐次敵を噓しかくして遂に敵前二百米にまで近迫し火力を最高度に發揚し突撃の機熟して愈々中隊長の突撃命令下るや分隊長に従ひ猛烈果敢銃剣を揮つ

て率先突入り鬼神の如く奮戦午前七時五十分遂に敵陣地最右翼の一角を占領した。然るに左前方よりする小銃機關銃彈は頗る猛烈を極め且迫撃砲を集中し來りしが氏は之に屈することなく沈着して狙撃に全力を盡し又此の間絶えず敵情に留意して屢々有利なる敵情を發見し殊に左前方八百米よりする敵迫撃砲及機關銃の陣地を確認して逸早く之を報告する等只



管戰勝に向つて奮闘中午前八時頃無念敵の迫撃砲彈氏の右側に落下炸裂し右頸動脈を切断せられ遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。

氏や平素温順しかも戰陣に立つや別人の如く雨下する敵陣下に沈着狙撃し、勇敢前進し、率先鬼神の如く突入りして遺憾なく歩兵の本領を發揮した。實にかくの如きは一身を君國に捧げ斃れて後已まんとせる旺盛なる攻撃精神の發露にして是畢竟盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。參戰幾何もなくして北支の華と散りしは痛惜盡きさるも士は百戦功なくして瓦全を耻づ。氏が南口の一戦に奮戦玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戰史に輝き其の芳名は万

世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇國並に一家の前途を守護して已まぬであらう。氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(H.S.)

## 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 原山正義

## 擲彈筒彈藥手黃村攻撃に奮戦活躍して遂に玉碎す

氏は長野縣長野市西長野町の人にして父を陸太郎母を久米と云ひ大正三年九月十五日生れで未だ獨身であつた。資性淡泊明朝にして不屈の氣概に富み義務心が厚かつた。高等小學校卒業後長野商業學校に入學し昭和八年三月卒業父を扶けて家業に従事し昭和十年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵して優良の成績を挙げ上等兵に進級し翌十一年七月歸隊除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召遼山部隊久保中隊に編入せられ宮下小隊第四分隊の擲彈筒彈藥手として勇躍征途に就いた。かくて北支に到着するや所屬部隊は直ちに涿州會戰に参加し九月十六日南泊を十八日には涿縣を攻略した。此の兩戰闘に於て氏の小隊は中隊の豫備隊であつたが氏は屢々警戒連絡等の任に服し勇敢積極的に其の任を完うした。

涿州會戰に大勝利を得た我が軍は續いて保定攻略の爲大冊河の線を追撃し所屬部隊は二十一日大冊河畔黄村の堅陣を攻撃する事となつた。黄村附近の敵は中約百米深サ一米内外の大冊河を前にして黄村附近に數線の陣地を構築し且高サ三米もある對岸の堤防上には有力なる監視部隊を配置し更に其の一部隊は河中の中洲を占領し我が渡河に備へて居た。所屬部隊は二十一日夜渡河を敢行し先づ中洲の敵を夜襲撃退し對岸黄村附近の陣地を攻撃する事となつた。此の時所屬加島大隊は左第一線となり中洲の敵を渡河夜襲し引續き敵陣地攻撃の任務を受け氏の所屬久保中隊は大隊の左第一線となり二十一日午前零時渡河を開始するや折柄の月明に早くも我が行動を知つた中洲の敵は我に向つて猛射を浴びせて來たが中隊の將兵は水深胸に達する河中を一意猛進して中洲に達すると共に白刃を閃めかして突撃し敵は忽ち退却した。第一線中隊

は退却する敵に尾して再び渡河して彼岸に達した。此の時河岸の敵監視部隊は既に退却し大隊は部隊の集結を了るや否や全身ズブ濡れの儘右翼大隊と連繫して敵の第一陣地に向つて前進した。敵は雨や霰と猛射を浴びせて來たが中隊は躍進又躍進して其の猛火を冒し敵の第一陣地目がけて前進し面も振らず敵陣に突入した。敵亦必死の抵抗を試み此に彼我入り亂れて肉弾相搏つ猛烈なる白兵戦を展開した。併し我が必死の猛攻に耐えかねた敵は遂に多數の屍體を遺棄して敗走するに至つた。かくして敵の第一陣地を奪取した中隊は息つく間もなく第二陣地に向つて前進した。待ち構へた第二陣地の敵は嵐の如き猛火を浴びせ來り中隊は既に相當の死傷者を生じたが敵の第一陣地を突破し意氣衝天の將兵は志氣益々旺盛遂に敵の第二陣地前五十米に近迫した。然るに敵火は益々熾烈となり殊に機關銃の側防火は猖獗を極め爾後に於ける我が第一線の前進は頗る困難となつた。此の頃氏は筒手を助けて敵の自動火器に爆彈の雨を浴びせて居たが今や突撃準備の爲擲彈筒の威力を最高度に發揚せんとするの時に方り殘彈乏しきに氣付いた氏は敵彈雨飛動かば必死の状況にも不拘決然起つて



之が補充に走り九死に一生を得て歸來し筒手をして其の射撃に支障なからしめたのであつた。氏は彈藥補充の後我が彈着の觀測並に敵情に注意して居たが忽ち左前方二本木附近に敵の側防機關銃ある事を發見し直ちに之を分隊長に報告した。分隊長は機を失せず號令して該側防機關銃に射撃を集中し遂に之を沈黙せしむるに至つた。此の機に中隊長は決然陣頭に躍り出で突撃を令するや全線突進敵陣に突入し奮戦の後遂に其の一角を奪取し逐次戰果の擴張に努めた。此の頃天漸く明

け初めしが中隊が敵陣地に突入するや氏の分隊は直ちに之に追及すべく前進を起した利那無念！氏は左胸部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。併し所屬中隊は氏等の奮闘と尊き犠牲により遂に黃村を攻略し二十四日には保定城頭高く日章旗を翻したのであつた。

氏の戦場に立つや決死報國の堅き決意の下に終始沈着剛膽猛火を冒して彈藥を補充し或は射彈の觀測に任じ殊に重要時機に敵側防機關銃の位置を發見し以て近代兵器擲彈筒の威力を遺憾なく發揮せしめた其の功績は寔に偉大なるものであつた。然るに參戰幾何もなくして此の忠烈勇敢の士を喪ひしは洵に痛惜忍び難き次第である。併し其の肉體はうせたりと雖も氏の樹てたる赫々の武勳は千載に亘り皇軍戦史に輝き芳名は千古に轟はれ其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(OM)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 濱口秀三郎

#### 滄州會戰中難局に奮闘し遂に姚官屯血戰の華と散る

氏は鳥取縣岩美郡大岩村の人にして父を吉藏母をすなと云ひ大正四年八月二十八日に生れ未だ獨身であつた。性温良氣宇闊大にして寡黙沈勇の人であつた。昭和五年三月大岩小學校高等科を卒業し其の後雄圖を抱いて南洋に渡つたが不幸病氣の爲歸國し歸來専ら父母を扶けて家業に精勵する傍青年學校に通學して其の課程を修め昭和十一年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し下士官候補者として熊本陸軍教導學校に分遣せられ在學期間成績優秀にして五種類の賞状を附與せられ前

途有爲の材幹として其の將來を囁目されて居た。

支那事變起るや間もなく長野部隊篠原中隊に編入せられ第三小隊輕機關銃分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘の難行軍を續け津浦沿線を南進し九月九日十日の兩日は馬廠本陣地の西北鎖鑰たる小王莊流河鎮の兩堅壘を突破して馬廠陣地帯互解の端緒を開き續いて其の西方要衝丁莊の堅壘を席卷して偉大なる戦果を

收めた。氏は其の間克く分隊を指揮掌握し適時有效なる猛射を浴びせて敵を壓倒し戦勝獲得に寄與せる處甚大であつた。



た。所屬大隊は中央第一線を命ぜられ氏の中隊は大隊の第一線として同月二十一日午後六時行動を起し夕闇に紛れて人合庄の北側水濘の線に潜行した。對岸の敵はそれと察してか嵐の如き十字火を浴びせて來たが午後八時敢然水濘通過を開始した。氏は適切機敏なる射撃指揮を以て對岸の敵を制壓して小隊の行動を容易ならしめ續いて對岸の要點に進出して敵の猛射を浴びつつも逐次に活動中の敵機關銃を索め有効適切なる射撃を以て之を制壓震駭し以て人合庄部落に對する突撃の



動機を作つた。やがて午後九時突撃に移るや率先之に突入した。然るに部落内の敵は死物狂の抵抗を爲し又部落周囲の敵は夜半熾烈なる猛射撃に膚接して奪回攻撃を企圖し前後二回に亘り人合庄部落に向ひ湖の如く殺倒し味方は大隊長以下多数の戦死傷者を出したが氏は冷靜沈着適切なる射撃指揮に依り敵に多大の損害を與へて之を撃退し二十二日午前九時頃周囲の敵を完全に掃蕩し部落の南端を確保するを得た。此の日は實に奥行二千米を突破し敵の第二陣地直前に攻撃陣地を占領したのであつた。而して二十三日午後六時頃より攻撃を再興したが眼前には幅約十米深さ三米の大水濠が僅かに二十米を間して蜿蜒帯の如く横はり後方水濠の直後には一連の鐵條網を設け更に其の後方間近には無数の掩蓋陣地が櫛の齒の如く並び又其の後方にはトーチカ入りの重機關銃並に迫撃砲を葦布し眞に難攻不落の堅壘たるを思はしめた。折柄敵は陰曆十七日の月光を利用し絶え間なく亂射亂撃を加へ來り味方は既に第一陣地の戦鬪に引續き大なる損害を受けて居た。午後九時左右の隣接大隊は運河地區及鐵道線地區の突破に成功し敗退せる敵は所屬大隊正面の既設陣地に遁入し窮鼠の構を以て彌が上にも猛射を浴びせて來た。所屬大隊長は悲憤の涙を袖に紛らかし午前四時を期し突撃敢行の命令を下した。時到的るや氏は分隊を提げ飛鳥の早業を以て水濠鐵條網を乗り越えて最も有利なる射撃位置に進出し先づ敵の自動火器を撲滅し障礙物破壊班を適切に援助し以て中隊の突撃を誘起し其の突撃に際しては部下分隊を打て一丸となし壯烈果敢に突入して敵陣地の一角を占領し更に機を失せず戰果擴張に奮闘中無念！敵手榴彈の爲胸部に爆創を受け壯烈なる戦死を遂げた。所屬中隊は本戦開闢實に中隊長以下約百名の尊き犠牲を出したが午前五時敵陣地を奪取し午後九時掃蕩を終り壘上高く日章旗を翻へすを得た。生存者は天を拜し地に跪ぎ我が上官战友の尊き遺骸に取りすがり萬感胸迫り唯嗚り泣きの聲がしめやかに聞えて居たとの事である。

氏は豪膽不撓の反面極めて情誼に敦く克く上官に事へ部下を慈しみ特に選ばれて輕機關銃分隊長の榮職を命課され慧眼克く戦機に投して其の卓越せる火力を發揚して頑敵を壓倒し又突撃時には常に率先陣頭に立ちて頑敵を粉碎し以て赫々たる戦勝の尊き礎石をなして居た。是全く滅私報國の士にして初めて能くし得べき所寔に皇軍幹部の龜鑑と云ふべきである。今や風發叱咤の聲絶え其の壯容に接すべくもなく痛惜禁ずる能はずと雖も其の功績は皇軍戦史に輝きて芳名は不朽に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 萩原福太郎

#### 猛火を冒して第一線に突撃命令を傳達し突入直前王谷莊堡の華と散る

氏は茨城縣東茨城郡小川町の人にして父を定治郎母をよし子と云ひ大正二年六月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性温順にして而も敢爲の氣魄に富み孝心深く業務に熱心にして郷黨の模範青年であつた。昭和三年三月小川小學校高等科を卒業引續き實業公民學校に入り同五年三月同校を卒業した。在校間は成績優秀にして町教育會よりも二回表彰せられた。學校卒業後は専ら家業に精勵し昭和九年二月徴兵として水戸歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し學術の成績優秀にして上等兵に進級し更に伍長勤務を命ぜられ翌十年十二月満期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黒部隊大根田中隊に編入中隊指揮班員として同月十七日勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し九月十四日永定河畔西玉及東徐附近の戦鬪に参加した。此の時氏は常に中隊長の傍にあり其の命令の傳達に任して克く中隊長を輔佐しつゝ對岸よりする敵の猛火を冒し深さ一米餘の濁流を渡河して敵陣地の側背に進出し愈々突撃に際しては中隊長と共に率先敵陣に突入頑強に抵抗せる敵を撃退して該陣地を占領し大隊爾後の渡河攻撃を容易ならし

めた。次で十五日拒馬河畔の戦闘に際しては暗夜しかも敵彈雨飛の間各小隊との連絡に任じ熱心中隊長を輔佐して其の指揮を容易にし十六日拂曉の攻撃に際しては中隊長と共に敵陣に突入し以て渡河を妨害する頑強なる敵をして敗退せしむるに至つた。

九月二十二日大冊河の戦闘に際し所屬中隊は堅固なる堡壘に據り掩蓋機關銃二を以て頑強に抵抗し隣接坂西部隊の渡河



を極力妨害しつつある敵陣に對し攻撃を命ぜられた。中隊は急激の如き敵彈下を一進一止敵を制壓しつゝ前進し遂に敵前至近の距離に近迫した。此の間氏は彈雨の下之を意に介せず終始中隊長を輔佐して第一線小隊との連絡を確保し中隊長の戦闘指揮掌握を容易ならしめ愈々突撃を起さんとするや此の頃彼我の戦闘益々激烈となり敵彈一層熾烈を極め戰場行動は單獨兵と雖も頗る危険なる状態なりしにも拘はず氏は身の危険を顧みず勇躍任に就き戦線を疾驅して各小隊長に中隊長の突撃命令を傳達し微傷だも負はず其の重大使命を果し以て中隊長意圖の如く突撃を實施せしむるに至つた。而して氏は

中隊長と共に率先々頭に立ちて敢然突進せしが將に敵陣に突入せんとする直前無念掩蓋機關銃の射撃を蒙り頭部及腹部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戦死を遂ぐるに至つた。  
氏郷に在りては模範青干と謂はれ出でて戦陣に立つや彈雨の下頗る勇敢毎戦中隊長の股肱となり戰場を馳驅して傳令の重任を果し或は率先敵陣に突入し指揮班員として又小銃兵として其の本領を發揮し遺憾とする所なかつた。殊に王谷莊壘

の突撃直前に於ける傳達の如き正に傳令の鑑と爲すべきである。是畢竟指揮機關の一員たる重責の存する所一身を君國に捧げて斃るゝまで其の職責に邁進せる旺盛なる責任觀念の發露盡忠至誠の顯現と謂ふべきである。然るに參戰幾何もなくして大冊河畔の華と散りしは洵に痛惜に堪へざる次第である。併し氏が活躍奮闘して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り皇軍戦史に輝き其の芳名は万世に武人の華と謳はれ不滅の英魂は護國の神となりて神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂れて已まぬであらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(HS)

### 陸軍歩兵伍長勳八等功七級 橋口藤吉

#### 眞兵良民の勇士、上海齊家宅の夜襲に奮闘して玉碎す

氏は宮崎縣西諸縣郡高原町の人にして父は既に歿し母をサトと云ひ明治卅五年十一月七日に生れ橋口家を相續し養父母既に歿して妻シズエとの間に市助、トシ、ユキ及スミ子の一男三女を擧げた。性温厚篤實にして孝心深く人に接して明朗親切郷黨の模範人物として諸人の敬愛を受けて居た。郷里の小學校卒業後は家庭に在りて家業に従事する傍青年訓練所へ入所して所定の課程を修了し大正十二年一月徴兵として都城歩兵聯隊へ入營能く軍務に勉勵して翌十三年一月歩兵上等兵を以て歸休除隊となつた。歸郷後は再び家業たる農業に精勵し親を慰め妻子を善導し一家の柱石となり克く家庭を修めて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月下旬應召に際し妻子に向ひ「天皇陛下に捧げた此の身だ、生還は期せぬぞ、何分親を大

切に頼む。それから子供に氣を付けよ、火の用心も、そしてお前もからだを大切に怪我病氣せぬ様用心しろよ」と云ひ殘し勇躍所命部隊へ到着、郡司令部沼口中隊に編入せられ第三小隊第一分隊員として征途に就いた。斯くて所屬部隊は九月中旬上海へ到着、直ちに戦線の後方要點の警備に服務して居たが十月九日より十三日にかけて王家宅及孫家屯方面の追撃戦闘に参加を命ぜられた。此の際所屬小隊は中隊の豫備隊として行動し孫家宅占領後氏は第一線の警戒兵として晝夜に亘り

豪膽不撓其の職責に邁進しよく其の重任を全うした。



所屬中隊は十月十四日齊家宅附近の敵陣地を夜襲すべき任務を以て同夜午後八時卅分行動を起し午後九時夜襲を決心せんとしたが月出でし爲之が決行を延期し敵前の部落に待機して午前二時月の没するを待ちて再び行動を起し隱密に齊家宅部落に向ひ近迫した。然るに進路の左側方約二百米に在る唐家宅の敵陣地より俄然猛烈なる側射を受けた。此の時所屬小隊は齊家宅の北部占領の任務を與へられ第一線に在つたが氏は敵の猛射に屈せず率先躍進を續けて分隊の前進を誘起し午後九時先づ部落の北端を占領し更に同夜午前三時半齊

家宅の中部及南部の敵陣地に對し一齊突撃を決心せらるるや氏は第一突撃隊として疾風迅雷之に突入り得意の銃劍術を以て頑敵を刺殺する事數知れず先づ中部の敵陣地を奪取し更に戦果を南部の敵陣地に擴張せんとした。然るに同陣地は其の後方に第二の陣地ありてクリークを前にし之に鹿岩生籬を設けて頑強に抵抗し氏等の攻撃前進を頑強に阻止し爾後の前進は意の如く進捗しなかつた。茲に於て我が工兵破壊班は決死爆破作業の爲前進したが熾烈なる敵の十字火を受けて作業不成功となつた。氏は憤然として突入路の發見に努めつゝありし際前面並に兩側面の小銃並に機關銃より篠衝く雨の如き猛射を受け無念にも前頭部及下腹部其の他に數發の貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬中隊は氏等の尊き犠牲に依り其の後敵陣地前廿米に確乎たる突撃陣地を占領して之を確保し爾後の戦勝獲得の爲重要な素因を作るに至つた。

氏は志操堅實にして克く良民の本分を盡し今次聖戦に應召するや諄々妻女を教訓して後事を託し萬死に一生だも希はず潔よく身命を君國に捧げて生死の外に毅然たりし烈々たる忠誠は眞に敬服に堪へざる所である。果せるかな膠着慘烈の上海戦場に起つや泥土の中に起臥し飢渴身に迫るも志氣常に旺盛而も動かば必殺さるべき敵の彈巢地帯に唯々自己の職分に邁進し更に餘念もなかつた。頑敵粉碎の最後を見ずして玉碎せるは痛惜哀悼の情禁ずる能はずと雖も氏の高邁なる赤誠及豪勇不撓の奮戦振は眞に軍人の龜鑑と謂ふべく其の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戦史に輝きて芳名を後世に傳ふべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鷄勳章を賜はつた。(MS)

### 陸軍歩兵伍長勳七等功七級 橋本光之助

#### 孝子對空通信に勳功を奏し遂に姚官屯の血戦に玉碎す

氏は兵庫縣養父郡廣谷町の人にして父を仲藏母をなかと云ひ明治四十五年二月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性温厚明朗にして孝心深く克く長兄を扶けて家業に従事し朝夕星を載きての精勵殊に臂力衆に勝れて人一倍の仕事を爲し又宮角力の花形と迄謳はれたが常に謙讓にして誇らず友情に富み世人の愛敬を受けた居た。大正十五年三月廣谷高等小學校を

卒業し其の後は家業に従事する餘暇を以て廣谷訓練所へ通學し昭和七年一月所定の課程を終了し翌八年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し翌九年四月滿洲事變の爲渡滿し一面坡附近の警備に服し同年七月内地歸還の上歸休除隊となつたが在隊間克く軍務に精勵して良成績を挙げ上等兵に進級し精勤章及善行證書を授けられた。歸郷後は住友伸銅工場に就職したが老父母への孝養至らざるなく寸暇を利用しては兩親を慰め其の喜びを見ては我が喜びとして居た。



支那事變起るや昭和十二年八月初旬應召長野部隊森岡中隊に編入せられ井上大隊本部對空班長の榮職を命課せられ勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬北支へ到着し降雨泥濘の難行軍を続け津浦沿線を進したが當時北支は數十年來稀に見る大雨降り續いて到る處泥濘甚しく而も敵軍は堤防を決壊して汎濫地帯を設け以て皇軍の前進を妨げ又果てしもなく高粱畑は地平線の彼方までも打續きて丈餘に茂り諸兵種の地上搜索を著しく困難ならしめ加ふるに敗殘兵及便衣隊は所在に横行して我が通信網に妨害を與へありし際とて對空通信は作戰上極めて重要な役割を演じて居た。氏は此の重責に鑑み殆ど不眠不休部下を督勵して其の職分に精勵し殊に九月六日小超家澤に於ける友軍飛行機との連絡に際しては班員を指揮して迅速確實に通信筒に依る連絡を完了し馬廠本陣地の作戦に至大なる便益を與へた。續いて同月十日馬廠附近の攻撃中友軍飛行機の飛來するや機を失せず班員を指揮して彈雨を冒し對空布板を以て第一線を標示し以て友軍飛行機の對地攻撃に的確なる憑據を與へた。斯くて所屬部隊は馬廠本陣地西北の鎖鑰たる小王莊及流河鎮の兩堅壘を奪取して馬廠

陣地帯瓦解の端緒を開き更に其の西方要衝たる丁莊附近の堅壘を席卷して偉大なる戰果を收め引續き敗走する敵を急追して滄州陣地の一角たる高官屯を占領し人合庄以南の敵主陣地に對する攻撃を準備した。滄州附近の陣地は敵が津浦線方面に於ける最後の抵抗線と恃める堅陣にして二年有半の歲月と多數の人員材料を用ひ外國將校の指導下に近代的の防禦施設を完了し難攻不落の堅陣と豪語して居た。

所屬大隊は九月二十一日中央第一線として午後六時行動を起し第六第八中隊を第一線とし夕闇を縫ふて人合庄北側水濠の線に潜行し熾烈なる敵火を物ともせず幅約四米深約三米の水濠を通過し續いて人合庄附近の第一線陣地に突入し徹宵激烈なる血戦を交へ二十二日朝遂に殘敵を掃蕩して完全に之を占領した。本戰團に於ては大隊長以下多數將校の重傷或は戦死者を出せる程の激戦であつたが氏は大隊長の身邊近く位置し徹突く雨の如き敵彈下而も前後二回に亘る敵の大逆襲下に毅然として部下を激勵して奮闘を續け二十二日夕刻には敵の第二線陣地より約一千里の無名部落の線に進出し翌二十三日午後六時より攻撃を續行するに至つた。敵の陣地直前には二大水濠横はり後方水濠に接し一連の鐵條網を設け其の後方地區には掩蓋陣地柵の如く並び更に其の直後にはトーチカ迫撃砲陣地物凄く配置されて居た。所屬大隊は午後九時までに前線水濠の線に取りつき突撃を決行せんとしたが月出でし爲午前四時まで突撃延期となつた。敵は我が近迫を察知し全線に亘り各種銃砲一齊に火を噴いて猛射を浴びせて來た。氏は此の際第一水濠の大隊本部位置に在りて刻々變化する狀況を報告せるのみならず慧眼克く敵の逆襲企圖を看破して大隊長の處置を敏活且適切ならしむるを得た。氏は更に敵情監視に専念して居たが突如頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戦死を遂げた。併し所屬大隊は其の後豫定の時刻を以て突撃を敢行し午前五時敵陣地を占領し續いて殘敵を掃蕩して同九時感激の日章旗を翻へした。

氏は滄州攻撃の爲前進するに當り最後の通信を家庭に送り「二度と再び故國の土を踏む事が出来ないと思ひます。何時